

本邦ニ於ケル基金竝ニ資金ノ統計ハ精確ナラス、是レ土地、建物等ヲ貨幣ニ見積リテ資金或ハ基金ト爲スコトアルモ、其見積リ方不完全ニシテ實際ニ適合セサルニ依ル、例ヘハ文部省所管學校資金等ノ如シ、而シテ特別會計ニ屬スル基金及資金ハ其種類頗ル多シ、中ニ就テ、金額ノ最モ大ナルト同時ニ亦關係ノ最モ廣キハ、大藏省所管ニ屬スル所ノ所謂三基金タル軍艦水雷艇補充基金、災害準備基金、教育基金、國債整理基金、大藏省預金利子竝ニ事業公債及鐵道公債資金等ト爲シ、緩急事有ルニ臨ンテ軍資金ノ用ヲ爲スモノハ、以上ノ三基金竝ニ大藏省預金利子等トス、而シテ日露戰爭前ニ於ケル三基金ノ現計ハ軍艦水雷艇補充基金三千二百萬圓、災害準備基金一千四百一十一萬圓、教育基金一千四十一萬圓ニ達セリ、其他特別會計ニ屬スル所謂作業資金中其當時固定資本ニ屬スルモノ一億三千五百四十八萬圓、運轉資本二千四百二萬圓ニ達セリ、然リ而シテ、軍艦水雷艇補充基金及教育基金ハ假令如何ナル事情アルモ平時ニアリテハ其基本金ヲ消費スルコト能ハサルモ、災害準備基金ハ常ニ時ノ

必要ニ應シテ費消スルコトヲ得ヘシ、但シ、其金額減少シテ一千萬圓以内ニ下ルトキハ、再ヒ之ヲ補充スルヲ要ス。

基金及資金ノ外、尙作業會計ニ屬スル官有財産ハ却テ多額ニ上リ、現在是等ノ財産ハ固定資本及運轉資本ノ二種ニ分タレ、或ハ現金ヨリ成リ或ハ土地建物器械又ハ其他ノ設備ヨリ成ル、故ニ其内容實質ニ至リテハ殆ト基金等ト異ル所ナシ、其區別ノ由テ起リシ所以ヲ尋ヌルニ畢竟スルニ一ハ基金資金會計ニ屬スルカ爲一ハ作業會計ニ屬スルカ爲ナリト解シテ可ナリ、明治四十二年度末ニ於ケル基金及資金ノ現在額ハ合計一億千五百六十九萬二千八百三十六圓九十七錢八厘、資本金額ハ合計九億七千八百四十九萬一千七百三十二圓九十六錢五厘ニシテ、總計金十一億三千十八萬四千五百六十九圓九十四錢三厘ナリトス、左ニ其大要ヲ示サン

事項	年度	資				金資及金基			
		內 現在額	譯 替額	內 現在額	譯 替額	貨幣整理資金	特別資金	仕拂預金 大藏省預金 品資金	臺灣官設鐵道用 帝國鐵道積立金
	三十六年度	一一八〇三二七八五 一六	〇	三三〇六七七三三 一七九	〇	二六一五一七三 八八〇	三三〇六七七三三 一七九	二〇〇四八九四 〇〇	八二七九三四三 七二二
	三十九年度	一二四七六九二五 九一二	一六六九二五 九一二	四六七一九八七 一〇〇〇	五〇〇三〇 一七九	四六七六九九 一七九	一七七五二 八	四〇〇四八九 四〇〇	一三七五二三五 四八四
	四十二年	一二三〇〇〇〇 〇〇〇	一九〇四九 〇一九二	四六七一八九七 一〇〇〇	九八六二三 一七九	四六八一八四 九四一七九	〇	六〇九三一 〇〇〇	四三三九四 四四二七七

合 計	金				陸軍營繕費補充 資金	海軍工廠資金 大學及學校圖書 館資金	內 現在額	譯 替額	教育 基金
	內 現在額	譯 替額	森林 資金	內 公債及證券 現 金					
九二五二四五 五一一三七七	三八九〇八 一八三五六	〇	三八九〇八 一八三五六	七六六七 七四一四	四三三〇三 七〇一八	七〇六一 九七〇九八一	一〇〇四三 二七三三四一	〇	一〇〇四三 二七三三四一
一一六八五六 六一二九〇二	三〇〇二四五 四五六八	四〇〇〇〇〇 〇〇〇	七〇〇二四五 四五六八	一三二七 六七四九九	六七三〇三 九二四五	一〇八三三 九九八〇二三	一〇七二〇 三八一七八八	〇	一〇七二〇 三八一七八八
一五一六九二 八三六九七八	一〇五五六 五九八五八五	四〇〇〇〇〇 〇〇〇	一四五五六 五九八五八五	一三八一 六五六四九五	九五〇〇〇 〇〇〇	一三五五六 九九二八九九	一〇七四八 八一四四四四	〇	一〇七四八 八一四四四四

資				事項 年度
東 京 砲 兵 工 廠	專 賣 局	印 刷 局	造 幣 局	
計 運轉資本 固定資本	計 運轉資本 固定資本	計 運轉資本 固定資本	計 運轉資本 固定資本	
七〇四五八八三七九二 二〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	八六六三七二八九一五 五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	二四八二九五六〇八七 三七〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	一五〇二八九一〇三四 九九八二二七一九	三十六年度 五七四六七八三一五 九九八二二七一九
一八一四八二四六二二二 二〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	一二四三七六二六〇一六 五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	二八一七五五九〇六 三七〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	一五四四五六七〇三三 九九八二二七一九	三十九年度 五四六三五四三一四 九九八二二七一九
一九〇八六六四四〇八二 二〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	一八〇二八八三五五八〇 七〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	三五六〇三九一八六〇 三七〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	三三二八二二六七三三 二五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	四十二年 八一八二二六七三三 二五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

本			
大 阪 砲 兵 工 廠	千 住 製 絨 所	海 軍 探 炭 所	製 鐵 所
計 運轉資本 固定資本	計 運轉資本 固定資本	計 運轉資本 固定資本	計 運轉資本 固定資本
四九〇五二〇九一一〇 一五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	九五八九七七二〇 六〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	〇 〇 〇	一〇三九〇二三八四四一 四〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
一五五三二六六五五四九 一五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	一六四六六〇八五二六 六〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	〇 〇 〇	一七六一八四一〇五四三 四五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
二〇五八一六一五七六 一五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	一八二二二二五八五八 一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	五八九二二四七三九 一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	二八一三七〇六二五一一七 四五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

基金及資金 我國ニ於ケル基金及資金ノ現状

事項	資									
	帝 國 鐵 道		韓 國 鐵 道		韓 國 森 林		電 燈 用 品 製 造		本	
年 度	固 定 資 本	運 轉 資 本	固 定 資 本	運 轉 資 本	固 定 資 本	運 轉 資 本	固 定 資 本	運 轉 資 本	合 計	資 金 資 本
三十六年度	一四八六七八七〇 ^四 一〇二二	二二五〇〇〇〇〇〇〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一七六三八四三二二〇六〇	二八六五五二〇四三九六五
三十九年度	一八六七九〇五九五 ^四 六九四	二二五〇〇〇〇〇〇〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三一六四七六四三六三二五	四五三八五〇八〇五〇二〇
四十二年度	七六九六二四〇一四 ^四 七六〇	一五三三九七五四〇五一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	九四一六二七七七一九〇五	一一三〇一八四五六九九四三

凡ソ資金又ハ基金ハ元ト現金及有價證券ヲ以テ蓄積セラレ、年々利殖ノ方
法ヲ圖ルモノトス、元來基金及資金ノ管理法ノ如何ハ其目的性質ニ由テ一様
ナル能ハサルナリ、若シ軍用ノ爲之ヲ貯蓄スルトセハ、正金ヲ以テスルコト須
基金及資金 資金基金ノ貯積法

第八節 資金基金ノ貯積法

事項	資									
	帝 國 鐵 道		韓 國 鐵 道		韓 國 森 林		電 燈 用 品 製 造		本	
年 度	固 定 資 本	運 轉 資 本	固 定 資 本	運 轉 資 本	固 定 資 本	運 轉 資 本	固 定 資 本	運 轉 資 本	合 計	資 金 資 本
三十六年度	一四八六七八七〇 ^四 一〇二二	二二五〇〇〇〇〇〇〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一七六三八四三二二〇六〇	二八六五五二〇四三九六五
三十九年度	一八六七九〇五九五 ^四 六九四	二二五〇〇〇〇〇〇〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三一六四七六四三六三二五	四五三八五〇八〇五〇二〇
四十二年度	七六九六二四〇一四 ^四 七六〇	一五三三九七五四〇五一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	九四一六二七七七一九〇五	一一三〇一八四五六九九四三

一六二
ラク獨逸ノ如クナルヘシ。然レトモ斯ノ如クスルトキハ、常ニ巨額ノ正金ヲ金
融市場ヨリ引キ上ケ徒ニ之ヲ死藏スルカ故ニ、當ニ利子ノ損失アルノミナラ
ス。金融ノ圓滑ヲ防碍スル憂アリ。是レヲ以テ獨逸帝國ニ於ケルカ如ク、最モ好
機ニ乘シテ設置セラレタル軍事基金ニ非サレハ、到底正金ヲ以テ貯藏スルコ
ト能ハサルヘシ。殊ニ我國ニ於ケル三基金ノ如キ、其直接ノ目的ハ之ヲ利殖シ
テ以テ、夫レ夫レ特別ノ經費ヲ支辨スルニ存スルヲ以テ、最モ有利ニシテ而モ
確實ナル利殖方法ヲ採ラサルヘカラス。而シテ其正金又ハ現金ハ夫レ夫レ確
實ノ銀行例ヘハ中央銀行等ニ預金トスルノ外ナケレトモ、有價證券ニ至リテ
ハ便利ナル投資ノ方法タルト同時ニ、又大ニ注意スル所ナカルヘカラス。何ト
ナレハ假リニ内國債ヲ以テ之ヲ蓄積シ置クトモ、緩急事有ルニ當リ其價格
必スヤ下落スヘシ。單リ下落スルノミナラス、之ヲ賣リ拂ヒ以テ現金ニ替ント
スルモ、急速ノ間ニ合ハサルヘシ。故ニ是等ノ場合ヲ豫想シテ以テ寧ろ確實ナ
ル外國公債例ヘハ國際動産等ヲ以テスルヲ適當ナル方法ト認ム、然シナカラ、

是レトテモ又懸念ナキニアラス。何トナレハ、國際動産ニシテ若シ敵對國ノ公
債ナルカ、或ハ敵對國ノ同盟國ノ公債ナルトキハ、想ハサル不便ヲ蒙ルヘケ
レハナリ。

第十章 官有地

一六四

第一節 官有地ノ沿革

歐洲諸國ノ官有地ハ其始百姓地(民有地)ニ對スル御料地ヲ意味シ、往時王公侯伯ハ其收入ヲ以テ一般ノ國費ヲ支辨セリ。然ルニ星移リ物變ルニ從ヒ彼等ハ止ムヲ得ス漸次ニ其所有領地ヲ賣却又ハ贈與シ、擣テ加ヘテ財政ノ膨脹ヲ餘儀ナクセラレ、遂ニ其收入ヲ以テ歲出ヲ支辨スルコト能ハサルニ至レリ茲ニ於テ乎、官有地ハ其性質ヲ一變シテ、特別ノ收入例ヘハ帝王室費、國債ノ利子仕拂及其償還ニ充テタル國有財産ヲ意味スルコトト爲レリ、例ヘハ往時ノ普魯西普通法典第二卷第十四篇第十一條「國家ノ特ニ所有スル土地、土地ノ年貢及權利ニシテ君主ノ專用ニ屬スルモノハ官有地」トナシ、其第十二條「凡テ土地ニシテ其收入ヲ王族ノ經費ニ供スルモノハ官有地ト視做ス」ヘキコトヲ規定セシカ如シ、詳言スレハ、數百年來歐羅巴ニ於テハ君主ト議院若クハ人民

ノ代表者トノ間ノ争ヒ烈シカリシカ、其漸ク平穩ニ歸シタルハ、十九世紀ノ中葉以後ノコトナリ、サレハ帝王室ノ尊嚴ヲ保ツ爲ニ、成ルヘク議院ノ豫算議決權以外ニアル所ノ財源ヲ以テ王室費或ハ帝室費ヲ支辨スルノ手段ヲ講シタリ、之カ爲官有地ノ幾分ハ帝王室有ニ移サレ、縱シ帝王室有ト爲ラサルマテモ、尙其收入ヲ以テ宮廷費ヲ支辨スルノ主義ヲ採レリ、尤モ墺地利ニ於テハ古ヨリ皇室ノ世襲私産ト官有財産トヲ區別シタリシカ、其官有財産ノ最大部ハ國債償還ノ爲賣却セラレ、今ヤ剩ス處多カラス。

君主ノ私有財産ニ屬スル土地ハ公然ノ性質ヲ有スト雖モ、其取得及所有ノ原理ニ徴スルトキハ恰モ一人ノ財産ノ如ク、世襲所有者タル君主ノ專用ニ歸シタルモノナレハ之ヲ官有地ニ包含セス、サレハ官有地ト帝王室有地トノ分界ハ往々議會及帝王室間ノ爭議トナリシカ、獨逸諸國ニ於テハ君主ト議會トノ間ニ於ケル特別ノ協定ニ依リテ之ヲ解決セリ、是レ何レノ土地ヲ官有地トシ何レヲ帝王室有トスヘキヤ殆ト區別スヘカラサレハナリ、即チヘつせん

大公國ニ於テハ憲法ニ依リ從來ノ官有地ヲ分割シ、其三分ノ一ヲ國有トシテ國債ノ償還ニ充テ、其三分ノ二ヲ君主ノ世襲財產トナシタリ。他國ニ於テモ同一ノ例ヲ追ヒタル國少カラス、是レ獨逸ニ於テ殊ニ御料地ノ存在スル所以ナリ。

加之、往時金融機關備ハラス資本ノ増殖セサリシヤ、國家ト雖モ信用薄ク所謂公ノ信用ハ私ノ信用ニ比シテ却テ發達セサリシカハ、政府ハ國債ヲ募集スルニ方リテモ、常ニ擔保ト爲ルヘキ財產ヲ提供スルノ必要ニ迫ラレタリ、而シテ其擔保トシテ提供セラレシハ大抵官有地ナリキ、斯ノ如ク官有地ハ特別ノ目的ノ爲ニ利用セララルコト愈々多ク、今ヤ漸ク減少シ盡セリ。是レソ官有地ノ收益ヲ以テ、一般國費ヲ支辨スルコト、不可能トナリシ所以ノ經過ナル。

第二節 官有地制度

官有地ニハ廣狹ノ二義アリ。予輩ハ茲ニ姑ラク狹義ノ解釋ヲ採リ、官有地ト

ハ官有耕地及之ニ附屬スル權利ナリト定義セントス。佛蘭士ノ國法ハ、特ニ此點ニ注意シ、其所謂「グロム」ハ即チ官所耕地ニ當リ、以テ明カニ其他ノ官有地殊ニ官有財產ト區別シ且其管理法ヲモ異ニセリ。普魯西ニ於テモ亦同一ノ規定ヲ存シ、苟クモ官有地管理官ニ於テ管理スル土地ナレハ直チニ之ヲ官有地ト看做スコトヲ得ルナリ。サレハ國家ノ所有ニ屬スル土地ハ悉ク官有地ナリト云フヲ得スシテ、就中國家ノ主權ニ起由スル國有財產ハ官有地ニ非ス例ヘハ道路河川海港等ノ如キハ、其所有權國家ニ屬スルモ之ヲ官有地ト看做サス、凡ソ官有地ノ所有權ハ私法上ノ規定ニ基クニ反シ、前者ハ公權ニ基キ、公益ノ爲國家ノ占有スル所ナリ、又學校、官廳、建物、城塞、砲臺、練兵場ノ如キ國家特定ノ用途ニ充ツル土地建物ハ、之ヲ所有スルニ由リ設令年々多少ノ收益ヲ生スルモ、仍チ官有地ニ含容セス、鑛山モ亦然リ。

我國ニ於テハ、現行法上未タ官有地ニ關スル明確ノ規定ナシ、唯概括シテ官有財產及官有地ノ名稱ヲ存スルアルノミニシテ其規定固ヨリ一樣ナラス、官

有財産管理規則(明治三十三年四月一月勅令第五百七十五號改正)第一條ニ據ルニ、官有財産ト稱スルハ國家ノ所有ニ屬スル土地、森林、原野、營造物、家屋、船舶及其附屬物ヲ指シ、而シテ官有地取扱規則(明治二十二年十一月號)第二十二條ニ依ルトキハ、管ニ官有耕地ノミナラス、一般公有地及公有ノ水面ヲモ含ムノ明文アルヲ見ル。

我國ニ於テハ、官有地ハ内務大臣ノ所管、官有地取扱規則第一條ニ屬スルモ、官有財産ハ各省大臣ノ管理スル所タリ(官有財産管理規則第二條)既ニ此點ニ於テモ法理上ノ矛盾アルヲ免レス、何トナレハ官有地ハ無論官有財産タルヲ以テナリ、加之各省ニ於ケル其取扱法モ亦區々ニシテ、殆ト臺帳スラモ備ヘサル所アリト云フ。蓋シ、官有地及官有財産ハ、人民ノ權利義務ニ關スル所少キヲ以テ、必スシモ法律ヲ以テ之ヲ規定スルノ必要ナキカ如シト雖モ、其實決シテ然ラス。官有耕地ノ設定、賣買、讓與、拂下、貸下等ハ、直接間接ニ國民ノ權義ニ關スル場合尠カラサルノミナラス、其維持保存ニ關シテハ、常ニ多少ノ經費ヲ要ス

ルカ故ニ議會ノ協賛ヲ經サルヘカラス、且ヤ新ニ之ヲ設定セントセハ、多大ノ經費ヲ要スヘシ。隨テ豫メ法律ヲ以テ之ヲ規定スルヲ正當トス。

各國ノ法律上、所謂「ごめーん」中ニ山林ヲ包含スル例アリテ、未タ一定スル所ナシト雖モ、多クハ寧ロ兩者ヲ分離スル傾向アリ、予輩モ亦此說ヲ採ル、是レ國有森林ノ管理經營ハ、官有地ニ比シテ大ニ其主義方針ヲ異ニスルノミナラス、其國土經營ニ關スル點ヨリ見ルモ、將タ其國利民福ニ關スル點ヨリ見ルモ關係スル處尠少ナラサルナリ、各國政府ノ豫算ハ、「ごめーん」中ニ山林ヲ包含スルモノト、然ラサルモノトノ別アリ、但シ獨逸ニ於テハ之ヲ區別スル例多シ。

今ヤ官有地ハ、財政上殆ト其要ヲ失ヒシト雖モ、新領土若クハ新開地等ニ於テハ、尙好個ノ研究問題タリ、且ヤ、地方團體殊ニ市町村有地ノ貸下ハ、財政上、政治上今尙重要ナル關係ヲ有スルモノノ一ナリ、例ヘハ東京市ニ於ケル公園又ハ河岸附近ノ物揚場等ノ如キハ、優ニ一箇ノ財源タルノミナラス、將來却テ之ヲ増加スルノ必要アルニ似タリ、町村ニ至リテハ往々其基本財産ノ收入ヲ以

テ總テノ經費ヲ支出スルノ例古今東西ニ珍シカラス。又新開地タル北海道、新領土タル朝鮮、樺太、或ハ我勢力範圍ニ屬スル南滿洲ノ如キ地方ニ於テハ、既ニ土地ノ貸下問題、頻々トシテ起リ、又其起ルト同時ニ政治上ノ問題ヲ惹起スル例少カラス。此等ノ土地ハ直接ニ官有耕地ト稱スルコト能ハサレトモ、近キ將來ニ於テ耕地ト變スヘキ土地甚タ多シ。是レヲ以テ單ニ普通ノ官有財産ト看做サス、寧ロ官有耕地トシテ之ヲ取扱フヲ以テ至當トスヘケンカ、願フニ、我帝國ハ古來本土ヲ以テ重モナル領土ト爲シ、從テ北海道ノ未拓地ノ貸下、拂下等云ハハ拓殖ニ關スル經驗乏シク、開墾地ニシテ豫期ノ效果ヲ舉クルコト能ハサルモノ多キハ、畢竟スルニ官有地ノ管理法且ハ貸下、拂下ニ關スル方針及計畫ノ宜シキヲ得サルカ爲ナリト斷言スルニ憚ラサルナリ。樺太、朝鮮等ノ地方ニ於テ、其宜シキヲ得ルト然ラサルトハ、將來國家ノ政治的殊ニ經濟的發展ニ關係スルコト洵ニ尠少ナラサルヘシ。

第三節 官有地管理法

官有耕地ノ管理法ハ經濟ノ進步ニ伴ウテ幾多ノ變遷ヲ經タリ、嘗テ普ネク行ハレシハ直接管理法ナリシモ、今ヤ漸ク廢レテ、間接管理法換言スレハ貸下法又ハ小作法ノ一般ニ行ハレントスルヲ見ル。昔人民殊ニ農民カ殆ト半奴隸ノ状態ニ在リシ時ニ方リテヤ、之ヲ徵發使役シテ以テ官有ノ耕地ヲ耕作セシムルコト容易ナリキ、然ルニ爾後農民ノ解放セラレテ自由ノ國民トナリシノミナラス、農法ハ次第ニ集約ニ赴キタルノ結果、直接管理法ハ次第ニ衰廢セサルヲ得サリキ、何トナレハ、農業ノ方法愈々集約ナレハ愈々益々自己ノ利益ヲ本位ト爲シ、自己ノ計算ニ依リテ以テ耕作スル自作農又ハ農場經營者ヲ必要トスレハナリ。是レ直接管理法カ間接管理法ニ移レル所以ニシテ、現今ニ於テハ小作法或ハ貸下法ニ依ラサルモノ殆ト少シ。

抑官有地貸下法ハ大體三種類ニ分タル、其中ニ於テ又夫レ夫レ細分セラル

即チ其一ハ一般竝ニ特別貸下法其二ハ大貸下法竝ニ小貸下法其三ハ一時貸下法竝ニ永久貸下法是レナリ。而シテ此等ノ區別ハ皆貸下ノ方法ニ由テ生スルモノトス。

第一 一般貸下法及特別貸下ケ法 一般貸下法トハ其文字ノ示スカ如ク耕地竝ニ之ニ附屬セル建物、機械、器具等ヲ總テ一纏メニシテ一借地人ニ貸下クル方法ヲ云ヒ、之ニ反シテ、特別貸下法トハ土地ハ土地、家屋ハ家屋、機械ハ機械ト云フカ、如ク夫レ夫レ分離シテ以テ之ヲ別々ノ借地人又ハ賃借者ニ貸下クル方法ヲ云フ、本邦ニ於テハ、此等ノ貸下法中、其何レヲ採ルヘキカノ問題ハ殆ト生セサルヘシ、何トナレハ、耕地トシテ貸下クヘキ官有地ナキヲ以テナリ、然レトモ、獨逸諸邦ニ於テハ未タニ、官有耕地頗ル多ク、且之ニ附屬セル農業用ノ建物、機械等ノ存スルアルヲ以テ、自ラ以上二種ノ貸下法ニ付テ其孰レヲ採ルヘキカヲ研究スルノ必要アリ。

第二 大貸下法及小貸下法 大貸下法トハ耕地ヲ一纏メニシテ大面積ノ

儘ニテ貸下クルヲ云ヒ、之ニ反シ大町歩ノ土地ナレハ之ヲ分割シテ比較的多數ノ小資本家或ハ農業者ニ貸下クルヲ小貸下法ト云フ。北海道、樺太、朝鮮等ニ於ケル未墾地ニ關シテハ常ニ研究スヘキ所ノ問題ナリ。

第三 一時貸下法及永久貸下法 此方法制度タルヤ、貸下年限ノ長短ニ依リテ定マル。即チ一年、二年或ハ數年ヲ期シテ貸下クル方法ヲ稱シテ一時貸下法ト云ヒ、之ニ反シテ、永久貸下法ハ貸下年限ノ長キニ亘ルモノヲ云フ。サリナカラ永久貸下法ト云フモ、強カチニ永久無限ヲ期スルニアラス、三十年或ハ五十年位ヲ一期トシテ貸下クルヲ常トス、然リ而シテ此區別タルヤ、嘗ニ農業用ノ耕地ノミナラス、山林其他ノ官有財産ニ付テモ亦適用スルコトヲ得ルナリ。念フニ、我國ニ於ケル貸下ノ年限ハ官有財産管理規則第七條ニ依リテ規定セラレ左ノ制限ヲ越ユルコトヲ得サルナリ。

一、樹木培養ニ供スル土地ハ八十年以內。

二、農工其他ノ營業及住所ニ供スル土地ハ三十年以內。

- 三、土地森林ノ使用權ハ十五年以内。
- 四、右ニ掲ケサル物件ハ三年以内、以テ其區々タルヲ見ルヘシ。
- 獨逸ニ於テハ農業用ノ耕地ノ貸下期限ハ通常五年、七年乃至十五年ヲ以テ一期トス。

第四節 官有地ノ現狀

之ヲ要スルニ、官有地ノ貸下問題ニ付テハ、格段普通ノ小作問題ト異ル所ナシ。小作制度ノ利害得失ハ移シテ以テ官有地貸下ノ利害得失ニ準スルコトヲ得ヘシ。

大正四年度ノ官有物貸下料及拂下料ハ大要左ノ如シ

地所貸下料	一四七五二六
建物貸下料	二七九二九

物品貸下料	○
馬匹貸下料	二八二
水面貸下料	三七七六三
地所使用料	七九〇二八
物品使用料	二五二一八
水面使用料	○
船舶貸下料	三八九九一四
合計	

其他歳入臨時部ニ於テ二百三十萬九千二百九十四圓ノ官有物拂下代金アリ又歳入經常部雜收入トシテ多少官有財産ノ使用及利用ニ基クモノナキニアラス。

世界各國中最モ多ク官有地ヲ有スルハ露士亞帝國ニシテ凡ソ三百九十萬でしやちねんアリ、普魯西王國ハ千九百七年度ニ四十三萬六千九百九十町歩ヲ有シ

其貸下料千五百三十七萬一千九百六十七まいくニシテ、一町ノ小作料ハ三十
五まいく七十七ふんにひナリトス、匈牙利國有ノ農業用地ノ反別ハ三十六萬
町步ヲ算シ各國中比較的モ多クノ官有農地ヲ有スル割合ナリ、佛國政府ハ
從來之ヲ拂下クル方針ヲ取り、大革命以來千八百三十年ニ至ル迄其拂下代金
ハ四十五億ふらんノ巨額ニ達シタリト云フ、當時各國政府共ニ大抵同一ノ政
策ニ出テシカハ普魯西ノ如キモ猶千八百三十年ヨリ同九十年ニ至ル間ニ於
テ二十一億一千萬まいくノ拂下ヲ決行セリ、獨リ怪ム、自由放任ノ經濟政策ノ
祖國タル英國ノ千九百八年度ノ官有地收入ハ五十二萬磅ノ多キニ達セシコ
トヲ。

第十一章 官營商工業論

第一節 現今官營ノ商工業

蓋シ尋常一様ノ官營ノ商工業ハ今ヤ財政上又ハ歲入上殆ト價值ナシ、何ト
ナレハ、國家又ハ政府ノ經營ニ關スル商工業ハ、一方ニ於テ公經濟的收入ヲ生
スル所ノ企業ト成ルニ非レハ、一方ニ於テハ單ニ未タ發達セサル商工業ヲ獎
勵保護スル模範的施設ニ出ルヲ以テナリ、尋常一様ノ商工業ヲ營ミ、之ヲ以テ
政府ノ財源ニ充テントスルモ、到底今日ノ經濟界ニ於テ望ミ得ヘカラサルナ
リ、是レヲ以テ、今尙官營ノ商工業トシテ存在スルモノハ大抵舊時ノ遺物ニア
ラスンハ、特ニ之ヲ獎勵保護シテ、以テ其模範ヲ示サントスル場合ニ在リ、例ヘ
ハ普魯西ノ王室カ、陶磁器製造業ノ保護獎勵ヲ圖ル爲ニ王室陶器製造場ヲ設
立セルカ如キ、我國ニ於テ製鐵業ノ發達ヲ圖ル爲ニ福岡製鐵所ヲ設立經營ス
ルカ如キハ、其好例ニシテ、現今各國ノ間ニ於ケル經濟及政治ノ關係ハ自ラ斯

ルコトマテニモ影響ヲ及ホスニ至リシナリ。普魯西王室カ、陶磁器製造業ニ關シ如何ニ甚大ノ注意ヲ拂ヘルカハ、殆ト吾人想像ノ外ニ在リテ、我政府カ自ラ工製造業ヲ營ミ、以テ保護獎勵ノ實ヲ擧ケントスルニ比シ、更ニ一層ノ用意周到ナルモノアルヲ見ル、彼ノ王室有ノ陶器製造所ニ於テハ日本製ノ陶磁器ニ至ルマテ大抵驚ク可キ程周密ナル試験及分析ヲ行ヒ、以テ陶磁器ノ改良ノ標本及材料ヲ備フト云フ。此等ハ我國ノ産業ノ發達上須ラク則ルヘキ所トス。一體本邦ニ於テハ保護ト云ヒ、獎勵ト云フモ、其多クハ上ニ述フルカ如キ保護獎勵ニアラスシテ、動モスレハ、保護金ヲ與フルヲ以テ満足シ、人モ亦之ヲ以テ保護ノ實ヲ擧ケタリトナス、然シナカラ、保護金ヲ下附シテ、以テ産業ノ保護獎勵ヲ企劃スルハ畢竟スルニ舊式ニシテ、好結果ヲ奏スルコト容易ナラス之ニ反シ近時ノ産業保護法ハ國帑ヲ支出スルコトナキニアラスト雖モ、其使用方法ハ舊時ノソレニ異リ、當業者ニ對シ直接ニ之ヲ下附セス、之ニ反シテ一般又ハ特別ノ人民ニ取リテ、其事業ノ經營ニ必要ナル條件ヲ造リ出シ、以テ其方針及

摸範ヲ指示スルニ止マル。姑ラク普國ノ例ニ付テ云ハ、世界ノアラユル陶磁器ヲ集メ、官吏タル技術者ハ豫メ一々之ヲ試験シ、以テ其改良スヘキ方針方法及條項ヲ示シ、當業者ハ此綿密ナル試験及調査ノ結果ニ賴テ以テ新ニ製作品ノ改善ヲ圖ルナリ是レ一例ニ過キササルモ、依リテ以テ官營ノ商工業ノ目的カ財政上ヨリハ寧ロ他ニ存スル所以ノ理ヲ知ルニ足ラン。

第二節 富籤

縦令純乎タル商業ト認ムルコト能ハサルモ、猶便宜ノ爲此部門ニ屬セシムヘキハ富籤ニシテ、臺灣ノ彩票ハ其一例ナリ。從來我國ニ於テハ富籤ヲ嚴禁シ、其變態トシテ唯日本勸業銀行ノ割増債券ノ存スルアルノミ、而モ是レ純然タル富籤ニアラサルハ云フヲ俟タスシテ、要スルニ彩票ハ古來ノ慣例ヲ破リタルモノナリ、元來射倖心換言スレハ一攫千金ノ奇利ヲ狙フハ、人生ノ弱點トシテ殆ト吾人人類通有ノ性僻ニシテ、如何ニ直實ノ士ト雖モ動モスレハ之ニ動

カサルルコト多シ。此弱點タルヤ、到底法律規則ノ力ヲ以テ之ヲ制スルコト能ハサルノミナラス、道德宗教ノ力ヲ以テスルモ亦如何トモスヘカラス。世人ノ所謂必要ナル惡事ノ一ニシテ、諸國政府カ止ムヲ得スシテ尙之ヲ存シ、間々其弊害ヲ減殺スル目的ヲ以テ公ニ政府ノ企業トシテ富籤ノ發行ヲ敢テスル所以ナリ。例ヘハ伊太利、埃地利、普魯西、西班牙等ノ如キハ其著シキモノナリ。

概言スルニ、富籤ハ宜シク之ヲ禁止スヘシ、然シナカラ其利害得失ハ富籤ノ種類ニ由リテ一様ナラス。或ハ一方ニハ眞ノ賭博視スヘキモノアリ、之ニ反シ、一方ニハ租税ニ類似スル働キヲ爲スモノナシト云フヘカラス。茲ニ富籤カ租税ニ類似スル働キヲ爲スト云フ所以ハ他ナシ、比較的ニ投機的危險ノ尠ナルト同時ニ、之カ購入者ハ縱令其掛金ヲ失フモ、其額左マテニ多大ナラス、一朝ニシテ全財産ヲ傾クルノ憂ナク、之ニ反シテ一旦當籤スルコトアラシカ、當籤者ハ意外ノ利益ヲ收ムルコトヲ得ルカ故ナリ。斯ノ如キハ投機ノ弊ヲ避クルト同時ニ其利ヲ收ムルコトヲ得ルモノニシテ、其弊害ノ最モ少キモノハ普魯

西ノ階級富籤ナルヘシ。

階級富籤ハ原語ノ「くらっせんろつたり」ノ謂ニシテ豫メ等級ヲ分チテ、以テ發行スルカ故ニ此名アリ。試ミニ其方法ヲ略說センニ、一回ノ發行ハ之ヲ三度ニ分チ、順次ニ籤ヲ賣出タスヲ以テ應募者ハ三度掛金ヲ掛ケテ、三タヒ籤ヲ抽クコトヲ得ルノ理ナリ。是レ即チ投機的危險ヲ除去セサル迄モ、猶之ヲ減少スル第一ノ理由ニシテ、若シモ一回ノ發行ニ付唯一度ノ外抽籤スルノ機會タニナカランニハ、之ヲ三度ニスルモノニ比シテ、其危險ハ三倍ノ多キニ達スヘシ。反言セハ、三度抽籤スルコトヲ得ルハ、一度抽クニ比シテ其危險ハ三分ノ一ノミ之ヲ高等數學ノ「ぶろばびりち」ノ原理ニ徵スルトキハ三度抽ク場合ハ、一度抽ク場合ニ比シ、其當籤スルノ機會ハ三倍多シト云フテ可ナリ。是レ普魯西ニ於テ三回ニ分チテ抽籤ヲ執行スル所以ナルヘクシテ、例ヘハ元來一度ニ三十圓ヲ掛ケテ抽クヘキ代リニ、三度ニ分チ十圓ツツ掛ケテ抽籤スルカ故ニ應募者ニ取リテ旁々便利ナル方法ナリ。其他尙應募者ノ爲ニ便利ナル所以ハ、當初

十圓ヲ掛ケテ抽籤スルヤ、其當籤セルヤ否ヤハ茲ニ決定セラレ、若シ該應募者ニシテ當籤シタランニハ、其得タル金員ヲ以テ直チニ二度目ノ賣出ニ應スルコトヲ得ヘシ、是レ應募者殊ニ當籤者ニ取リテ便利ナル點ナリトス。

尙階級富籤ノ特色ヲ説明センカ、當籤數ハ之ヲ初回ニ多クスルト同時ニ其一口ノ當リ籤ノ金額ヲ少クス。例ヘハ百萬圓ノ富籤ヲ發行スルト假定シ一籤ノ掛金ヲ三十圓トスルトキハ、略ホ三萬三千三百三十三本ト爲ル、假リニ其内ノ一萬本ニ當リ籤ヲ附スレハ殆ト三分ノ一即チ三人ノ中一人ハ當籤スルコトト爲ルヘシ、而シテ第二回目ニ至レハ、第一回ニ比シ、稍當リ籤ヲ少クシテ、亦一口ノ當リ金額ヲ増加スヘシ、例ヘハ之ヲ七千本ニ減スルカ如シ、而シテ第三回ニ至レハ當籤數ハ著シク之ヲ減少シ、例ヘハ一千本トナシテ大ニ當籤金額ヲ増加ス。其斯ノ如キ方法ヲ採ル所以ハ他ナシ、固ト是レ發行者ノ秘術トスル所ニシテ、大凡人ノ性トシテ其初當籤スルトキハ、再ヒ之ニ加入スルヲ欲スルノミナラス、其當籤金額ハ前回ニ比シテ多キヲ以テ、希望者ハ自ラ増加スルノ

理ナリ、三回目ノ場合モ亦之ニ準シ、遂ニ人ヲシテ不知不識購買心ヲ誘起シテ總テノ發行ニ加入セシムルニ至ラン。

加之、同國ニ於テ應募者ヲ誘致スル方法ハ周到ヲ極ム、彼等ノ購入ニ便センカ爲、一籤ハ通常之ヲ四口ニ分ツ、即チ四分ノ一籤、二分ノ一籤、九籤ト云フカ如シ。此四種ノ籤タルヤ、應募者ノ貧富又ハ各種ノ階級ノ需用ニ適應セシメンカ爲ニシテ、例ヘハ下男下婢ノ如キモ、亦尙四分一籤ヲ購フコトハ左迄ノ困難ニアラサルヘシ、而シテ其賣出及配布ノ方法ニ至リテハ最メテ普及ノ手段ヲ取リ、雜貨店、煙草店ノ如キ、人衆ノ出入最モ頻繁ナル所ヲシテ之ヲ取り扱ハシム、是レ實ニ簡便ニモ簡便ヲ盡セル販賣方法ニシテ、定メテ世人意想ノ外ニアラシ、我國ニ於テモ、例ヘハ日本勸業銀行發行ノ貯蓄債券ノ如キ、若シ之ヲ到ル處ノ商舖ニ於テ賣リ捌カシムルコトトセハ、購買者ノ増加スルハ云フモ愚ナリ、然ルニ其策茲ニ出テスシテ苟クモ之ヲ購ハントセハ、必スヤ取扱銀行ニ行クノ要アルカ故ニ、設令之ヲ購入セント欲スル者モ其手數ニ避易シテ需用ハ自

ラ減少スヘシ。之カ爲元ト零碎ノ資本ヲ有スル者ヲシテ購入セシムル目的ノ貯蓄債券ヲシテ却テ巨多ノ資本ヲ有スル銀行家輩ノ手中ニ歸セシムルノ奇觀ヲ呈スル有様ニシテ、當初ノ目的ヲ達スルコト能ハサルハ論ナキノミ。

抑富籤ニシテ止ムヘカラストセハ、成ルヘク其弊害ヲ減殺スルコトヲ勉ムヘシ。其弊害ヲ少クセントセハ、成ルヘク多數人ヲシテ之ヲ購入スルノ機會ヲ得セシムルト同時ニ其掛金ヲ低クシ以テ危險ノ度ヲ減セシムルニ在リ。普魯西政府ノ如ク階級富籤ニ依リ、掛金ノ金額ヲ少クスルト同時ニ、應募ノ度數ヲ多クシ、以テ比較的着實ノ方法ヲ採用スルトキハ、此目的ヲ達スルニ庶幾カラシ。之ニ反シテ、塊地利ニ行ハルル方法ハ非常ニ危險ナルモノニシテ、殆ト賭博ト擇フ所ナシ。即チ、通例籤ノ數ヲ九十本ト定メ、各應募者ヲシテ思ヒノ儘ニ其中ノ或ル籤ニ向テ掛ケシメ、而シテ五本ヲ抽カシメ、其五本中ニ豫メ掛ケタル籤ノ存スルトキハ當籤者ト爲ルナリ。應募者ノ掛ケ籤ハ通常一本ナルモ、ソハ必スシモ一本ニ止マラス二本掛、三本掛、四本掛ナルコトアリ。然レトモ、五本掛

ニ至リテハ、弊害ノ恐ルヘキモノアルヲ以テ之ヲ禁止スルヲ常トス。

第三節 富籤ト租稅其他

然リ而シテ、予輩カ曾テ富籤カ往々租稅ニ代リテ其作用ヲ爲スト云ヘリシ所以ハ他ナラス、前述ノ方法ニ依リテ可成多ク之ヲ發行シ、何人ト雖モ購買スルコトヲ得ル便利ノ方法ヲ採用スルノ結果ハ、殆ト總テノ國民カ富籤ヲ買フコトト爲リ、據リテ以テ租稅又ハ國費ヲ負擔スルニ至ルヲ謂フナリ。

千九百十四年度ノ普國ノ豫算ニ依ルニ富籤ノ總收入ハ一億九千六百四十八萬四千五百まゝ、其發行費ハ一億八千四百六萬八千六百六十五まゝ、ニシテ、純收入ハ千二百三十九萬九千三百三十五まゝ、ナリ。年々多少ノ增收ナキニアラスト雖モ大體上殆ト云フニ足ラス、又同年度ノ塊地利ノ富籤ノ純收入ハ五百八十四萬八千くろゝねんナリトス。

第四節 諸工作場

其他陸海軍省ノ經營ニ關スル諸般ノ工作場ノ益金ノ如キハ形式上亦官營ノ商工業ノ收入ニシテ、其金額殊ニ種類モ少カラスト雖モ元ト是レ普通ノ工業ニアラス其主要目的タル他ニ存スルアルヲ以テ隨時收入タルコト勿論ナリ。陸海軍以外ニ於テモ亦類似ノ收入ナキニアラス、今大正四年度ノ豫算ニ據リ其形式上タルト將タ實質上タルトヲ問ハス、兎モ角官營ノ商工業ノ益金ヲ掲記スレハ大略左ノ如シ。

囚徒工錢及製作收入	一五七〇六二四
印刷局益金	五三〇〇六七
東京砲兵工廠益金	二〇一三〇七
大阪砲兵工廠益金	二九八二四六
千住製絨所益金	一六八一七

海軍採炭所益金	九〇〇六三
海軍工廠資金益金	三七六四〇一
電信燈臺用品製造所益金	四〇七六
南滿鐵道及鴨綠江材木局配當金	三五七五六三五
預金利益金收入	一〇〇〇〇〇〇
海軍受託造修收入	二一九五七三
製鐵所益金	三、〇〇二四一三

明治四十四年度

第二款 手數料論

第十一章 手數料ノ説明

第一節 手數料ノ要領

帝國憲法第六十二條ハ、明カニ租税ト手數料トノ同シカラサルコトヲ規定セリ、而シテ我國ト等シク手數料ト租税トノ異ナルモノタルヲ認ムルハ獨逸帝國及諸聯邦ニシテ、大抵皆法律ヲ以テ其區別ヲ明カニセリ、之ニ反シテ、佛蘭士、露士亞、英吉利等ニ於テハ管ニ立法上ノミナラス、學理上ニ於テモ、未タ殆ト手數料ト租税トノ區別ヲ認メサルナリ、之ニ反シ、總テノ制度法律ヲ其舊母國ニ倣ヘル北米合衆國ニ於テハ租税ト手數料トヲ區別シ、近來手數料ヲ以テ一種ノ財源ニ充ツル傾向ヲ生セシハ看過スヘカラサル事實ナリ、蓋シ手數料中ニハ或ハ法律ノ規定ヲ要スルモノモアリト雖モ其多クハ然ラスシテ、單ニ行

政處分ヲ以テ之ヲ徵收スルコトヲ得ルカ故ニ當局者ニ取リテハ洵ニ便利ナル財源ナラストセンヤ、彼ノ民權ノ盛ナル佛蘭士等ニ於テハ、總テノ公課又ハ課徴ハ法律ニ依リテ以テ國民ノ承諾ヲ經ルニアラサレハ不可ナルノ主義ヲ遵守スルカ故ニ、手數料ト租税トヲ區別スルハ其國體上ヨリシテ固ト困難ナラサルヲ得ス、是レヲ以テ、彼ノ有名ナル佛國ノ財政學者ルゝ、あぼーり、ノ大著財政學ノ如キモ、亦特ニ手數料ヲ論スル所アルヲ見ス、唯佛蘭士ニ於テ法律上又實際上此區別トモ認ムヘキハあんぼー [Impôt] ト わろあ [la dorie] トノ二者ニシテ、之ヲ邦語ニ譯スレハ、二者等シク租税ナリト雖モ、而モ其間自ラ一定ノ區別ヲ存スルヲ見ル、即チあんぼーハ主トシテ直接税ニシテわろあニ至リテハ間接税トモ云フヲ得ヘク、間接税ハ大抵此わろあノ内ニ含蓄セラル、加之、手數料ニ該ルモノモ亦ごろあナル文字ニ由テ現ハサルヲ見ル、是レヲ以テ、佛蘭士ノ立法上二者ヲ區別セントスレハあんぼートごろあノ區別ヲ引用スル、ノ外ナシ、然レトモ以上述フルカ如クごろあノ中ニハ亦租税ヲ含蓄スルヲ

以テ、適切ナル説明ト稱スルコト能ハサルナリ。我國ニ於テモ近時漸ク之ニ近似スルノ傾向ヲ生セントスルカ如シ、彼ノ豫算調製上、印紙收入中ニハ租稅及手數料ノ收入ヲ含ミ亦之ヲ區別セサルナリ。斯ノ如キハ印紙ヲ以テ收納スル租稅及手數料ノ實際上區別シ難キニ因ルト雖モ、シカモ容易ニ之ヲ別ツコト能ハサラシムルハ、取リモ直サス之ヲ混同スルノ端ヲ啓ラクモノナリ。之ニ反シテ、獨逸ニ於テハ「しどいゑる」ト「げびーる」又ハ「してむべる」トハ截然相別タル。是レ管ニ憲法上ノミナラス、租稅等ニ關スル法規ヲ以テ更ニ規定スル所アルヲ見ル。帝國憲法ノ規定ハ畢竟スルニ獨逸ノ制度ニ倣ヘルナリ。

何カ故ニ獨逸ハ他國ニ先シテ手數料ノ性質ヲ明カニシタリヤト云フニ、其原因ハ學理ノ進歩ニ基クト云フヲ以テ適當ナリトスヘシ。今ヲ距ルコト凡ソ七八十年前ニ當リ、獨逸經濟學界ノ牛耳ヲ握リシカハ「るはいんりひらう」出テ、初テ手數料ノ特質ヲ説明セシ以來、學理實際兩ナカラ之ヲ採用シ、爾後マタ租稅及手數料ヲ混スル者ナキニ至レリ。

第二節 手數料ノ定義及解釋

然ラハ手數料トハ如何ナルモノナリヤト云フニ、國家又ハ地方團體ノ勞費ニ對スル各別ノ報償ニシテ、個人ノ利益ヲ圖ルト同時ニ、又兼ネテ公益ヲ進捗セシカ爲ニ課徵セラルルモノヲ云フト定義スヘシ。此定義ニ從ヒ、試ミニ手數料ノ觀念ヲ解析スルトキハ大要左ノ要素ヲ包含スヘシ。

一、手數料ハ各別ノ報償ナリ。是レヲ以テ、一般臣民ノ義務トシテ課徵セラレル租稅トハ大ニ其性質ヲ異ニシ、或ル特別ノ場合又ハ特別ノ事項ニ對シ、其報酬トシテ收納セラルルモノナリ、而シテ此特別ノ場合若クハ事項トハ國家又ハ地方團體カ一個人ノ爲ニ、特ニ勞力若クハ經費ヲ投スル場合若クハ事柄ニ外ナラス。夫ノ特別ノ報償ヲ徵收スル所以ノ理茲ニ於テ乎明カナリ。

二、是レヲ以テ手數料ノ高低若クハ率ハ、國家若クハ地方團體カ一個人ノ爲ニ費ス勞力又ハ經費ヲ以テ其標準ト爲スヘシ。既ニ手數料ニシテ勞費ニ對

スル報償タル以上ハ其多少ニ依ルハ當然ノ事理ナリ。

三、手数料ノ徴收ハ個人ノ利益及公益ニツナカラ之ヲ保護進捗スル國家及地方團體ノ行動ニ伴フモノナリ。蓋シ個人ハ其力足ラサルカ將タ不能ナルカ爲ニ、自ラ進ンテ積極的ニ政府ノ勞力費用ヲ要求スル場合尠カラス。設令自ラ進ンテ之ヲ要求セサルモ、猶自家行動ノ結果自ラ消極的ニ其勞費ヲ煩ハス場合ヲ生起スルコト少カラス。此時ニ當リ、政府國家ノ行動ハ個人ノ利益ヲ保護進捗スルト共ニ、亦公益ヲ圖ルヘキハ論ナキノミ、而シテ其個人ノ利益ヲ進捗スルノ事由ニ依リ、爲ニ要スル經費ハ、國民ノ義務トシテ廣ク一般人民ニ之ヲ賦課セス。其關係者ヨリ徴收スルモノトス。帝國憲法註釋ノ權輿タル伊藤公ノ憲法義解ニ「手数料ハ各箇ノ要求ニ由リ又ハ各個人ニ利益ヲ與フル爲、政府ノ事業又ハ事務ニ對シ上納セシムルモノニシテ、租稅トハ其性質ヲ異ニス」ト言ヘルハ、(第百七頁)説キテ詳カナラサルノ憾ナキニシモアラサルモ、尙大要ヲ説キ得テ遺憾ナキニ庶幾シ。

四、手数料ハ、課徴セラレルモノナリ。其意蓋シ手数料ハ私經濟的收入ノ如ク當事者間ノ駈引或ハ契約ニ依テ定マラス、政府ノ一方ノ意思ヲ以テ定マリ個人ニ對シ之カ納付ヲ命令スルモノナルコトヲ謂フナリ。而シテ此點ニ關シテハ租稅モ亦手数料ニ異ルコトナシ。

第三節 手数料ノ根據

是レヲ以テ或ハ説ヲ爲ス者アリ、曰ク、手数料ト租稅トハ之ヲ區別スル必要ナシト、然レトモ斯ノ如キハ、手数料ト租稅トカ其起因ヲ同ウセサル事ニ想ヒ及ハサルノ致ス所ナラスンハアラス。念フニ政府國家ハ公益上必要ナルト同時ニ又兼テ個人ノ利益上缺クヘカラサル事業或ハ事務ヲ執行スルノ必要ヲ有ス、而シテ其事タルヤ、一個人ニ取リテ必要缺クヘカラサルト共ニ、國家ニ取リテモ亦自衛自存ノ必要上之ヲ缺クコト能ハサルナリ。斯カル事業或ハ事務ハ其種類性質實ニ夥多ニシテ、凡テ一個人ノ營業又ハ生存ニ必要ナルカ故ニ

彼等ヲシテ其經費ヲ負擔セシムルナリ。之ト同時ニ其事タル、國家ニ取リテモ亦缺クヘカラサルヲ以テ、其負擔ハ一定ノ程度ニ止メ之ヲ超ユル以上ハ政府ノ經費ヲ以テ之ヲ支辨スルモノトス。畢竟國家ト一個人トハ共ニ如上ノ事業或ハ業務ヲ缺クコト能ハサルヲ以テ、從テ、兩者共ニ其負擔ヲ分ツコトト爲ルナリ。之ニ反シテ、軍事行政ノ如キ將タ財務行政ノ如キハ、其事務性質上直接ニハ一個私人ノ利益ト關係スルコトナシ。從テ之カ爲ニ要スル經費ハ臣民一般ノ義務トナシ、彼等ハ租稅ニ由リテ以テ納付シ、政府ハ之ニ賴リテ以テ支辨スルモノトス。然ルニ世間往々ニシテ反對ノ說ヲ爲ス者アリ、曰ク、若シ一個人ノ利益ノ爲ニ必要缺クヘカラサル事柄ナリトセハ、何カ故ニ彼等ヲシテ各自自由ニ之ヲ謀ラシメサルヤト。是レ極端ナル自由放任ノ主義ヲ採ル者ノ往々稱道スル所ナリ。然リト雖モ元來個人ノ力ニハ限リアリ、其事タル縱シヤ個人ノ利益ニ重大ナル關係アリトスルモ、其力ノ之ニ耐ヘサルアリ。若シ此場合ニ於テ個人ノ爲スカ儘ニ抛擲シテ顧ミサランカ、當ニ之ヲ完全ニスル能ハサルノミ

ナラス。却テ天下國家ノ事ヲ害スルニ至ランモ未タ知ルヘカラス、是レヲ以テ斯カル事柄ニ付テハ、政府ハ宜シク手数料ヲ徵收シテ以テ之カ執行ノ任ニ當ルヘシ。是レ手数料ノ必要ナル所以ニシテ、而シテ又租稅ト異ナル所以ナリ。

以上ハ手数料ニ關スル大體ノ説明ナリ。以下少シク手数料ノ歷史上ノ關係ニ付キ説述スル所アラントス。

第四節 手数料發達ノ概要

元來租稅ト手数料トハ學理上實際上兩ナカラ其區別ヲ存セス、歐羅巴諸國ニ於テハ租稅ノ起源カ曖昧ナリシ如クニ、手数料ノ起源モ亦曖昧ナリキ。手数料ハ其文字ノ示スガ如ク、或ル事故ノ發生シタルトキ、其之ヲ處理スル爲ノ手数料トシテ取立テラレタルモノナリ。サレハ其初ニ當リテヤ、官吏或ハ官吏ニ代リテ國家ノ事務ヲ執行セシ者ノ役得トシテ徵收セラレ、而シテ幾多ノ變遷

ヲ經タル後官吏ノ俸給ノ一部分トナリヌ。然ルニ今ヤ財政上總計豫算ノ主義ノ採用セララルアリ、且財政ノ統一純ラナルニ至リシカハ、從テ從來官吏ノ役得或ハ俸給ノ一部トシテ、須ラク國家ノ收入ニ屬スヘキモノヲ移シテ先ツ之ヲ附與スルノ制度ハ殆ト總テ廢止セラレ、而シテ官吏ノ俸給ハ別ニ國庫ヨリ支給スルコトトナレルハ自然ノ成行ナリ。但、今尙其形骸ヲ存スルハ、僅ニ獨逸ニ於ケル大學教授ノ講座給乃至我邦ニ於ケル執達吏公證人ノ手數料等僅ニ指ヲ屈スルノミ。元來我國ニ於テハ手數料ノ發達及發生ノ順序經過ヲ有スルコト歐洲西部諸國ノ如クナラス、云ハハ殆ト其歴史及經過ヲ存セサルナリ何トナレハ卒然模倣採用セシニ止マレハナリ現今手數料ニシテ官吏ノ俸給ニ類似セルモノヲ求ムレハ縦合官吏ト言フ能ハサルモ公證人及執達吏ノ手數料ノミ、往時歐羅巴西部諸國ニ於ケル裁判官等ノ手數料ハ此執達吏或ハ公證人ノ手數料ト同一ノ起源ヲ有セリ。唯裁判官ハ純然タル官吏ナルニ反シ公證人或ハ執達吏ハ元ト官吏ニアラスシテ所謂公吏タル性質ヲ有スルニ過キス。

現今手數料カ尙未タ純然タル官吏ノ俸給トシテ存在スルハ、獨逸ニ於ケル大學教授ノ講座給ナリ。元來獨逸大學ノ授業料ハ殆ト皆教授ノ所得ニ歸シ、其授業料タルヤ、各學生カ聽講スル教授ニ對シ、報酬トシテ各授業科目ニ付キ講義時間數ニ應シ別ニ一々納ムル所ノモノタリ、サレハ此制度タルヤ、各教授ハ學生ヨリ一々授業料ヲ收ムルカ故ニ一面ヨリ觀ルトキハ教授ヲ刺戟シテ講義ニ熱心ナラシメ、從テ獨特ノ研究ニ從事シ以テ多數ノ學生ヲ收攬セシムル原因ト爲レトモ、又他ノ一面ヨリ觀ルトキハ、本來學問ナルモノハ學問トシテコソ輕重ナケレ、實際ハ總テ一樣ニ世人ノ要求スル所トナラス、或ハ多數學生ノ聽講スル學科アリ或ハ之ニ反シテ殆ト學生ノ爲顧ミラレサルモノアリ、是レヲ以テ根本法タル民法ノ如キハ非常ニ多クノ聽講者ヲ得ヘキモ、法制史、政治史等ニ至リテハ、兎テモ學生ヨリシテ同一ノ待遇ヲ望ムヘカラス、又經濟原論ノ如キハ法律科ノ學生モ政治科ノ學生モ均シク之ヲ講究スルノ必要アルモ、統計學ノ如キハ、僅ニ一部分ノ學生ヲシテ興味ヲ有タシムルニ過キス。是レ

ヲ以テ如上ノ制度ノ結果、或ル教授ノ收入カ非常ニ多キニ反シテ、或ル教授ノ收入ハ大ニ少キハ免ルル能ハサルノ數ニシテ、必スシモ其能ト不能トニ由ラサルナリ。普魯西國政府ハ茲ニ見ル所アリ、此弊ヲ矯正センカ爲ニ、數年前講座給ノ最高限度ヲ定ムルト同時ニ、一般ニ教授ノ本俸ヲ高メタリ、爾來教授中設令以上ノ限度ヲ超エテ授業料ノ收入アルモ、ソハ皆國庫ノ收入ニ歸スルコトトセリ、要スルニ、手數料カ官吏ノ俸給ノ一部トシテ未タニ存在スルハ稀有ノ例外ナリト云フヘク、近時ノ趨勢ニ徴スルトキハ、此稀有ノ例外モ、又國庫ノ收入ニ歸セサレハ到底止マサルヘシ。

第十三章 手數料ノ種類

第一節 手數料ノ分類及司法手數料

手數料ノ種類ハ、其取扱官廳ノ組織ニ從ヒ之ヲ分類スルヲ以テ最モ肯綮ヲ得ルニ庶幾シ。今之ヲ大別スルコト左ノ如シ。

第一種 司法手數料

第二種 行政手數料

抑第一種及第二種ノ手數料ハ、同シク手數料ナリト雖モ、而モ其根本ノ規定ヲ異ニセリ。他ナシ、司法手數料ハ行政手數料ト異リ、法律ヲ以テ之ヲ規定セザルヘカラサルヲ以テナリ。既ニ述ヘタルカ如ク、近來北米合衆國ニ於テ手數料ヲ以テ歲入ノ一手段ニ供スルノ傾向アル所以ハ他ナシ必スシモ議會ノ協賛ヲ要セス、常ニ行政處分ヲ以テ當局者ノ意見ニ依リ任意ニ之ヲ賦課徵收スルヲ得ルニ由ルナリ。然ルニ司法手數料ニ至リテハ之ニ反シ、法律ノ規定ニ俟タ

手數料ノ種類 手數料ノ分類及司法手數料

サルヘカラス。故ニ通常手數料ト稱ヘテ殊ニ經濟上財政上ノ關係アルモノハ行政手數料ニシテ、司法手數料ニアラスト知ルヘシ。

元來手數料ト謂ヘハ其初ハ殆ト司法手數料ニ限ラレタリシモノニシテ、謂ハハ司法手數料ハ現今ノ手數料ノ嚆矢ナリ。蓋シ往古始テ手數料ノ徵收サレシ時ニ當リテヤ、政治ノ局ニ當リシ者ハ多ク武門武士ナリキ、然ルニ裁判ノ事務タルヤ、常ニ弓箭ヲ執レル武門武士ノ長スル所ニアラサリシヲ以テ、漸次政治或ハ政務ノ複雜ナルニ隨ヒ、勢ヒ自ラ法律政治ノ學ヲ修メタル者ニ委ヌルニ是等ノ事務ヲ以テスルニ至レリ。而シテ是等ノ學ヲ修メタル者ハ所領ヲ有スル封建武士ノ如ク坐カラニシテ政事ノ事ニ軼掌スル能ハス、從テ勤勞ニ對スル報酬ヲ得テ以テ衣食ノ料ヲ支ヘサルヘカラスシテ、其裁判事務ヲ取扱フヤ、君主ハ之ニ對スル手數料ヲ徵收セシメ、以テ其報酬ニ充テタリ、是レソ即チ手數料ノ由來ナル、而シテ墺地利ニ於テハ近時ニ至ルマテ尙此歷史的關係ヲ存シ手數料ト云ヘハ殆ト司法手數料ニ限ラレタリシカ十餘年前ノ改革ニ據

リテ以テ手數料ノ制度ヲ擴張シ、漸ク之ヲ司法事務以外ニ及ホセリ。如上ノ歷史的關係アリシカ爲ニ、學者中往々手數料ハ獨リ司法事務ニ伴フヘキモノナリト解スル者ヌラ之アルニ至ル、予輩ヲ以テ之ヲ見ルニ、斯ノ如キハ其餘リニ狹キニ過クルヲ恐ル、抑手數料ヲ徵收スヘキ場合ハ、單リ司法事務ニ限ラレサルノミナラス、寧ロ他ノ行政事務ニ隨伴シテ發生スル場合却テ多シ、殊ニ現今ノ社會政策的施設ニ於テ然ルヲ見ル。

蓋シ司法手數料トハ、法律ノ解釋又ハ裁判ノ爲ニ惹起セラルル國家ノ勞費ニ對スル報償ヲ云フ。抑司法手數料以外ノ手數料ハ單リ國家ノミノ徵收スルモノニアラスシテ、地方團體ト雖モ又之ヲ徵收スル場合甚タ多ク、殊ニ下級ノ地方團體ニ至リテハ、國家ニ比シテ寧ロ之ヲ以テ其財源ニ充ツルノ必要多シ、是レ地方團體ノ事務ハ直接ニ個人ノ利害ト觸接シ、且ヤ關係スルニ由ルナリ然ルニ司法手數料ニ至リテハ、獨リ國家ノミ之ヲ徵收スルヲ得ヘシ。何トナレハ司法事務ハ大權發動ノ結果ニシテ、獨リ國家ノ執行スル所ニシテ、苟クモ地

方團體等ニ委ネラルルコトナケレハナリ。是レ定義中ニ國家ノ勞費ニ對スル報償ナリト云ヘル所以ナリ。然リ而シテ其勞費ヲ提供スル場合又ハ原因ハ如何ナル時ニ在ルヤト云フニ、法律ノ解釋又ハ法律ノ執行ノ際ニ在リ、略言スレハ、國家カ個人ノ爲ニ裁判及其執行ニ要スル勞費ヲ徵收スルトキハ、之ヲ稱シテ司法手数料トハ云フナリ。

第二節 訴訟手数料

更ニ司法手数料ヲ分チテ、訴訟手数料及非訟手数料ノ二種ト爲ス。

訴訟手数料ハ、元ト個人ノ身體、名譽、權利、財產等ヲ保護スルヲ以テ其目的トスル司法事務ニ伴フモノナリ。元來權利ノ伸張又ハ防衛ニ關スル問題ノ起ルヤ、國家ハ個人ノ爲ニ之ニ應スル手段行動ヲ執ルモノニシテ、其手段行動タルヤ、畢竟個人ノ爲ニ促サルルヲ常トス。謂ハハ個人ハ主働者ノ地位ニ立チ、國家ハ受働者ノ地位ニ立ツモノニシテ、其原因ハ常ニ個人ニ存ス。手数料ヲ徵收ス

ルノ必要是レニ於テ乎正當ナルヲ見ル。

斯ノ如ク國家ハ只個人ノ爲ニ餘儀ナク勞力又ハ費用ヲ投スルカ如シト雖モ、而モ其關スル所ハ單リ個人ノ利害ノミニ止マラスシテ、等シク公益ニ亘ルモノナリ。

訴訟手数料ノ率又ハ金額ハ、訴訟事件ノ大小、難易、種類、裁判所ノ階級等ニ依リテ増減ス。凡ソ訴訟事件ノ複雑ナル場合ハ、其審問及裁判ノ手續等モ自ラ複雑トナリ、之カ爲ニ要スル時日モ自ラ長キニ亘ルヘケレ、彼ノ證人ノ喚問現場ノ臨檢等ノ必要ハ云フ迄モナシ。而シテ裁判入費ノ多少ハ是等ノ條件ヲ參酌シテ以テ之ヲ定ムヘキハ自然ノ理ナリ。本邦ノ裁判所構成法ハ區裁判所、地方裁判所、控訴院、大審院ノ四階級ヲ認ムルハ普ネク世人ノ知ル所ニシテ、其階級ノ高マルニ從ヒ、自ラ裁判手續モ丁寧綿密ト爲ル、地方裁判所以上ハ裁判上皆合議制ヲ採リ、且漸次合議裁判官ノ數ヲ増加ス。是レヲ以テ裁判所ノ高下スルニ從ヒ、自ラ手数料増減ノ問題ヲ生スヘシ。凡ソ一タヒ訴訟ヲ提起スル者ハ其

終局ノ裁判マテ受クルニアラスンハ落付ク能ハサルハ人情ノ常ニシテ、毫モ怪ムニ足ラス、若シ自然ノ成リ行ニ放任スルトキハ、勢ヒ健訟ノ風ヲ馴成スルハ鏡ニ懸ケテ睹ルカ如シ。是レヲ以テ時トシテハ寧ロ之ヲ防止スルノ勝レルニ若カサルナリ。裁判所ノ階級ノ高マルニ伴ヒ手数料ヲ増減スルハ、自ラ健訟ノ弊ヲ防クノ一手段タルヲ疑ハス。

終リニ訴訟事件ノ種類トハ即チ刑事訴訟ト民事訴訟ノ謂ニシテ、吾人ノ通常謂フ所ノ裁判入費ナルモノハ、民事訴訟手数料ヲ意味スルヲ例トス。今夫レ訴訟手数料ヲ徴收スル所以ノ理由ニ徴スルニ、彼ノ民事訴訟ニ付キ手数料ヲ徴收スルノ正當ナルハ疑ヲ挿ムノ餘地ナシト雖モ、而モ刑事訴訟ニ至リテハ果シテ手数料ヲ徴收スルモ可ナリヤ否ヤ、又設令可ナリトスルモ、果シテ毎ネニ之ヲ實行シ得ヘキヤ否ヤハ疑問ナリ。蓋シ民事訴訟ノ場合ニ於テハ、訴訟當事者ハ原告タルト將タ被告タルトヲ問ハス、己レノ權利義務ニ關スル爭議ノ決定ヲ仰クモノナルヲ以テ、裁判ノ爲ニ利益ヲ受クルハ無論ノコトニシテ、之

ニ對スル報償即チ手数料ヲ納付スルモ豈當然ナラストセンヤ。加之、此場合ニ於ケル原告被告ハ何レモ手数料ヲ納付スル實際ノ能力ヲ具備スルヲ常トス。之ニ反シテ刑事訴訟ニ至リテハ、設令民事訴訟ト等シク訴訟手数料ヲ徴收スヘキモノナリトスルモ、猶刑事被告人ト爲ル者ハ大抵無資無産ノ徒多キヲ以テ、實際上之ヲ徴收スルコト能ハサル場合少カラサルヲ奈何セン。況ンヤ、社會ノ安寧秩序ヲ妨害シ、若クハ他人ニ對シテ非行ヲ加フル者ヲ防止スルハ國家當然ノ職務ニシテ、其當然ノ職務ヲ執行スルニ方リテモ尙手数料ヲ徴收スヘキヤ否ヤノ問題ヲ生スルニ於テヤ、是レヲ以テ刑事訴訟手数料ハ國ニ依リ、或ハ之ヲ徴收スルアリ或ハ之ヲ徴收セサルアリ。本邦ノ如キハ後者ノ部類ニ屬ス、然シナカラ刑事被告人ノ請求ニ依リ、證人ノ喚問ヲ爲スニ當リテヤ、彼等ニ給スルニ日當ヲ以テセサルヘカラサルカ故ニ、執達吏規則ハ被告人ヲシテ之ヲ負擔セシムヘキコトヲ規定ス。是レ必スシモ普通ノ訴訟手数料ニアラサルヘシ。然ルニ獨逸帝國ニ於テハ明カニ刑事訴訟手数料ヲ認メ、之ヲ十三等ニ

分チ、其金額ハ最低五_〇、まるく_〇ヨリ最高三百_{〇〇}、まるく_〇ニ上ル。

要スルニ、刑事被告人ノ多クハ無資無産ニシテ、縦シヤ、刑事訴訟手数料ヲ徵收スルコトトスルモ、實際之ヲ納付スル能ハサル者ヲ生セン、果シテ然ラハ貧困ナル被告人ハ單ニ貧窶タルノ理由ニ依リ常ニ其負擔ヲ免レ、國庫ハ却テ損失ヲ蒙ムルコトトナルヘシ。茲ニ於テカ資力アル被告人ノミ之ヲ負擔スルノ結果ニ陥リ、遂ニハ手数料ヲ設クルノ趣意ニ反スルニ至ラン。左レハトテ負擔シ能ハサル被告人ニ對シ換刑ノ方法ニ出テンカ、最早ヤ手数料ニアラスシテ刑罰ニ化シ了ルヲ以テ是レ固トヨリ妥當ナラス、畢竟スルニ刑事訴訟手数料ハ寧ロ之ヲ存セサルコソ善ケレ、否設令善カラサルモ勢ヒ止ムヲ得サルナリ。

第三節 非訟手数料

非訟手数料即チ非訟手数料ヲ徵收スル場合ノ司法行政事務ハ個人ノ權利義務ニ關スル争訟アルニアラス、故ニ其權義ノ關係ニ付若シ當事者ニシテ第

三者ニ對抗スヘキ效力アルヲ望マシテ、唯彼等ノ間ノ關係ノミニ止マラシメ、而シテ満足スルナラハ、敢テ手数料ヲ納付シ以テ官廳ノ勞費若クハ干渉ヲ求ムルコトヲ要セサルナリ。登記若クハ證明及承認ニ伴フ手数料ノ如キハ其好適例ニシテ、例ヘハ戶籍法ハ結婚者ニ對シテ結婚ニ關スル戶籍上ノ登記ヲ要ムト雖モ、若シ彼等ニシテ別段其登記ヲ必要ト思惟セサルトキハ其登記ヲ請求セサルモ不可ナルコトナシ。是レ本邦ニ於テハ常ニ有リ勝チノ事柄ニシテ、所謂内縁ノ夫婦トハ登記ノ手續ヲ了セス又ハナササル夫婦ノ謂ナリ。如上ノ理由ニ依リ非訟手数料ハ一ニ任意的司法手数料ト稱セラル。

第四節 行政手数料、外務手数料

行政手数料ハ司法以外ノ國家ノ活動又ハ政府事務ニ關シテ徵收スル手数料ノ總稱ナリ。更ニ之ヲ大別シテ、外務手数料及内務手数料ノ二トス、夫ノ自治團體ノ徵收スル手数料ハ殆ト皆内務手数料ナリ。

抑外務手數料トハ外務行政上徴收スル手數料ヲ云ヒ、之ニ反シ、内務手數料トハ外務行政ニ對シ、極メテ廣キ意味ニ於ケル内務行政ニ伴ウテ徴收スルモノヲ云フ。元來行政ハ大別シテ内務行政ト外務行政トニ分ツコトヲ得ヘシ、手數料ニ内外ノ別ヲ設クルハ主トシテ茲ニ因由スト雖モ、而モ行政手數料ヲ分チテ以上ノ二種トナス所以ハ當ニ是レニ止マラスシテ、其徴收竝ニ取扱上内務手數料ト外務手數料トハ大ニ其關係ヲ異ニスルヲ以テナリ、是レ内務竝ニ外務行政ノ性質上自ラ然ラサルヲ得サルナリ、抑外務行政ハ外國ニ於テ之ヲ行フコト多キヲ以テ、内國ニ於ケル國庫又ハ中央金庫及支金庫ノ活動ノ及ハサル場合多シ。從テ外務行政手數料ハ國庫ノ收入ニ歸セス、換言スレハ中央金庫ニ於テ收納セス、直チニ其歲入徴收官廳ノ收入トナルナリ。蓋シ其金額タルヤ、少額ニ止マルヲ以テ態々勞費ヲ投シテ迄モ外國ヨリ之ヲ内地ニ回送スルノ必要ナカルヘシ。之ニ反シテ、内務行政手數料ハ、其種類ト徴收官廳ノ如何ナルトヲ問ハス、總テ國庫ノ收入ニ歸スルヲ以テ原則トス。

外務手數料ノ重ナルモノハ海外旅行免許料及船舶ノ入港出港戶籍登記等ニ關スル手數料ニシテ、其他主トシテ支那、朝鮮方面ニ於ケル船舶ノ海員ノ傭入證明等ニ關シテ徴收スルモノナリ、是レニ由リテ之ヲ觀レハ、外務手數料ハ其内地ニ於テ徴收スルモノト、外國ニ於テ徴收スルモノトノ二種アルヲ知ルヘク、而シテ内地ニ於テ徴收スルモノハ又外務本省ノ徴收スルモノト地方官廳(府縣知事等)ノ收納スルモノトニ分タルヘシ。左ニ外務行政手數料ノ大要ヲ示サン。

- 外交官及領事官試驗手數料(明治二十六年十一月勅令)
- 外務書記生試驗手數料(明治二十七年二月外務省令第二十七號)
- 外務省文官普通試驗手數料(明治三十九年十二月十四日官報)
- 外務省留學生試驗手數料(明治三十六年七月外務省令第一號)
- 領事官職務規則第六條ニ依ル財產又ハ遺產ノ保護管理手數料(明治三十三年八月二十三日外務省令第三號)

領事官職務規則第七條ニヨル名簿又ハ其他ノ文書ノ閲覽手数料(同上)
 名簿又ハ其他ノ文書ノ認證シタル謄本又ハ抄本ノ交付手数料(同上)
 民法及戶籍法ノ規定ニ依ル身分ニ關スル届書又ハ航海日誌謄本受理ノ證
 明書ノ交付手数料(同上)
 遺言ノ取扱手数料(同上)
 在留證明手数料(同上)
 船舶積量ノ測度又ハ改測ノ取扱手数料(同上)
 假船舶國籍證書ノ交付手数料(同上)
 船舶進水ノ證明手数料(同上)
 船舶ノ入港及出港ノ取扱手数料(同上)
 船舶發着ノ證明手数料(同上)
 船舶健全證書ノ交付手数料(同上)
 航海獎勵法施行細則第四十二條ニ依ル公認手数料(同上)

航海獎勵法施行細則第二十九條ニ依ル船舶職員補缺ノ公認手数料(同上)
 旅券ノ交付手数料(同上)
 旅券ノ查證手数料(同上)
 日本品ノ外國輸入證明ノ取扱手数料(同上)
 人民申請ニ因ル諸種ノ證明、公認、認證又ハ登録手数料(同上)
 仲裁又ハ和解ノ取扱手数料(同上)
 領事官ノ取り立ツル實費又ハ取扱料(明治三十三年八月二十九日
 外務省令第三號第三條以下)
 外國旅券下附手数料(明治四十年三月外務
 省令第一號第八條)
 其他法令ノ明文ニ依リ特別ニ領事官ノ徵收スル手数料

第五節 内務手数料及其種類 其一 (第百十五頁以下参照)

内務手数料ノ範圍ハ最モ廣クシテ、若シ詳カニ其種類ヲ述ヘントセハ、勢ヒ
 各官廳ニ於テ取扱フ事務ニ付テ一々之ヲ論述セサルヘカラス、而シテ其種類

タルヤ、今尙漸ヲ追ウテ増加シツツアルナリ、斯ノ如キハ、方今行政事務ノ發展ニ伴ウテ免ルルコト能ハサル數ナリト云フヘシ、蓋シ政治經濟ノ進歩スルニ從ヒ、總テ個人ノ利害休戚ニ關係スル事務次第ニ増加スルハ一般ノ趨勢ニシテ、而シテ個人ニ關係スル事務増加スレハ、其結果自ラ個人ノ利益ヲ進捗スルコトトナリ、之ニ對シテ手数料ヲ徵收スルニ至ルハ自然ノ理ナリ。

内務手数料ノ重ナルモノハ大要左ノ如シ。

第一 警察手数料、往時ノ内務行政手数料ハ主トシテ警察手数料ニ外ナラスシテ獨逸ニ於テハ殆ト之カ爲ニ特別ノ文字名稱ヲ生シタル程ナリキ、然ルニ近頃ニ及警察事務モ漸次分化シ、曾テ警察事務ノ中ニ含まレタリシモノモ或ハ他ノ官廳例ヘハ農務省、工務省又ハ商務省等ノ所管ニ歸シタルカ爲、其今尙存在スルモノハ極メテ少シ。

第二 衛生手数料、此種ノ手数料ハ警察手数料ト相伴フ場合多シ、殊ニ往時ニ於テ然リトス、例ヘハ傳染病ノ豫防、飲食物ノ検査等ハ大抵警察事務ニ伴

フヲ以テ、之カ爲ニ徵收スル手数料ハ殆ト其何レニ屬スルヤヲ分チ難キカ如シ。

第三 教育手数料、行政手数料中教育手数料ハ其重モナルモノノ一ニシテ、前述セル司法手数料ト相連レテ最モ早ク發達シタリキ、顧フニ、古ヘ封建ノ世教育事務ハ既ニ業ニ其必要ヲ認メラレタリシモ、所謂武門武士ハ其長スル所ニアラサリシヲ以テ、武門武士ニアラスシテ學識アル者、國家ノ官吏トシテ之ヲ行フニアラサレハ獨立シテ自ラ之ニ當リシ結果、自ラ手数料ヲ徵收スルノ餘儀ナキニ至レリ、我國ニ於テモ亦同様ニシテ、嘗テハ之ヲ東修乃至月謝ト云ヒ、今ヤ之ヲ受験料、入學料、授業料ト云ヒ、官私ノ學校ニ於テ等シク之ヲ徵收ス、其私立學校ニ於テ徵收スル月謝、東修ハ恰モ往昔ノ手数料ノ起因ヲ説明シテ餘リアリ。

然リ而シテ現今手数料ヲ徵收スルノ可否ニ就テハ未タ一定スル所ナシ、或ハ曰ク、教育ノ普及進歩ハ國運ノ進歩發展ニ關スルコト尠少ナラス、サレハ教

育ハ須ラク之ヲ國家ノ事務ト爲シ、而シテ當然無償ニテ國民ヲ教育セサルヘカラスト、惟フニ國民ノ義務教育ニ付キ此說ノ正當ナルハ言フ俟タスト雖モ、中等、高等殊ニ職業教育ニ關シテハ吾人未タ其可ナル所以ヲ知ラサルナリ、殊ニ職業教育ニ關シテ然リトス、抑職業教育ハ個人ニ授クル職業ヲ以テ目的トスル特殊ノ教育ニシテ、例ヘハ林業學校、鑛山學校、蠶絲學校、醫學校、商業學校、工業學校ノ如シ、獨逸國ニ於テハ產馬事業或ハ麥酒釀造ニ關スル特別學校ノ設立アリ、此等ノ學校ハ元ト純然タル専門的ノ教育ヲ施ス所ニシテ、其卒業生ハ直チニ一定ノ職業ニ就クヲ得ヘシ、故ニ入學ノ學生數ヲ限定スルト同時ニ特定ノ授業料ヲ徵收ス是レヲ以テ職業ヲ授クル學校ハ大體ニ於テ普通ノ智育德育ヲ授クル學校ニ比シテ、比較的若クハ絶對的ニ高キ授業料ヲ徵收スルモ敢テ不可ナルナキハ明カナリ。

第五節 内務手數料 其二

第四 經濟手數料、此種ノ手數料ノ範圍ハ最モ廣シ、近時經濟ノ進歩スルニ從ヒ、之ニ關スル行政事務ハ非常ニ擴張セラレ、而シテ其事務タルヤ、前述セシ如ク直接ニ個人經濟上ノ利害ニ關スルコト密接ナルヲ以テ、彼等ヲシテ之ニ對スル手數料ヲ負擔セシムルモ左マテ苦慮スル所ナカルヘク、寧ロ却テ當然ノコトトシテ首肯スヘシ、從テ此種ノ手數料ノ益々増加スルハ怪ムニ足ラサルナリ。

經濟手數料ハ又之ヲ大別シテ免許料、證明及認定料、檢定及檢査料、試驗及監督料、貿易手數料並ニ保險手數料、統計手數料ノ七種トス、中ニ就キ我國ニ存スルモノハ前五者ノミ今一々之ヲ詳說スルノ煩ヲ避ケ左ニ其大要ヲ説明セン。

(一) 免許料、ハ各官廳ノ取扱フ免許事項ニ對シテ徵收セラルルモノニシテ、例ヘハ菓子營業鑑札料、菓子仕入出賣鑑札料、牛馬賣買免許料等ノ如シ。

(二) 證明及認定料、ハ其文字ノ示スカ如ク、個人ノ請求ニ基キ或事項ヲ證明又ハ認定スルニ當リ徵收スルモノニシテ、例ヘハ土地臺帳、謄本手數料又ハ

輸納地金品位證明料ノ如シ。夫ノ英國政府カ金銀製ノ工藝品又ハ器具ノ品位ヲ證明スルカ如キ亦好適例タルヲ失ハス。

(三) 檢定及檢査料、我國ニ於ケル度量衡ノ檢定料或ハ蠶絲檢査料ノ如キハ其例ナリ。

(四) 試驗及監督料、例ヘハ船舶ノ檢査證書手數料、藥局手數料ノ如シ。

(五) 貿易手數料、例ヘハ税關ニ於テ徵收スル臨時開庫手數料ノ如シ。抑税關倉庫ハ午後ノ六時ヲ過クレハ閉鎖サレ且日曜ハ税關事務ヲ取扱ハサルモ特ニ營業上一時一刻ヲ爭フ輸出ノ請求アルトキハ、臨時ニ開庫モスレハ事務モ取り扱フナリ。之ニ對シテ徵收スルハ即チ臨時開庫手數料ナリ。

(六) 保險手數料、是レ未タ我國ニ於ケル實例ナシ。然リト雖モ近時往々保險業ヲ國營ニ移サントスルノ說ナキニアラス。元來國家カ總テノ保險事業ヲ經營スルヲ可トスヘキヤ否ヤハ未タ學理上竝ニ實際上ノ一大疑問ナリト雖モ、或ル種類ノ保險業ハ國家ノ經營ニ委ヌルヲ以テ正當トナスヘキナリ。例ヘ

ハ火災保險ノ如キ、若クハ農業保險ノ如キハ其適例ナリ。蓋シ我國ノ家屋ハ外國ノ建物ト異リ、其建築ノ木造ナルト且牢固ナラサルカ爲火災ノ厄ニ罹ルコト非常ニ多シ、又況ンヤ農業ニ關シテハ、毎年春秋ノ候風伯雨師ノ暴橫ヲ逞ウスルアリ、之カ爲ニ農民ハ非常ノ災害ヲ蒙ルニ於テヲヤ、此等ノ損害ニ對スル保險事業ハ國民ノ爲一大必要ノ事業ナリトハ言ヘ餘リニ重大ニシテ兎テモ普通ノ營利會社ノ能クスル所ニアラス、須ラク國家ノ經營施設ニ俟タサルヘカラス。其他勞働乃至失業者保險ノ如キ皆然リ。獨逸聯邦ノ一タルはばりや王國ノ火災保險業ハ現ニ國家ノ事業トシテ、政府之ヲ經營スルニアラスヤ。

(七) 統計手數料、是レモト佛蘭士ニ胚胎シ、所謂「どろあごすたちすちく」即チ是レナリ。サレハ名ハ統計手數料ト云フモ、其實ハ貿易手數料ナリ。元ト輸出入貿易ニ關シテ、精細ノ統計ヲ調製スル目的ニ出ツ。佛蘭士ニ於テハ、千八百七十二年始テ之ヲ設ケ、獨逸ニ於テモ千八百七十九年佛蘭士ニ倣ヒテ之ヲ採用セリ、而シテ其率タルヤ、極メテ低シト雖モ、貿易業ノ發展スルニ從ヒ、益々其收

入ヲ増加スヘク、強大國ノ輸出入貿易ハ其金額非常ニ多大ナルヲ以テ、其收入モ亦相當ノ金額ニ達スルヲ得ヘシ。

第六節 ● 手数料ノ高低論

既ニ述ヘタリシ如ク、手数料ハ元ト收入ト經費ト相均シキヲ以テ原則トスヘシ、而シテ此事タルヤ、獨リ理論上ノミニ止マラスシテ、從來各國ノ立法上ニ於テモ亦之ヲ認ム、此理ニ由リ設令法律ヲ以テセス、單ニ行政處分ヲ以テ尙課徴スルヲ容ルセシ所以ナリ、サレハ手数料ヲ以テ歳入ノ手段ニ供スルコトハ各國政府ノ政策上肯ヘテ採用セサル所ナリキ、例ヘハ普魯西ノ市町村税法ニ付キ手数料ヲ規定セル條項ヲ見ルニ明カニ其得ル所ト其費ヤス所トノ相等シカルヘキモノタルコトヲ定ムルカ如シ、手数料ノ由來及學理ニ徴スレハ誠ニサモアルヘキコトナリ。

然リト雖モ、原則ハ元則ナリ、人若シ實際ニ處シ之ヲ絶對的ニ株守シ、苟クモ

手数料タルモノハ必スヤ收入ト支出ト相同シカラサルヘカラストセハ徒ニ刻舟ノ誹リヲ招クニ止ラサルヘシ、夫ノ北米合衆國ノ如キ、新ニ租稅ヲ設ケ或ハ之ヲ増徴スルノ不便ナル場合ニ於テハ手数料ニ依ルノ簡便ナルニ如カストナスアリ、以テ其例證トナスニ足ル、殊ニ地方自治團體ノ財政上手數料ハ一好財源タルヲ得ヘシ、蓋シ、地方自治體ノ如キハ、其地域狹ク、而シテ其經營施設スヘキ事業ハ、直接ニ一個人ノ利害ト觸接スル場合多キヲ以テ手数料ヲ徵收スルハ理論上將タ實際上兩ナカラ機宜ヲ得タルモノナリ、誰カ亦之ヲ疑フヘキ。

第七節 手数料ト印紙ト

手数料ノ徵收及納付ハ多ク印紙又ハ證券ニ賴ル、是レヲ以テ、人或ハ印紙ト手数料トヲ混同スルコトナキヲ保セスト雖モ、印紙或ハ證券ハ獨リ手数料ニ限ラレスシテ、租稅ノ收納手段トシテモ又用ヒラルコトナリ、例ヘハ印紙稅

骨牌印紙税ニ於ケルカ如シ。大正四年度ノ豫算ニ於テ、歳入經常部ノ第二款ニ「印紙收入」トシテ三千二十六萬五千五圓ヲ計上シ、其第四款雜收入印紙收入中第一項ニ「免許及手数料」トシテ二十萬二千六百九十圓ヲ計上セリ。然ルニ印紙收入中手数料ノ收入カ果シテ幾何ニ上ルヘキカハ、豫算上明了ナラス。實ハ之ヲ知ルコト甚タ難シ何トナレハ、租税手数料兩ナカテ收入印紙ニ頼ツテ以テ收納セラルルカ故ニ實際上殆ト之ヲ區別スルコト能ハサレハナリ。況ンヤ法文上手數料ノ範圍及種類ノ確定セサルモノアルカ爲果シテ手数料ト看做スヘキヤ否ヤ是レ又明カナラサル例アルニ於テヲヤ、予輩豫算外國庫ノ收入ニシテ其實手数料タルモノ稀ナラサルヲ認ム。

嘗テ大藏省ノ調査ニ據ルニ、明治三十七年度ノ手数料ハ七十九種ニシテ其收入額ハ九十九萬五千九百八十九圓ナリシト云フ、然レトモ精確ニ言ヘハ單リ以上ニ止ラサルヘク爾後時ヲ經ルニ從ヒ、漸次増加シ、益々煩雜トナリシハ云フヲ俟タス現ニ明治四十四年度ノ豫算ニ依ルニ手数料ノ種類ハ大要九十

七ノ多キニ上リ其收入ハ合計一百九十二萬一千四百五圓ニ達スト云フ。

第三款 租稅汎論

第十四章 租稅ノ意義

第一節 租稅ノ定義

租稅トハ、團體經濟ノ歲出ヲ支辨スルニ必要ナル歲入ヲ得ンカ爲ニ課徴セラルル一般の收納ヲ云フ。以上ノ定義ニ從ヒ、租稅ノ觀念ヲ組成セル重ナル條件ヲ解晰スレハ左ノ如シ。

一、租稅ハ所謂團體經濟ノ歲出又ハ經費ヲ支辨スルヲ以テ其目的トス。蓋シ、團體經濟ハ個人經濟ノ如ク其生存上必スヤ費消スル所ナカルヘカラス。費消セサレハ生存スルコト能ハサルナリ而シテ苟クモ費消スル所アラント欲セハ先ツ費消スヘキ物資アルヲ要ス。而シテ經費ヲ支辨スル爲ノ收入ハ主トシテ租稅ニ賴ル。即チ個人經濟ノ收入ハ其營業又ハ財產ヲ以テ財源トスルカ

如ク、團體經濟ハ主トシテ租稅ヲ以テ其收入ノ財源ト爲スヘキナリ。

二、茲ニ於テカ、租稅ハ其國民ニ賦課シテ以テ徵收セララルル所ノモノナリ。蓋シ「課徴」スト云ヘハ自ラ強制的ノ意味ヲ含ムヘシ、詳言スレハ、租稅ハ個人經濟ノ收入ノ如ク交換又ハ賣買ノ關係ニ基カスシテ國家カ其權力ニ依リ、臣民ニ對シテ之カ納付ヲ命令スルモノ即チ是レナリ。故ニ租稅ニ在リテハ常ニ財政學者ノ所謂財政權ノ存在ヲ前提トスヘシ。茲ニ財政權ト云フハ、固ヨリ彼ノ三權分立說ト關係アルニアラスシテ、唯國家ハ其自存ノ必要上、歲入歲出ヲ調フル權能ヲ有スト云フニ外ナラス。普魯西ノ統計局長はふま^ん（今ヲ距ルコト殆ト六十年前ノ人）嘗テ言ヘルアリ、曰ク、何人カ租稅ヲ納付スヘキヤヲ定ムルハ獨リ國家ノ權能ニ屬スト、以テ財政權ノ一端ヲ説明スルニ足ル國家ハ實ニ獨リ納稅者ヲ定メ、彼等ニ對シテ租稅ノ納付ヲ命令スルノミナラス、又之カ支出ノ方法ヲ定ムルノ權能ヲ有ス。凡ソ國民ヲ強制シテ以テ其所有財產又ハ所得ノ一部ヲ徵收スルコトヲ得ルハ獨リ國家アルノミ。

以上ノ説ハ、國體及政體ノ異ルニ從ヒ其關スル所一様ナラス。茲ニ予輩ノ説明シタルハ我日本帝國ノ國體ニ付テ論斷セルノミ、佛蘭士或ハ北米合衆國ノ如キ國體政體ノ國ニ在リテハ、同一ノ原理ヲ適用スルコト能ハサルヘシ。是レヲ以テ、人若シ此等諸國ノ學者ノ著書ヲ緝カハ、其根本觀念ニ於テ異ナル所アルコトヲ發見スヘシ。以テ徒ラニ外國ノ制度文物思想ヲ移植スルノ危險ナルヲ知ルニ足ル。

國家ニ就テハ大要斯ノ如シ、但地方團體ニ至リテハ稍其趣ヲ異ニス、蓋シ國家ハ所謂無缺ノ財政權ヲ享有スト雖モ、地方團體ニ至リテハ然ラス、法律ノ範圍内又ハ國家ノ認與シタル權限内ニ於テ之ヲ行使スルヲ得ルノミ、加之、間々監督官廳ノ強制ニ基キ其財政ヲ調理セサルヘカラサルコトアリ、例ヘハ其豫算カ成立セサルカ、將タ故ラニ之ヲシテ成立セシメサラントスル手段ヲ執ルモノアルニ於テハ、中央政府ハ其監督權ヲ行使シテ以テ豫算ノ執行ヲ命令スヘシ、現ニ我國ノ府縣制、市町村制中ニ如上ノ規定ヲ存スルノミナラス、外國ノ

自治制度上亦等シク認ムル所ナリ。所謂強制豫算ノ制度、又ハ豫算ノ原案執行ノ命令是レナリ。元來地方團體ニ於テハ、地方議會或ハ參事會ト當局者トノ間ニ於ケル意見若クハ感情ノ衝突等ニ由リテ屢々豫算不成立ノ場合アリ。甚シキニ至リテハ、設令如何ニ必要ナル事業タルニ拘ハラス、故ラニ年々否決スルノ愚ヲ演スルコトアリ。斯カル場合ニハ、中央政府ヨリ強制的ニ豫算ノ執行ヲ命スルノ必要アリ。

凡ソ強制セラルルモノハ必スヤ服從ノ關係ヲ有スル者ナラサルヘカラス、是レ帝國憲法ニ納稅ハ臣民ノ義務ナリト規定セル所以ナリ。但租稅ハ必スシモ一國ノ臣民ノミ之ヲ納付シ、又ハ負擔スルモノニアラス、法律上一國ノ臣民トシテ認メラルル者ハ勿論、其他事實上臣民ノ權利ヲ享受スル者ハ、亦其義務ヲ負擔セサルヘカラス。例ヘハ其國內ニ居住セル外國人ノ如キ是レナリ。

三、租稅ハ一般的收納ナリ。蓋シ租稅ノ目的ハ、モト歲入ヲ得ルニ在ルヲ以テ、手数料ノ如ク報償ノ性質ヲ帶ハシメ、以テ一事一件ノ經費ヲ支辨スル爲ノ

收入ニアラサルナリ。換言スレハ租税ハ一般ニ政治上必要ナル經費ヲ支辨セシカ爲ニ要スル所ノ收入ヲ得ルヲ目的トス。是レヲ以テ帝國憲法並ニ會計法ニ依ルニ、毎ネニ租税其他ノ收入ト云ヘル文字ヲ存シ、以テ明カニ租税ト其他ノ收入トヲ區別セリ。抑一般ナル語ハ特別又ハ格別ノ反對ニシテ、租税ハ手数料ノ如ク、一事一件ノ經費ヲ償フ爲ニ徵收セラルルモノニアラス、故ニ手数料ハ其性質トシテ之ヲ納付スル人又ハ事件ニ依リテ定マルモ、租税ハ全ク之ニ反シ、彼ノ税額ノ如キ將タ税目ノ如キハ之ヲ徵收スル場合ニ於ケル一般ノ財政又ハ政治上ノ關係ニ依リテ定マルモノトス。サレハ夫ノ財政上、歳入ハ歳出ニ依リテ定マルト云ヘル原則ハ特ニ租税ニ關シテ妥當ナルヲ見ル。

要スルニ、國家ノ政治的行動ハ一般民衆ノ利益ヲ謀ルニ在ルヲ以テ、果シテ何人ノ利益ニ歸スルヤ、固ヨリ計リ知ルヘカラス。軍備又ハ戰爭ノ如キ、個人トシテハ、之カ爲ニ供スル犠牲ハ其受クル利益ニ比シテ却テ大ナル場合甚タ多ク、單リ大ナルノミナラス、間々犠牲ノミニ終ルコトアリ、何トナレハ、軍備又ハ

戰爭ニ由リテ收ムル所ノ利益ハ國民一般ノ利益ニ歸スヘク、一個人トシテ之ヲ受クヘキモノニアラサレハナリ。從テ其經費モ亦一般人民ヲシテ負擔セシムルノ外ナシ。

第二節 租税ト舊學說ノ一、二

是レヲ以テ、租税ハ利益ノ交換ニ基クモノナリト云ヘル説ノ如キ、若クハ人民カ國家ヨリ享ケタル利益ニ對スル對價ナリト云ヘル説ノ如キ、或ハ身體、生命、財産ノ保険料ナリト云ヘル説ノ如キ全然採ルニ足ラサル昧説ニアラサレハ謬論ナリ、二者必ス其一ニ居ラン。

此等ノ學說ハ財政及租税ニ關スル著書中ニ往々散見スル所ニシテ、而モ其基ク所ヲ索スレハ、彼ノ佛蘭士ノ大革命ノ原因ヲ爲シタル社會契約説、天賦人權説等ニ存ス。若シ國家ニシテ果シテ治者ト被治者トノ間ノ契約ニ依リテ成立センカ、租税モ亦自ラ契約又ハ合意ノ承諾ニ根柢セサルヲ得サルヘシ。茲ニ

於テカ租税ハ被治者カ治者ヨリ受クル利益ニ對スルノ報酬ナリ、對價ナリ、若クハ保險料タラスンハ止マサルヘシ。然リト雖モ以上ノ說タルヤ、外國ニ於テハ兎モ角、我帝國ノ如キ國體ノ國ニ於テハ全然適用シ得ヘカラサルナリ。設令外國トテモ斯カル例ハ極メテ稀ナラン。

租税ハ決シテ利益ニ對スル報酬ニアラス。念フニ此事タルヤ、個人トシ將タ國民トシテ、其國家ヨリ受クル保護ノ實際ニ徴シテ之ヲ説明スルニ難カラス、且ヤ國家カ個人或ハ國民ニ對シテ行フ所ノ政治的行動ニ付テ見ルモ亦明カナリ。姑ラク戰爭ノ事例ニ依ランカナ誰カ戰爭ノ爲ニ直接利スル者カアル、個人トシテハ當ニ利スル所ナキノミナラス、却テ唯其利益ヲ犧牲ニ供スルノミ。勿論戰爭ニ際シ產ヲ興シ富ヲ致ス者少カラスト雖モ、是レ唯商業取引ニ由リテ利益スルニ過キスシテ直接自ラ戰爭スルカ爲利益スル所アルニアラス云ハハ間接ノ結果ニシテ直接ニアラス、苟クモ國民タルモノカ戰爭ニ由リテ以テ直接ニ利スル所アラントセハ是レ國民ノ膏血ヲ賊スル者ナリ、以テ國民カ

戰爭ノ爲負擔スル租税ハ其報酬又ハ對價ナリト解スルコト能ハサルヲ見ルヘシ、況ンヤ保險料タルニ於テヲヤ。

第三節 以上學說ノ實際上ニ於ケル適用

更ニ進ンテ以上ノ說ヲ實際ニ適用スルトキハ頗ル奇異ナル結果ヲ呈スヘシ。例ヘハ假リニ租税ヲ以テ保險料ト看做サンニ、國家ニ對シ最モ多ク保險料ヲ拂ハサルヘカラサル者ハ如何ナル種類ノ人ナルヘキカ、言フマテモナク貧民ナリ、何トナレハ彼等ハ常ニ危險ナル職業ニ従事スルハ愚カ、衛生ニ注意セス、又實際注意スルコト能ハサレハナリ。故ニ若シ生命保險ノ要不要ヲ問フ者アラハ必スヤ先ツ貧民ナリト答ヘン、果シテ然リトセハ、負擔力ニ乏シキ貧民ハ寧ロ其之ニ富メル資産家ニ比シテ、多クノ租税ヲ仕拂ハサルヘカラサルコトトナルヘシ。要スルニ彼ノ富豪ノ如キハ自ラ自己ヲ保護スルノ手段ヲ缺カサルヲ以テ、假令保險ナシトテ左迄憂フルニ足ラサルナリ。財産ノ保險ニ關シ

テモ亦然ラン哉、富者ノ財産ハ其種類ヨリ觀ルモ將タ性質ヨリ觀ルモ高價ニシテ重量少ク從テ保存ニ容易ナルモノ多ク、又自ラ之ヲ保護スルコト難キニアラス、然ルニ貧者ノ財産ハ其形狀若クハ性質上破壊セラレ易キノミナラス、價格少ク之ニ反シテ重量多キ物多シ、從テ保險料ハ自ラ高カラサルヲ得ス況ンヤ自ラ之ヲ保護スルコトヲヤ、嘗テ二十餘年前露士亞ト獨逸ノ關係穩カナラサルニ當リ、^{うる}へるむ皇帝ハ軍備ノ擴張ヲ企テタリシニ社會民主黨ノ頻リニ之ニ反對セシヤ、一政治家アリ、之ヲ反駁シテ曰ク、獨逸ニシテ若シ露士亞ト戰端ヲ開カハ其害ヲ蒙ル者ハ先ツ誰ソヤ、予ハ明カニ君等ニ語ラン、言フマテモナク君等ノ代表セル地方ノ農民又ハ貧民ナリ、一旦戰爭ニシテ開始セハ、敵軍ハ直チニ軍隊ヲ押シ進ムヘク、而シテ之カ爲ニ或ハ火ヲ放タレ、或ハ田畑ヲ荒サレ、或ハ家畜ヲ撲殺セラルル者ハ即チ彼等ヲ外ニシテ亦何人カアル、彼ノ富裕者ノ如キハ殆ト之ニ與カラス、彼等ハ其貴重ナル家財器具若クハ正金有價證券ヲ携帶シテ難ヲ安穩ノ地ニ避クヘシ、跡ニ殘リテ無殘ニ兵馬ノ蹂

躪ニ委ヌル貨財物品ハ比較的の低價ナル小民ノ所有物ニシテ、其人等ハ即チ君等ノ同志ナラサルヲ得スト是レ恰モ能ク租稅保險說ノ誤謬ヲ指摘セルモノト云フヘシ

租稅ハ亦利益ニ對スル報酬ナリトノ說モ、等シク之ヲ實際ノ事例ニ徴スルトキハ前述セシ所ト殆ト同様ノ結果ニ歸到セン。念フニ近時文化ノ進歩ハ所謂近世文明的ノ設備ヲ喚起シ、以テ大ニ厚生利用ノ道ヲ啓キタリ、例ヘハ圖書館ノ如キ、公園ノ如キ、道路ノ如キ、其最モ利益ヲ受ケ而シテ又最モ之ヲ壞敗スル者ハ貧民ニアラスヤ、即チ彼ノ最モ多ク道路ヲ使用損壞スルモノハ彼等ノ車輛ニシテ健康上最モ公園ヲ必要トスル者、圖書館ニ於テ智識ノ開發ヲ謀ル者、亦多クハ中産以下ノ者タリ、富有者ノ如キハ之ニ反シ、寧ロ自ラ資ヲ投シテ之ヲ辨スルヲ以テ、其恩澤ニ與カルコト比較的ニ少シ、所謂社會政策的設備ハ近時開明諸國ニ於ケル財政膨脹ノ一大原因ニアラスヤ。

是レニ由リテ之ヲ觀レハ以上ノ諸說ハ實際上ヨリ觀ルモ、將タ理論上ヨリ

推スモ、到底探ルニ足ラサルナリ。

第四節 租税ノ目的及影響

既ニ述ヘタリシ如ク、元來租税ハ歳入ヲ得ルヲ以テ目的トスト雖モ、同時ニ又國家ノ政治行政上ノ目的ヲ併セ行フヲ妨ケサルナリ、是レ當サニ然ルヘキノ理ニシテ、唯歳入ヲ取得スルヲ以テ能事終レリトナシ、一切他ヲ顧ミサルニ至テハ其弊ノ窮極スル處將ニ計リ知ルヘカラサルモノアラントス、尤モ後ノ場合ニ於テ之ヲ租税ノ目的ト云フハ稍過タルノ言ナランモ、兎ニ角課税ノ影響スル所ヲ尋ネテ設令負擔スル所ノ金額ハ均シキモ、成ル可ク國民及個人ノ經濟ニ善カレカシト祈サルヘカラサルナリ、實ニヤ課税ノ金額ハ同シトスルモ課税方法ノ如何ニ由リテ負擔ニ難易ノ別ヲ生スルハ夙ニ世人ノ知了スル所ニシテ此點ニ關シテハ英國當局者ハ常ニ注意スル所アリ、千九百十四——十五年ノ大戰ニ際シ、英國ハ亦傳來ノ財政策ヲ踏襲シ増税ト國債トヲ併用シ、

以テ軍事費ヲ支辨セントセシ此時ニ當リ出納尙書ルイゴ、ちよーちハ千九百十五年ノ財政演說ニ於テ揚言シテ曰ク、……此好結果ヲ奏セシ原因ノ大部分ハ徵收方法ノ簡便ナリシ爲ニシテ、這ハ附加税ニ關シ殊ニ顯著ナルモノアリ……殊ニ注意スヘキハ其徵收方法カ簡便ナルコトヲ賞揚セシ書面ヲ送金ノ際小切手ト同封セシモノ尠カラサリシ一事トス云々以テ這般ノ消息ヲ解スルニ足ラン、サレハ學者中更ニ一步ヲ進メテ租税ハ島メテ人民ノ消費ヲ捕捉スルヤウ仕組ミテ、以テ直接ニ其經費ヲ制限シ間接ニハ貯蓄ヲ獎勵スヘシト云フ者アリ次テ産業ノ發達ヲ獎勵スヘシ若クハ妨害スヘカラスト云フ者アルニ至ル、近時あざるふ、わぐな一ハ頻リニ租税政策上ニ於ケル社會政策主義ノ必要ヲ鼓吹セルアリ、予輩ヲ以テ之ヲ觀レハ、或ハ常軌ヲ逸セサルヤノ疑ナキニシモアラスト雖モ、而モ其學說及政策ノ改進ニ貢獻セシコト決シテ尠ナラサルナリ、今ヤ皇國ノ産業ハ漸ク革命ノ時期ニ際シ資本勞動其何レノ側ヨリ見ルモ注意ヲ加ヘテ以テ將來ノ最善ヲ期セスンハ他日臍ヲ喘ムノ悔ア

ルヤ必セリ。じよんもーれーハぐらつすとーんノ財政方針ヲ評シテ曰ク、氏ノ念頭ヲ離レサリシ財政上ノ根本目的ハ絶エス國民ノ生産力ヲ擴張セシメントスルニアリ、此目的ノ爲ニ努力セルハ氏ノ財政計畫ヲ一貫セル生命ナリト國利民福ヲ以テ生命トセル政治家ヲ有スル英國民ハ幸福ナル哉。

要スルニ租税ハ國民ノ利益ヲ犠牲ニ供スルニ始マリ、其義務ヲ盡スニ終ル。故ニ其犠牲ハ吾レ人共ニ承知ノ上ノ事ナリト雖モ、若シ能フヘクンハ出來得ル丈ケ國利民福ト衝突スルコトナカラシコトヲ望マサルヲ得ス。

第十五章 租税ノ術語

租税ノ術語ハ一見簡單ナル文字タルカ如シト雖モ、皆租税ノ根本的觀念ヲ含有シ、其詳細ナル説明ハ總テ租税ヲ説キ了リタル後ニアラスンハ不可能ナリ、故ニ茲ニハ唯大體上ノ説明ヲ爲スニ止メントス。

第一節 税源

抑税源トハ其文字ノ示ス如ク、租税ヲ納付シ又ハ之ヲ負擔スヘキ財貨ヲ生スル根源ノ謂ニシテ、或ハ現品タルコトアリ、或ハ貨幣タルコトアリ更ニ之ヲ廣義ニ解スルトキハ營業財産勞力等ヲ意味ス、是レヲ以テ、税源ノ所有者コソ、實際其所得又ハ財産ノ一部ヲ割テ以テ租税ノ納付ニ充ツルモノト云フヘケレ。

税源豊富ナレハ租税ノ收入モ自ラ多ク、之ニ反シテ税源涸渇スルトキハ、管

ニ收入尠キノミナラス、國民ノ經濟ヲ害フコト多シ、例ヘハ十四五年前迄ニ於ケル伊太利ノ如キ西班牙ノ如キ其適例ニシテ、稅源非常ニ涸渴シ從テ國民ノ經濟モ亦衰頽セリキ。去レハ租稅ヲ司ル者ハ唯ニ其徵收ノ難易及收入ノ多少ノミニ注目セスシテ、宜シク稅源ノ涵養及増減扶植ヲモ併セ注意スヘキナリ。何トナレハ國家ハ一時ニアラス、永久ヲ期セサルヘカラサルヲ以テナリ、西班牙ノ如キハ以テ吾人ノ殷鑑トナスニ足ル。往時威名赫々タリシ國勢ハ漸次衰頽陵夷シテ今ヤ辛ウシテ第二等國若クハ三等國ノ列ニ備ハルニ至リヌ。斯ノ如キハ獨リ外觀上ニ止マラス其内實ニ至リテハ積衰ノ餘弊却テ酷シキモノアリ。地方ノ自治團體中小學校教員ノ俸給ノ仕拂ニ窮シ、仕拂未濟ノ狀態ニ在ルモノ尠カラスト云フ、豈民力ノ枯渴ヲ證シテ餘リアルニアラスヤ。

夫レ既ニ斯ノ如シ、惡ンソ能ク秩序安寧ヲ維持スルコトヲ得ンヤ、凡ソ恒産ナキ者ハ恒ノ心ナシ、財源枯渴シテ民常業ヲ失ヒ衣食スルコト能ハサルニ至ラハ何ヲナシテカ憚ラサランヤ、彼ノ無政府黨員等ニシテ動モスレハ不軌ヲ謀ル者ノ西班牙、伊太利ニ多キハ畢竟是レカ爲ナリ。蓋シ人心ノ嚮背ヲ決スルハ多クハ衣食ノ料ノ豊富ナルト缺乏セルトニ由ルコト多シ、恐ルヘク又警ムヘキナリ。

第二節 租稅ノ主體ト客體並ニ納稅者ト 擔稅者

一、租稅ノ主體及客體 租稅ノ主體及客體ハ兩々相對比スル語ニシテ、主體トハ法律上租稅ヲ納付スル人ヲ云ヒ、之ニ反シテ客體トハ租稅ヲ納付スル所以ノ事情又ハ事柄ヲ指シ時トシテハ租稅ノ多少ヲ定ムル標準ヲ意味スルコトアリ。要スルニ標準ト云ヒ、將タ納付スル所以ノ事情ト云フモ、皆租稅ヲ賦課スル目的物ニ伴フヲ以テ、往々之ヲ稱シテ課稅ノ目的物ト云フ。本邦ニ於テハ稅務行政上通常之ヲ課稅ノ標準ト云ヒ、時トシテハ課稅物件ト云フ。例ヘハ地租ノ主體ハ土地所有者ニシテ、所得稅ノ主體ハ所謂所得者ナルニ反シ、其客體

租稅ノ術語 租稅ノ主體ト客體並ニ納稅者ト擔稅者

ハ地價及所得金額ナルカ如シ是レニ由リテ之ヲ觀レハ租稅ノ客體ハ時トシテ稅源ト相同シク時トシテハ相異ルヲ見ル所得稅ノ稅源及客體ハ所得ナルニ、地租ノ稅源ハ土地ノ收益ニシテ其客體ハ地價ナリ、蓋シ地租ハ之ヲ地價ニ課スルカ故ニ地租ノ客體ハ地價ナリト雖モ、其納付ニ充ツヘキ資金ハ土地ノ收穫ニ賴ルノ外ナク、云ハハ收穫ハ稅源ナリ、之ニ反シテ、所得稅ニアリテハ二者全ク同一ナリ。

二、納稅者及擔稅者 納稅者トハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ、納稅ノ義務ヲ有スル者ヲ指シ、之ニ反シ擔稅者トハ、其之ヲ納付スルト、セサルトニ拘ハラズ畢竟自己ノ所得又ハ財產ノ一部ヲ割キ、租稅トシテ國家又ハ地方團體ノ歲入ニ供スル者ヲ云フ、約言スレハ、租稅ノ爲ニ早晚其經濟上ノ利益ヲ犧牲ニ供スル者ヲ云フナリ、是レヲ以テ租稅ヲシテ不合理ナル影響又ハ結果ヲ生セサラシメントセハ、擔稅者ハ稅源ノ所有者ナラサルヘカラス、何トナレハ、稅源ノ所有者ニアラスンハ永ク租稅ノ爲ニ其利益ヲ犧牲ニ供スルコト能ハサルヲ以テナ

リ、然ルニ實際ニ於テハ、稅源ノ所有者タラサルモ猶擔稅者ト爲ルコトアリ、凡ソ稅源ヲ有セスシテ、擔稅者ト爲リ若クハ擔稅者タラシメント欲スルモ其ハ到底永ク堪ヘ得ル所ニアラスシテ、押シテ之ヲ強ユルトキハ終ニハ財產ヲ耗盡スルニ至ラン、是レヲ以テ斯カル結果ヲ生セサラシメントセハ、必スヤ擔稅者ハ稅源ノ所有者ナラサルヘカラサル所以ニシテ、換言スレハ、租稅ハ總テ稅源ノ負擔ニ歸宿スルヲ以テ元則トス、今各種ノ租稅ニ付テ之ヲ見ルニ、或ハ納稅者及擔稅者其人ヲ同ウスルモノアリ、或ハ之ヲ異ニスルモノアリ、加之間々之ヲ同ウシ、間々之ヲ異ニスルモノアリテ一樣ナラス。

以上ノ事實ハ稅源ノ何レニ存在スルヤヲ究メ、且租稅カ人民ノ經濟上ニ及ホス影響ヲ詮索スルニ方リテ重要ナル關係ヲ有ス、所謂直接稅間接稅說ノ如キハ主トシテ如上ノ關係ニ基クモノナリ。

抑納稅者ト租稅ノ主體トハ其實一ナリト雖モ、兩者ハ其觀察ノ點ヲ異ニス、即チ後者ハ法律上租稅ノ賦課アルニ對シ、必スヤ之カ徵收ニ應スル者ナカル

ヘカラサル觀念ニ基キ、前者ハ之ニ反シ法律上又ハ經濟上ヨリ貨幣又ハ物品ヲ出シテ以テ之カ納付ノ手續ヲナスノ點ヨリ觀タルモノナリ。故ニ一ハ單ニ之ヲ法律上ヨリ觀、一ハ主トシテ其經濟上ニ及ホス所ノ結果ヨリ觀察シタルモノト云フコトヲ得ヘシ。

第三節 租稅ノ單位ト稅步竝ニ租稅臺帳ト

稅率

一、租稅ノ單位及稅步。租稅ノ單位トハ、租稅ノ客體ニシテ通常數、重量又ハ金額ニ依リテ表章サレ、以テ稅額ノ多少ヲ計算スル起點ト爲ルモノヲ云フ。例ヘハ人頭稅戶別割ニ於ケル一人又ハ一戶ハ其單位ナルカ如シ。之ニ反シテ稅步ハ稅額ヲ計算スルニ當リテ其單位ニ對スル割合又ハ金額ヲ云フ。謂ハハ租稅ノ單位ニ付テ徵收シ又ハ之ニ賦課スル稅額若クハ步合ニ外ナラス。

二、租稅臺帳及稅率。租稅臺帳トハ租稅ノ主體及客體其他租稅ノ負擔及義

務ヲ證明スル總テノ事實ヲ載録セル官簿ヲ云フ。例ヘハ地租臺帳ノ如シ。稅率ハ之ニ反シテ各種ノ租稅ニ屬スル客體ニ付テ、一々其單位竝ニ稅步ヲ蒐録セル稅表ナリ。例ヘハ關稅定率表ノ如シ。所謂關稅定率表ニハ先ツ輸入物品ヲ第一類、第二類、第三類ニ分類シ、更ニ其中ノ各物品ニ付テ一々稅步ヲ規定セリ。例ヘハ鐵一噸ニ付テ幾何、米百斤ニ付キ金幾圓ト云フカ如シ。鐵一噸或ハ米一石ハ租稅ノ單位ニシテ、鐵ト米トハソノ客體ナリ。故ニ關稅定率表ハ租稅ノ單位トソレニ對スル稅步トヲ集メテ、之ヲ輯録セル表ニシテ、是レソ吾輩ノ特ニ用ヒントスル稅率ノ意義ナル。

單リ租稅ノミナラス、彼ノ鐵道ノ料金其他類似ノ收納ニ付テモ賃率ト云ヘル文字ヲ使用セリ。而シテ賃率ノ意義タル矢張り各般ノ距離ト之ニ對スル料金トヲ合セ意味シ、單ニ金額ノミノ謂ニアラサルナリ。是レニ由リテ之ヲ觀レハ、稅率トハ一定ノ金額又ハ步合ノミヲ指サスシテ、單位及稅步ノ結合ト説明解釋スルヲ以テ、學理上適當ノ解釋ナリト信ス。而シテ此解釋ノ實用ハ主トシ

テ間接税ニ存スルモノナリ。尤モ通常ハ税率、税歩ノ區別ヲ爲サスシテ、二者共ニ税率ト看做スヲ例トス。例ヘハ關稅ノ場合ニ於ケル税率ハ、其多數ノ客體ニ付テ一々記錄セラレタル單位及税率ノ結合ナリト雖モ、地租ニ在リテハ單位ニ其客體タル地價ニ課スル一定ノ歩合ヲ指スカ如シ。故ニ此場合ニ於テハ單位ト税歩ト相分離セラレテ、唯税歩ノミヲ稱シテ税率トハ云フナリ。

第十六章 直税及間税又ハ直接税及

間接税

附 定率税及配附税

第一節 租税ノ分類。定率税及配附税

租税ノ種類及分類ハ、學理上ノ標準ニ依ルト、將タ政治行政上ノ標準ニ依ルトニ從ヒ自ラ異ナルト雖モ、中ニ就キ最モ大切ナルハ、直税及間税ノ區別トス。此區別タル元來學理上ノ區別ニ過キサリシモ、其後漸ク各國ノ稅制上ニ採用セラレ、今ヤ當ニ租税行政上ノミナラス、其他ノ政治關係ヲモ有スルニ至レリ。故ニ縱令學理上不完全且曖昧ナルヲ免レストスルモ、尙之ヲ論究スルノ必要アリ。

凡ソ租税ノ分類ヲ爲スニ方リ、其標準トナスヘキモノ尠カラスト雖モ、就中

直税及間税又ハ直接税及間接税 附、定率税及配附税 租税ノ分類、
定率税及配附税

租税ノ性質其賦課徵收及納付ノ手續竝ニ收税官廳ノ組織、税率制定ノ方法等ハ屢々學者ノ採用スル所ナリ。今租税ノ性質ニ從テ之ヲ分類センカ其區分ハ純然タル學理上ノ區別ト爲ル。之ニ反シテ、租税ノ賦課徵收及納付ノ關係竝ニ收税官廳ノ組織、税率制定ノ方法ヲ以テ、其分類ノ標準トナサンカ其區分タル主トシテ實際上ノ種類ト爲ル。例ヘハ定率税配附税竝ニ直税間税ノ如シ。此等ノ區別ハ租税立法ノ上ニ現ハレ各國ニ於ケル租税制度ノ基礎ト爲ル。就中至大ノ關係ヲ有スルモノヲ直税及間税ノ區分トス。而シテ定率税及配付税ノ制度ハ國ニ依リテ或ハ之ヲ存シ或ハ之ヲ存セサルモノアルモ、間税直税ハ何レノ國ニ於テモ實際上之ヲ輕視スルコトヲ得ス。何トナレハ縱令明カニ其租税法ヲ以テ其制度ヲ認メサルモ尙隱然租税立法上ニ影響スルヲ以テナリ。

抑定率税トハ豫メ法律ヲ以テ税率及租税ノ客體ヲ定メ、而シテ各客體ニ賦課セラルル税額ヲ總計シテ以テ全國内ニ於ケル徵税額ヲ算定スル租税ヲ云フ。故ニ定率税ノ場合ニ於テ、先ツ定マルモノハ税率、租税ノ單位竝ニ客體ニシ

テ、全體ノ徵税額ハ其配合及計算ニ依リ始テ知ルコトヲ得ヘシ。配附税ハ之ニ反シ、法律ヲ以テ先ツ全體ノ徵税額ヲ定メ、次ニ租税ノ客體即チ課税ノ目的物ニ對シ其税額ヲ配付スルモノヲ謂フ。故ニ先ツ定マルモノハ税步又ハ税率ニアラスシテ徵收サルヘキ税額總計及其客體ナリ我國ニ於テハ、現今此種ノ租税ヲ缺ク唯地方税中ニハ其賦課徵收法ノ較々配附税ニ類スルモノアルヲ見ル。例ヘハ郡税、戶別割地租割等ノ如シ。何トナレハ、郡ノ經費ハ租税トシテ其管下ノ町村ニ配付セラレハナリ。府縣稅タル戶別割地租割ノ如キモ亦其形跡ニ就テ觀レハ配附税ナリ。何トナレハ府縣内ノ戶數及地租稅額ヲ標準トシテ之ニ割當ツレハナリ。然レトモ此等ハ純然タル配附税ニアラス。純然タル配附税ノ例ハ佛蘭士ノ地租ニ於テ之ヲ見ル。同國ニ在リテハ地租ノ稅額ヲ一定シ置キ而シテ中央政府ハ先ツ之ヲ縣ニ配付シ、縣ハ之ヲ郡ニ配付シ、郡ハ之ヲ町村ニ配付ス。故ニ中央政府ノ收納スル地租額ハ常ニ一定シ、縱令水損旱魃アルモ其收納額ハ減少セサルノ理ナリ。何トナレハ、設令一方ニ減スル所アルモ夫

直税及間税又ハ直接税及間接税
定率税及配附税

附、定率税及配附税 租税ノ分類、

丈ケ他方ニ多ク配付スレハナリ。加之、普魯西王國ノ營業稅ノ如キ其一部分ハ又此數ニ漏レス。即チ或ル種類ノ營業者ニ對シテハ一人宛ノ平均稅額ヲ定メ、之ヲ其營業者ノ數ニ乘シテ以テ之ヲ彼等全體ニ賦課シ、營業者ハ其協議ニ依リテ之ヲ各自ニ配付ス。故ニ佛蘭士ノ地租ニ比スレハ、其配付ノ方法ニ於テ緩ナル所アリ、政府ノ手ヲ以テ直接ニ之ヲ配付セスシテ納稅者自身ニ委セリ。從テ政府ニ於テハ時々ノ情況ニ應シテ其歲入ヲ減スル虞レナキト同時ニ、納稅者ニトリテハ豫メ其負擔額ニ關シ多少意ヲ安ニスルコトヲ得ヘキナリ。

經濟ノ進歩幼稚ニシテ、社會ノ事物整頓セサルヤ、定率稅ニ比シ寧ロ配付稅ヲ便トスルコトアリ。是レ其初ニ當リテヤ課稅ノ目的物ニ對シ精密ナル調査ヲ要セサルニ由ル。然ルニ稅制ノ整理セララルルニ及ンテヤ、定率稅ハ漸ク配付稅ト代リ行ハレントスル趨勢アルヲ見ル。

第二節 直稅及間稅又ハ直接稅間接稅ノ要用

然リ而シテ、租稅ノ分類上最モ重要ナルハ直稅及間稅ノ區分トス、或ハ之ヲ稱シテ直接稅間接稅ト云フ其意一ナリ、蓋シ直稅及間稅ノ區別ハ元佛蘭士ニ首マレリ、彼ノ政治家トシテ有名ナリシちゆるゴーノ時既ニ直稅及間稅ノ意味ハ果シテ從來慣行ノ例ニ從フヲ可トスルカ、將タ文字上ノ解釋ニ從フヲ可トスルカノ問題ヲ調査セシコトアリ、後千六百九十一年一月八日ノ法律ヲ以テ始テ直稅及間稅ノ定義ヲ下セリ。是レ法律上直稅間稅ノ説明ヲ企テタル嚆矢ナリトス。然ルニ近時ニ及ンテヤ直稅及間稅ノ別ハ各國租稅制度ノ基礎ヲ成スニ至リシモ、而モ法律上是レカ解釋ヲ下セルモノナシ。法律ハ其規定スル事項ニ對シテ解釋ヲ下スヨリハ、寧ロ其範圍内容ヲ定ムルヲ以テ立法ノ技術上巧妙ナル所以ナリトセリ。凡ソ直稅及間稅ノ別ノ如ク實際上重要ニシテ而モ理論上曖昧ナルモノハ稀ニシテ、今ヤ學理上ノ區別ト云フヨリハ、寧ロ純然タル實際上ノ區別ト爲リ了レリト云フヲ至當トス、而シテ其關係スル所ハ實ニ租稅制度ノ上ニ止マラスシテ、延テ政治行政上ニモ及ヘリ、例ヘハ議員ノ選

舉及被選舉權資格ノ如キ直接國稅ノ納額ニ因テ定マルカ如シ。現行制度ニ依レハ、我國ノ直接國稅ハ、地租、所得稅及營業稅ニシテ、直接府縣稅ハ、地租割、戶別割、家屋稅、營業稅、雜種稅、及國稅トシテノ營業稅ノ附加稅ナリ。又直接市町村稅ハ、直接稅及府縣稅ノ附加稅竝ニ反別割トス。或ハ國稅トシテノ直稅ハ、地租、所得稅及營業稅ニ止マラス。近年新タニ設定サレタル相續稅ノ如キモ亦直稅ノ一種タルカ如シ。現ニ法規ノ類纂等ニ於テ屢々此分類ニ從フモノアルヲ見ル。然レトモ之ヲ純學理ニ徵スルトキハ相續稅ノ如キハ直稅ト看做スヘキモノニアラス。故ニ我國ノ直接國稅ハ、地租、所得稅及營業稅ニ限ルヲ以テ正當ナリト信ス。又直接府縣稅ハ、其數遙ニ多キモ、要スルニ直接國稅ノ附加稅ト特別府縣稅トノ二種ニ外ナラスシテ、直接國稅タル地租、營業稅及所得稅ノ附加稅ト戸別割、家屋稅、雜種稅竝ニ府縣稅トシテノ營業稅ノアルアリ。府縣稅トシテノ營業稅ハ國稅トシテノ營業稅トハ全ク別物ニシテ、特ニ府縣ノ稅源トシテ國稅以外ニ留保セラルルモノトス。降テ市町村ニ至テハ、最早特別ノ稅源存セサ

ルヲ以テ多クハ附加稅ニ過キス。唯反別割ハ市町村稅トシテ特別ノ租稅タリ、併シ地租割若クハ反別割ノ如キハ其標準トスルモノハ同シク地租若クハ地租ノ根據タル地價ナルカ故ニ、其名ハ異ナレトモ其實ハ一ナリ。

第三節 國稅及附加稅

我國ノ經濟組織ハ比較的未タ簡易且幼稚ナルヲ免レス。從テ稅源ノ種類モ亦多カラス。故ニ中央政府竝ニ地方團體ハ各々特別ノ財政ヲ立ツルモ、其財源ニ至リテハ大差ナシ。即チ團體經濟ノ種類増加スルニ從ヒ人民ノ負擔モ同一ノ財源ニ對シテ幾重ノ負擔ヲ累スルコトナルナリ。此點タル財政上殊ニ租稅行政上最モ注意ヲ要スル所ナリ。況ンヤ中央政府竝ニ地方團體ノ負擔年ヲ逐ウテ増加スル今日ニ於テヤ、我國ニ於テモ將來租稅制度ノ改革ハ必スヤ如上ノ必要ニ餘儀ナクセラルルモノアラントス。左ニ我國ニ於ケル國稅及地方稅ノ重複スル所以ヲ圖解セン。

土地ニ對スル課税

一、地租(國稅)

宅地

田畑

其他ノ土地

北海道ニ於ケル宅地以外ノ土地

田畑

稅率

地價百分ノ二個半

地價百分ノ四個七

地價百分ノ五個半

地價百分ノ三個四

其他ノ土地百分ノ四個

二、地租附加税(地方税)

北海道府縣(沖繩縣ヲ除ク)

沖繩縣ノ區及町村

其ノ他ノ公共團體

田畑 地租百分ノ三十二
宅地 地租百分ノ十三
其他ノ土地 地租百分ノ二十七

沖繩縣
市町村
北海道ノ區、一級町村及二級町村
其他

三、段別割

地租附加税及段別割併課

四、營業稅(國稅)

十二類二十三種ノ營業ニ課ス

宅地 地租百分ノ九
田畑 地租百分ノ二十一
其他ノ土地地租百分ノ十八
一反歩ニ付毎地目平均四十錢

全額ニテ地租附加税ノ制限ニ至ル迄

以上ノ營業稅ハ二乃至四ノ課稅標準
ニ依リテ別々ノ稅率ヲ課セラル(明
治四十三年四月六日法律第四十五號)

五、營業稅附加税

北海道府縣

其他ノ公共團體

營業稅 百分ノ十一
營業稅 百分ノ十五

六、所得稅(國稅)

第一種甲 五千圓以下ノ金額

五千圓ヲ超ユル金額

一萬圓ヲ超ユル金額

一萬五千圓ヲ超ユル金額

二萬圓ヲ超ユル金額

三萬圓ヲ超ユル金額

五萬圓ヲ超ユル金額

七萬圓ヲ超ユル金額

十萬圓ヲ超ユル金額

二十萬圓ヲ超ユル金額

乙株式會社株式合資會社其他ノ法人

第二種公債社債ノ利子

千分ノ四十

千分ノ五十

千分ノ六十

千分ノ七十

千分ノ八十

千分ノ九十

千分ノ百

千分ノ百十

千分ノ百二十

千分ノ百三十

千分ノ六十二、五

千分ノ二十

第三種前二條ニ屬セサル所得

千圓以下ノ金額

千圓ヲ超ユル金額

二千圓ヲ超ユル金額

三千圓ヲ超ユル金額

五千圓ヲ超ユル金額

七千圓ヲ超ユル金額

一萬圓ヲ超ユル金額

一萬五千圓ヲ超ユル金額

二萬圓ヲ超ユル金額

三萬圓ヲ超ユル金額

五萬圓ヲ超ユル金額

七萬圓ヲ超ユル金額

十萬圓ヲ超ユル金額

千分ノ二十五

千分ノ三十五

千分ノ四十五

千分ノ五十五

千分ノ七十

千分ノ八十五

千分ノ百

千分ノ百二十

千分ノ百四十

千分ノ百六十

千分ノ百八十

千分ノ二百二十

直稅及間稅又ハ直接稅及間接稅 附、定率稅及配附稅 國稅及附加稅

七、所得稅附加稅(地方稅)

北海道府縣

其他ノ公共團體

第二種ノ所得ニ對スル所得稅ヲ除
キ所得稅百分ノ四
第二種ノ所得ニ對スル所得稅ヲ除
キ所得稅百分ノ十五

八、制限外ノ課稅

- 一、特別ノ必要アル場合ハ許可ヲ受ケ前記ノ制限ヲ超過シ其百分ノ十二以內ニ於テ課稅スルコトヲ得。
- 二、左ニ掲クル場合ニ限り特ニ許可ヲ受ケ前項ノ制限ヲ超過シテ課稅スルコトヲ得。
 - (一)内務大藏兩大臣ノ許可ヲ受ケテ起シタル負債ノ元利償還ノ爲費用ヲ要スルトキ。
 - (二)非常ノ災害ニ因リ復舊工事ノ爲費用ヲ要スルトキ。

内務大藏兩大臣ノ許可ヲ要スル場合

- (三)水利ノ爲費用ヲ要スルトキ。
- (四)傳染病豫防ノ爲費用ヲ要スルトキ。
- 三、前二項ニ依リ制限ヲ超過シテ課稅スルハ前記各稅目ニ對スル賦課カ各其制限ニ達シタルトキニ限ル但地租附加稅及段別割ヲ併課シタル場合ニ於テハ一地目ニ對スル賦課カ制限ニ達シタルトキハ附加稅カ制限ニ達シタルモノト看做ス其段別割ノミヲ賦課シタル場合ニ於テハ一地目ニ對スル賦課カ制限ニ達シタルトキ亦同シ。

許可ヲ要セサル場合

- 一、府縣費ノ全部ヲ市ニ分賦シタル場合ニ於テハ市稅制限ノ外其分賦金以內ニ限り府縣稅制限ニ達スル迄課稅スルコトヲ得。
- 二、府縣費ノ一部ヲ市町村ニ分賦シタル場合ニ於テハ市町村稅制限ノ外其分賦金以內ニ限り課稅スルコトヲ得但府縣ノ賦課額ト市町村ノ賦課額トノ全算額ハ府縣稅ノ制限ヲ超過スルコトヲ得。

第四節 直稅及間稅ノ意義

是レヨリ直稅及間稅ヲ說明セン。蓋シ初テ直稅及間稅ノ學理的說明ヲ企テシハ所謂重農學者ナリ、佛蘭士ニテ之ヲ「ふじをくら」ト云ヒ、羅典語ノ「天然」ト「支配スル」ト云フ二字ヨリ成リ、固ト天然自然ノ勢力カ世上ヲ支配スルコトヲ意味ス、我國ニテ之ヲ重農學派ト云フハ此學派カ特ニ農業ニ重キヲ説クニ因リ其說ノ一端ヲ捉ヘテ以テ之ニ名ツケシノミ、其說ニ曰ク、租稅ハ唯地租ニ限ルヘキモノナリ、何トナレハ元來生産的ナルハ土地又ハ農業ノミニシテ其他ノ職業ハ皆不生産的ナリ、而シテ不生産的ノ財源ニ課稅スルモ、永ク之ニ堪フルコト能ハスシテ其負擔ハ早晚生産的ナル農業又ハ土地ニ歸宗スルノ外ナケレハナリ、而シテ何故ニ農業ノミカ生産的ニシテ工業又ハ商業ハ不生産的ナリヤト云フニ、是レソ此學派ノ體系ノ存スル所ナル、曰ク、商業又ハ工業ハ之ニ從事スル者カ衣食ノ料ヲ取ル手段タルニ止マル、換言スレハ商工業者ノ之

ニ賴テ得ル所ノモノハ、僅ニ其從事セル間ニ要スル所ノ諸般ノ入費ニ充ツルニ足ルノミ、是レニ反シテ、農業ハ縱令一粒ノ種料ト雖モ尙之ヨリ數十百倍ノ結果ヲ生スルコトヲ得ヘシ、是レ後者ハ生産的ナルモ、前者ハ不生産的ナル所以ナリト。

何故ニ農業ヲ以テ生産的トナシ、之ニ反シテ商工業ヲ以テ不生産的ト爲セルカ、以上ノ説明ノミヲ以テシテハ未タ明瞭ナラサル處ナリ、蓋シ重農學者ハ生産ヲハ唯物質的若クハ有形的ノ意義ニノミ解釋シ、而シテ價格ヲ増加スルノ點ニ考ヘ及ハス、馬耳東風殆ト相關セサリキ、凡ソ貨物ノ價格ヲ増加スルモノ何ソ必スシモ農業ニ限ラン、商工業カ貨物ノ價格ヲ増スコトハ農業ニ劣ラス否間々農業ニ優ルコトナキニアラス、然ルニ彼等ハ茲ニ注意セス、唯々有形的ノ生産ノミニ着目シタルノ結果、如上ノ結論ニ到達セルノミ、商工業カ不生産的ニシテ農業獨リ生産的ナリトハ到底現今ノ吾人ノ思想ヲ以テシテハ了解シ能サル所ナリ、念フニ吾人ノ經濟活動ハ貨物ノ價格ヲ増加スルヲ以テ主

要目的トス、是レ商工業カ農業ニ比シテ却テ重要ナル關係ヲ有スル所以ニシテ、畢竟此說ノ謬レルヤ言ヲ俟タサルナリ、但之ヲ歴史ニ徵スルニ、國ノ内外ヲ問ハス古來同一思想カ政治上ニ行ハレタル例尠カラス。

若シ夫レ以上ノ生産說ヲ以テ租稅上ニ引用センカ、地租ハ唯一ノ直稅ナリ、而シテ地租以外ノ租稅ハ皆間稅トナルハ論理上自然ノ結果ナリ、土地ニシテ唯一ノ生産的財源ナリトセハ其之ニ賦課セララル租稅ハ、新タニ生産セララル富ニ課スルコトトナリ、土地所有者ハ此富ヲ以テ地租ヲ納付且負擔スルカ故ニ、其租稅タルヤ直稅ナラサルヲ得ス、何トナレハ即チ納稅者ハ自ラ之ヲ支拂フト同時ニ亦何人ノ手ヲ經スシテ自ラ之ヲ負擔スレハナリ、之ニ反シ、商工業ヲ以テ不生産的ト看做サンカ、其之ニ課スル租稅ヲ負擔シ得ルノ理ナシ、去レハ商工業者ニ課スル租稅ハ、到底轉々シテ晚カレ早カレ之ヲ負擔シ得ル生産的財源ニ歸スルノ外ナカラシテ、從テ此等ノ租稅タルヤ、悉ク間接稅トナルノ理ナリ、惟フニ此說タルヤ、重農學派ノ學ノ體系上自然ノ結論タリ、其源已ニ濁

ル、其末ノ清カラシコトヲ欲スルモ得ヘカラサルナリ。

第五節 直稅及間稅

然リ而シテ當ニ學理上ノミナラス、實際上沿ク行ハレタル解釋ハ、租稅カ納稅者ニ及ホス負擔ノ關係ニ基ク說ナリトス、此說ニ從フトキハ、直接稅トハ之ヲ負擔スル者ニ依テ直接ニ納付セラルヘキ租稅ナルニ反シ、間接稅トハ、政府ト負擔者トノ間ニ介在セル中間者即チ納稅者ノ手ヲ經テ納付セラルル租稅ノ謂ナリ、換言スレハ、間稅ニ在リテハ納稅者、負擔者其人ヲ異ニスルモ、直稅ハ同一ノ人ヲ以テ此兩者ヲ兼ヌルモノナリ、故ニ間稅ニ在リテ納稅者ノ之ヲ納付スルハ、唯タ一時ノ間負擔者ノ爲ニ彼等ノ負擔スヘキ租稅ヲ立替フルニ過キスト爲スモノナリ、顧フニ間稅ト直稅トノ意義ハ從來此解釋ニ從フ例多キモ、尙其根柢ト爲レル思想ハ要スルニ重農學派ノ學說ニシテ、以上ノ說ハ唯之ヲ擴張セシニ過キス。

更ニ之ヲ詳説センカ、税源ノ何タルヲ問ハス、又負擔シ得ヘキモノナルヤ否ヤヲ問ハス、納税者ノ一度之ヲ納付スルヤ其納税者ハ即チ終局ノ負擔者トナル場合ハ是レ則チ直接税ナリ、之ニ反シ、納税者ハ設令一旦納税スル所アルモソレテ終局ノ負擔者トナラスシテ、他日機會アルニ際シ、其嘗テ納付セル租税ヲ轉シ、負擔者ヲシテ實際上ノ負擔ヲ爲サシムル場合ハ則チ間接税ナリ、故ニ間接税ノ場合ニ於テハ納税者ハ唯タ納税ノ手續ヲ執リ了ルノミニシテ一時負擔者ノ爲ニ租税ノ立替ヘヲ爲スニ過キス、然ルニ重農學派ノ學說ハ、更ニ進ンテ直チニ生産的、不生産的ナル觀念ヲ以テ直間税說ノ標準トナスニ至ル、何ソ夫レ甚シキヤ、其結果生産的事業ニ課スル租税ハ直税ナルニ反シテ不生産的の事業ニ課スルモノハ間接トナラン、何トナレハ、不生産的の事業ハ到底終局マテ之ヲ負擔シ得ルノ理ナケレハナリ、今此兩說ヲ參照スルニ兎ニ角其說ニ深淺廣狹ノ差コソアレ、其一度課セラレタル租税ハ常ニ納税者ノ負擔ニ歸シテ其處ニ止マラス、時トシテハ轉シテ他人ニ移リ行クモノナリトノ思想ハ、兩者

ニ共通シテ學說ノ根柢ヲ爲セリ、然リ而シテ、其納税者ノ一旦納付シタル租税カ他日他人ニ移リ行クノ經過ヲ稱シテ租税ノ轉嫁ト云フ、

既ニ述ヘタリシ如ク以上ノ解釋ハ最モ廣ク行ハレ、各國ノ立法上之ニ準據セル例尠カラス、然レトモ、複雑ナル現今ノ經濟界ニ於テハ、之ヲ適用スルコト能ハサル場合多シ、是レヲ以テ數十年來直税及間税ノ區別ヲ排斥シテ之ニ換フルニ他ノ分類ヲ以テセントスル者ナキニシモアラスト雖モ、因襲ノ久シキ、容易ニ之ヲ改ムルコト能ハサルナリ、故ニ徒ニ其名ノミヲ存シテ、其實ヲ變ヘシ例亦尠カラス、今之ヲ論スルニ先チ、此學說ノ當否ヲ批評スヘシ、可ナランヤ、

第六節 直税及間税說ノ長所

其之ヲ採用スヘキ重ナル理由ハ左ノ如シ。

(い) 負擔ノ關係ニ基キ直税及間税ノ意義ヲ定ムルトキハ名實ニツナカラ相適フコトヲ得ヘシ、何トナレハ、直接ニ負擔スルハ直税ニシテ間接ニ負擔ス

ルハ間税ナレハナリ。

(ろ) 直税及間税ノ觀念ヲ構成スル一條件タル、彼ノ中間者(納税者)ニ由リテ納付セラルルトセラレサルトノ事實ハ、納税上課税上重大ノ關係ヲ有シ、殊ニ納税ノ難易負擔ノ輕重ニ關シテ重大ノ關係アリ、之ヲ從來ノ經驗ニ徴スルニ間税ハ其負擔ノ容易ナルニ反シテ、直税ハ比較的困難ナリ、例へハ我國ノ酒税ノ如キハ、明治ノ初年以來頻リニ其税率ヲ加重セシニ拘ハラヌ。國民ノ之ニ反對スルコトハ地租ノ如ク甚シカラサルナリ。

明治十三年九月布告第四十號ヲ以テ從來ノ酒類税則ヲ廢止シテ、新ニ酒造税則ヲ制定シ、酒類免許税及酒造造石税ヲ併セ行ヒ、前者ハ酒造場一箇所ニ付金三十圓、後者ハ第一類酒一石ニ付二圓、第二類酒ニハ同シク三圓、第三類酒ニハ同シク四圓ヲ課セリ。後同十五年十二月布告第六十一號ヲ以テ其税率ヲ增加シ、各四圓五圓六圓ニ改ム。明治二十七八年戰役後財政ノ必要ニ依リ歲入ノ増加ヲ謀ランカ爲、同二十九年法律第二十八號ヲ以テ酒造税法ヲ改正シ從來

ノ酒造免許税ヲ廢シテ一般ノ營業税法ニ依ラシメ、從來一石四圓ノ割合ナリシ濁酒税ヲ六圓、同シク一石四圓ノ割合ナリシ清酒、及一石六圓ノ割合ナリシ白酒味醂ヲ七圓、一石五圓ノ割合ナリシ燒酎酒精ヲ八圓ニ増加セリ。超エテ二年三十一年十二月法律第二十三號ヲ以テ第一種(清酒濁酒)一石ノ造石税ヲ金十二圓、第二種燒酎酒精ノソレヲ金十三圓ニ改メタリ。更ニ明治三十四年三月法律第七號ヲ以テ復酒造税法ヲ改正シ、課税標準及税率ヲ變更シ一石ニ付凡ソ三圓ヲ増率セシカハ、清酒ハ大概一石十五圓ノ造石税ヲ負フニ至レリ。次テ明治三十八年一月及四十一年三月(法律第十八號)ノ改正ヲ經テ、清酒ノ造石税ハ壹石貳拾圓ノ高率ニ達シ、今ヤ生産費ヨリハ寧ロ租税ノ負擔多シ、而シテ其増加ノ都度多少酒造家ノ反對アリシモ、一般國民ハ却テ之ニ對シテ黙々タリキ。是レ之ヲ負擔スルコトノ困難ナラサルノ證ニアラスヤ、之ニ反シテ地租ノ如キハ、地租改正ノ際ハ其率ハ地價ノ百分ノ三ニシテ其後、百分ノ二、五トナリ、日清戰役後五年ヲ限リテ百分ノ三、三ニ増加セシカ、當時國民ノ之ニ反對スル

者多クシテ、政府ハ非常ナル盡力ノ結果漸ク僅ニ千分ノ八ノ増徴ヲ以テ満足セサルヲ得サリキ。此等ノ事實タルヤ、單リ我國ノミナラス、外國ニ於テモ亦然リ。彼ノ英吉利ノ如キハ、千六百年代ノ末ニ定メタル地租法カ今尙大體ニ於テ行ハルルカ如キハ、其一明證ナリ。

數百年來歐羅巴諸國ニ於ケル租稅立法ノ趨勢ヲ察スルニ、間接稅ハ急激ナル趨歩ヲ以テ増加セシニ反シ、直接稅ノ増加ハ却テ遲々タリキ。唯タ漸ク千八百年代ノ中頃以後云ハハ、七十年代ヨリ其増加ヲ見ルニ至レリ。然ラハ何故ニ間稅ハ事實上直稅ニ比シ却テ歡迎セラルルカト云フニ、其之ヲ負擔スルコト容易ナル所アレハナリ。我國ノ地租ハ古來唯一ノ重ナル租稅ナリシモ、今ヤ酒稅ノ方却テ收入多シ。而シテ其多キ酒造稅ニ却テ反對ノ少キハ奇ナラスヤ。

若シ夫レ負擔ノ輕重難易ハ、租稅ニトリテ重大ノ關係ヲ有スルモノトセハ、之ニ依リテ以テ租稅ノ區別ヲ爲ス何ソ必スシモ不可ナルコトアランヤ。要スルニ擔稅上直稅ハ重ク間稅ハ輕シ。之ヲ基礎トシテ租稅ノ區別ヲ爲スハ至當

ナラスヤ。世上或ハ此直稅及間稅ノ分類ニ換フルニ從率稅及臺帳稅ノ別ヲ以テセントスル者アルモ、其實臺帳稅ハ直稅ニシテ從率稅ハ間稅ナリ。其實既ニ同シケレハ、強テ其名ヲ改ムルノ必要果シテ何處ニカアルトハ、是レ論者ノ主張スル所ナリ。

第七節 直間稅說ノ缺點

之ニ反シテ、直稅及間稅ノ區別ヲ否トスル理由ハ左ノ如シ。

(い) 多クノ租稅ニ在リテハ、其負擔ハ果シテ轉嫁セラルルモノナルヤ、將タ轉嫁セラレサルモノナルヤ、當ニ立法上ノミナラス、理論上明カナラサル場合尠カラス。蓋シ立法者ハ租稅ヲ制定スルニ際シ、豫メ其轉嫁スヘキモノタルト轉嫁スヘカラサルモノタルトノ判識ヲ下シ、依リテ以テ間稅及直稅ノ別ヲ設クルナランモ、其實際ニ於テハ、彼等ノ豫期ニ反スルコト多シ。例ヘハ營業稅ノ如キ、擔稅者ハ常ニ果シテ納稅者ヲ兼スルモノナリヤ、否ヤ、又小作地ノ地租ハ

其所有者カ納税者及擔税者ヲ兼ヌルモノナリヤ、否ヤ、時ト場合トニ由リ、二者共ニ容易ニ判斷シ難キカ如シ。況ンヤ、取引所税ノ如キ其賦課徴收ノ方法ヲ定ムルニ當リテ、豫メ何人カ納税者タリ、又何人カ擔税者タラサルヘカラサルカヲ定ムル一定ノ理由若クハ標準ナキニ於テヲヤ、抑取引所税ヲ納ムル者ハ必ス株式ヲ賣ル人タルヘシトカ、或ハ買フ人タルヘシトカ、常ニ定マリタル理由ナシ、又擔税者ニ付テモ同様ニシテ、株式ヲ賣ル者カ擔税者タルモ、乃至買フ者カ擔税者タルモ何レニテモ可ナリ。何トナレハ株式ノ取引ニ付テハ賣者カ利益ヲ收ムヘキカ、買者カ利益ヲ收ムヘキカハ一概ニ斷定スヘカラサレハナリ。畢竟取引所税ノ如キハ、株式等ノ賣買者ノ内其何レニ課スヘキカ、之ヲ定ムルニ確タル標準ヲ見出スコト容易ナラス、去レハ立法者ノ意ハ果シテ其轉嫁ヲ期スルニ在ルカ、又ハ之ヲ期セサルニ在ルカ、是レ亦容易ニ斷定スルコト能ハサルナリ、又地租ニ付テハ從來何人モ其直税タルヲ疑フ者ナカルヘシ、然ルニ日清戰役後我邦ニ於テ地租増徴ノ事アルヤ、新タニ増徴スル地租ハ地主ノ負

擔トナラスシテ小作人ノ負擔ト爲ルヲ主張セシモノアリキ、其說ニ曰ク、地租増加スレハ、夫レタケ地主ハ小作料ヲ引上クヘシト、此事タルヤ、理論上有リ得ヘカラサルカ如キモ、實際場合ニ由リテハ斯ノ如キ結果ヲ生セリ、而シテ其實例ハ殊ニ宅地租ニ於テ之ヲ見ル。蓋シ宅地租ニシテ上ランカ其地主ハ家賃又ハ宅地賃貸價格ヲ引キ上クルニ躊躇スルコトナシ、故ニ地租ノ一種タル宅地租ハ其所有者ヨリ賃借者ニ轉嫁セラレルコトト爲ルヘシ、畢竟斯ノ如キ所以ハ他ナシ宅地ノ賃貸ハ主トシテ市街地ニ行ハレ而シテ市街地ノ土地所有者ハ固ト商人ニシテ常ニ錙銖ノ利ヲ爭フ習慣アルヲ以テ動モスレハ地代ヲ引キ上ケントスルニ反シ農業地ハ田舎ニ在リ多クハ農業者ノ所有ニ關ハリ彼等ハ商人ノ如ク算盤ニ敏カラサルヲ以テ設令地租ノ増徴アルモ晏然トシテ自ラ之ヲ負擔シ肯ヘテ之ヲ小作人ニ轉嫁セント欲スル者少シサレハ宅地租ノ轉嫁シ易ク農業地ノ地租ノ轉嫁シ難キハ唯如上ノ心理的作用ニ基因スルニ外ナラスシテ別ニ他故アルニアラサルナリ、之ヲ要スルニ、直税間税ハ租税

制定ノ際立法者カ其轉嫁セラルヘキト然ラサルトニ由テ之ヲ區別スルニ關セス、實際ニ於テハ前述ノ如ク其區別頗ル曖昧タルヲ免レス。

(ろ) 是レヲ以テ、負擔ノ歸着點ニ付テ直税間税ノ別ヲ存スルハ、元ト租税ノ固有ノ性質ニ基クニアラスシテ一時ノ出來事ニ依ルト言フモ、不可ナルナシ。故ニ租税中時トシテハ直税トナリ、時トシテハ間税トナリ、又時トシテハ半ハ直税ニシテ半ハ間税タルモノアリ、畢竟其轉嫁ノ有無及程度ニ依リテ變化スルヲ免レス。例ヘハ酒造税ノ如キ、若シ増税後酒價ニシテ其増徴セラレタル税額タケ騰貴センカ、酒造家ハ其一度納付セシ税金ヲ回收スルコトヲ得ヘシ、之ニ反シテ酒價ニシテ依然舊ノ如クナランカ、其納付セル租税ハ自ラ之ヲ負擔セサルヲ得ス。又新タニ賦課セラレ若クハ増徴セラレタル租税ノ半額タケ酒價ニシテ騰貴シタリトセンカ、其租税ノ半ハ納税者自ラ之ヲ負擔シ半ハ消費者又ハ購買者ニ轉嫁スルコトヲ得ヘシ。現ニ明治三十四年十月酒造税ノ増シテ一石十五圓ト爲ルヤ、當時酒價ノ經過ハ酒造家ノ思惑ニ相違シ、攝州池田伊

丹地方ノ酒造家ハ一石ニ付キ二圓三十錢程ノ負擔ヲ爲ササルヲ得サリシト云フ此等ノ場合ヲ通觀スルニ第一ノ場合ハ間税、第二ノ場合ハ直税、第三ノ場合ハ半ハ間税ニシテ半ハ直税ナリ、斯ノ如ク變動常ナキ一時ノ出來事ヲ以テ租税ノ分類ヲ爲スハ殆ト不可能ノ事ニ屬ス、換言スレハ一租税ハ其必ス直税タリ間税タルコトヲ斷定シ難ク、畢竟スルニ課税物件ノ價格ノ高低ニ因テ或ハ直税トナリ或ハ間税トナルヘシ。

(は) 凡ソ直税ハ擔税者ニヨリテ納付セラレ、間税ハ納税者ニ依リテ納付セラルルトノ事實ハ、必スシモ其特徴ニアラス。蓋シ所得税ノ直税ナルコトハ何人モ之ヲ疑ハサル所ナリ、然ルニ英國ノ所得税及我國ノ所得税ノ一部分第一種殊ニ第二種ノ所得ハ擔税者ニ依リテ納付セラレス、納税者ニ依テ納付セララルヲ見ル、是レニ由テ觀レハ、本邦及英國ノ所得税ハ、擔税者及納税者其人ヲ異ニスルヲ以テ勢ヒ間接税ト謂ハサルヲ得サルヘシ。例ヘハ我國ノ第二種ノ所得ニ就テ見ルニ、公債證書等ノ所有者ハ之ニ對シテ所得税ヲ課セラルルモ、

其租税ハ自ラ之ヲ納メス。日本銀行ハ其利子ヲ拂ヒ渡ストキ、其所得税タケ引去リ而シテ實際上日本銀行ハ彼等ノ所得ニ課セル所得ノ納税者タル地位ニ立モノトス。此場合ニ於テハ所得税ハ自ラ間税ナリトノ結論ヲ生スヘシ。是レ實ニ明白ナル誤謬ナリ、故ニ納税者及擔税者其人ヲ同ウスルヲ直税トシ之ヲ異ニスルヲ間税トストノ説ハ兩者ノ區別ヲ説明シ得タリト云フヘカラス。

(二) 直税及間税ノ別ハ以テ負擔ノ輕重ヲ分ツ所以ナリトハ、論者ノ説ナルモ其實負擔ノ輕重ハ、直税又ハ間税タルカ爲ニアラスシテ他ニ存スルヲ見ル。抑間税ハ直税ト異ナリ、擔税者ハ己レノ便宜ト認ムル時期及税額ヲ擇ヒ、以テ隨意ニ負擔スルヲ得ルモノナリ。例ヘハ酒税ノ擔税者ハ飲酒ヲ欲スル時又ハ之ヲ購買スル資金アル時ニ之ヲ負擔スルノミナラス、自ラ其負擔額ヲ撰定スルノ自由ヲ有ス。且ヤ其之ヲ負擔スルトセサルトハ、一ニ擔税者ノ考ニ依テ定マルコト多シ。是レ租税ニ付テ頗ル注目スヘキ點ニシテ、同一ノ租税ニ在リテモ、其自己ニ都合好キ時ニ負擔スルト、都合ノ惡キ時ニ負擔スルトハ、苦痛ノ大

小深淺ハ同日ノ談ニアラス。彼ノ酒税ノ如キハ、前述ノ如ク擔税者ノ自由意思ニ依リテ負擔スルカ故ニ彼等ニ取テ頗ル便利ナリ。是レヲ以テ、縱令其負擔ハ重クトモ之ヲ感スルノ念ハ薄カルヘシ、サレハ間税ノ反對少キハ其之ヲ間接ニ負擔スルカ爲ニ非スシテ、自ラ擔税者カ擔税額及擔税ノ時期ヲ決定スルノ自由アルニ依ル、之ニ反シ、直税ヲ重シト云フハ、納税者又ハ擔税者ノ之ヲ欲スルト欲セサルトヲ問ハス、法律ノ定ムル所ニ依テ一概ニ負擔セサルヘカラサルニ依ルヤ明カナリ。夫レ地租ハ一年六期ヲ畫シ、必ス法律ノ定メタル時期ニ猶豫ナク其負擔スヘキ税額ヲ納付セサルヘカラス。而シテ縱令不作ニシテ租税ニ充ツヘキ收穫ナキモ、尙其納税期ニ於テ通常之ヲ延納スルコトヲ許ササルナリ、以テ見ルヘシ、負擔ノ輕重ハ必スシモ直接ニ負擔スルト間接ニ負擔スルトニ依ルニ非スシテ他ニ存スルコトヲ。

以上説ク所ニ依リテ從來ノ直税及間税説ノ長短ヲ比較スルニ其缺ハ寧ロ長所ニ比シテ多キカ如シ。マシテヤ、實際上從來ノ解釋ニ從フコト能ハサル場

合ヲ生スルヲ以テ、各國ノ租稅制度上唯其名ヲ存シテ其實ヲ變シタル例尠カラス。夫ノ相續稅ノ如キ、若シ負擔ノ歸着點ニ付テ之ヲ論スレハ直稅タルコト論ナキモ、尙之ヲ以テ直接國稅ト看做ササルヲ見レハ、既ニ名實相合ハサルコトヲ知ルニ足ラン。若シ相續稅ヲシテ直接國稅タラサラシメントセハ、從來ノ解釋ニ從フコト能ハサルナリ。果シテ然ラハ、如何ナル說明ニ由テ之ヲ解釋スルヲ得ヘキカ、是レ予輩ノ將ニ說明セントスル所ナリ。

第八節 臺帳稅及從率稅說

念フニ相續稅ハ相續ノ開始ト共ニ相續者カ納付シ、負擔スルハ當然ノコトニシテ、相續者ハ納稅者ニシテ又兼テ擔稅者タリ、決シテ被相續者カ擔稅者ニシテ相續者カ納稅者ナリト云フコトヲ得ス。然ルニ諸國ノ租稅制度上ハ相續稅ヲ以テ直稅ト看做サスシテ多クハ間稅トスルカ故ニ以上ノ解釋ニ從フトキハ自ラ納稅者ト擔稅者トヲ分タサルヘカラサルコトトナルヘシ。然ルニ論

理上之ヲ分ツノ困難ナルハ前述ノ如シ。是レ則チ從來ノ解釋カ最早租稅制度上其意味ヲ失ヘル確證ニアラスシテ何ソヤ、然ラハ如何ニシテ之ヲ解釋スヘキカト云フニ、予輩ハ直稅及間稅ニ代フルニ臺帳稅及從率稅ノ區別ヲ以テセントス。各國ノ租稅制度上ニ於ケル直稅及間稅ハ多ク此意味ニ從フヲ見ル、此解釋タルヤ、佛蘭士ヲ以テ其始トシ他ノ諸國モ亦漸次之ニ倣ヘル例少カラス。唯名稱ノミハ從前ノ儘ヲ襲用セルノミ。

抑臺帳稅トハ所謂資産稅又ハ財産稅、地租、營業稅、所得稅、資本利子稅、家屋稅等ヲ含ム而シテ資産タリ、所得タリ、將タ收益タルトヲ問ハス、苟クモ其稅源又ハ租稅ノ客體トナルモノハ常ニ永續的性質又ハ關係ヲ帶フルモノトス。例ヘハ土地家屋等ハ管ニ一收稅期間又ハ租稅ノ賦課徵收セララル場合ニ存在シ若クハ現出スルニ止マラスシテ、數年又ハ數十年ノ久シキニ亘リテ存續スルモノナリ。是レヲ以テ租稅ノ主體客體ハ言フ迄モナク、苟クモ課稅ノ標準及條件ト爲ルヘキ事實ヲ調査シ且之ヲ確メ得ルヲ以テ、豫メ納稅者、納稅期及稅額

ヲ定ムルコトヲ得、而シテ一度之ヲ定メタル以上ハ、永ク之ヲ基礎トシテ以テ賦課徴收スルコトヲ得ヘシ、是レ則チ臺帳税ノ特色ニシテ、此等ノ事實ハ豫メ租税臺帳ニ登録シ置クヲ便トスルカ故ニ其等ノ租税ハ云ハハ臺帳ヲ基礎トシテ收納スルニ利アリ、臺帳税ノ名稱ハ茲ニ胚胎ス。既ニ一度ヒ臺帳ヲ調製セル以上ハ之ヲ基トシテ徵稅令書ヲ發スレハ則チ直チニ收納スルコトヲ得ヘシ。故ニ徵稅ノ手續モ亦甚タ簡便ニシテ屢々客體ヲ調査スルノ要ナク、又納稅者或ハ擔稅者モ隱匿スルノ機會ナシ、是レヲ以テ臺帳税ノ賦課徴收ハ單リ我國ノミナラス各國共ハ地方自治團體ニ委任スルヲ常トス。尤モ租税ニ依リテハ往々例外アレトモ原則トシテハ之ヲ地方自治體ニ委任セリ。元來地方自治團體ノ吏員ハ特ニ租税ニ關スル智識ト經驗ナキハ勿論ナレトモ臺帳税ハ臺帳ヲ基礎トスルモノナルカ故ニ手續上別段ニ煩雜ナル手數ヲ要セス、從テ彼等ヲシテ徵稅事務ヲ取扱ハシムルモ何等ノ不都合ヲ見ス、以テ知ルヘシ直稅及間稅ノ區別ハ自ラ徵稅及課稅ノ方法ニマテ影響ヲ及ホスコトヲ、詳言スレ

ハ臺帳税所謂直稅ハ其賦課徴收ニ關スル特別ノ經驗アル收稅官吏ヲ要セス、又特別ノ收稅機關ヲ要セサルナリ。

從率稅トハ之ニ反シテ經濟上一時ノ出來事例ヘハ生産、賣買、輸出入、消費、相續株券、債券ノ發行ト云ヘルカ如キ事實ヲ捉ヘテ、以テ課稅ノ目的物ニ供スル租稅ヲ云フ。故ニ其客體ハ臺帳税ノ如ク永ク存續セスシテ、其事終レハ再ヒ見ルコト能ハサル事實多シ。從テ豫メ納稅者又ハ租稅ノ主體ヲ定ムルコト能ハサルノミナラス、課稅ノ標準トスヘキ事件ノ範圍又ハ現出ノ時期等ニ至テハ始ト豫知スルコト能ハサルナリ。例ヘハ關稅ノ如キ當局者ハ、何人カ何時如何ナル種類ノ貨物ヲ幾許輸出又ハ輸入スヘキカヲ豫測スルコト能ハス從テ豫メ關稅ノ納稅者、稅額及納期ヲ定ムルコト能ハサルナリ、故ニ從率稅ニ在リテハ當局者ハ常ニ生産、輸出入、賣買、相續等ノ如キ事件ノ起ルヤ否ヤニ注意シ、而シテ其一度現出スルヤ直チニ漏ス所ナク之ヲ捉ヘテ以テ課稅ノ目的物ニ供スヘシ、サレハ此等ノ租稅ニ在リテ豫メ規定シ得ヘキハ唯リ稅率ノミ、主體、客

體納稅期、稅額等ニ至リテハ、課稅ノ目的物タル如上ノ事件ノ發生シタル後始テ之ヲ確メ得ルノミ。關稅ノ如キハ即チ其一適例ニシテ、政府ハ豫メ關稅定率表ヲ定メ置キ、輸出入ト云ヘル出來事ノ起ルヤ、直チニ之ヲ適用ス。是レ則チ從率稅ノ稱アル所以ナリ。是レヲ以テ從率稅ハ其性質上特別ノ經驗又ハ素養アル收稅官吏ヲ要シ、從テ特別ノ收稅機關ヲ必要トス、何トナレハ豫メ其主體客體ハ勿論稅額及納期ノ定マラサルヲ以テナリ、現ニ關稅ノ賦課徵收ニ關シテハ警察權ヲ帶ヘル稅關吏ヲ任スルニ徵シテ明カナリ、故ニ彼等ハ常ニ注意シテ將ニ來ルヘキ出來事ヲ監視セラルヘカラス。斯ノ如ク時々ノ出來事ヲ捉ヘテ課稅スルハ是レ從率稅ノ特色ニシテ、誠ニ同稅ノ神髓ト云フヘシ、是レヲ以テ相續稅ノ如キハ、前述セル通常ノ解釋ニ從ヘハ直稅ナリト云フノ外ナキモ、以上ノ解釋ニ從ヘハ相續稅ハ明カニ從率稅又ハ間稅ニシテ、恰モ各國ノ現行租稅制度ノ規定ト符合スルヲ見ルナリ。

第十七章 租稅ノ大原則

第一節 所謂租稅ノ四大原則ノ由來

凡ソ租稅制度ヲ制定セントセハ、必スヤ各種ノ租稅ニ付テ採擇鹽梅スル所ナカルヘカラス、然レトモ其選擇ハ偶然不用意ニ出ツルモノニアラス、又立法者一時ノ出來心ニ依ルモノニアラス、一定ノ主義方針ノ之カ範疇ヲナスアルハ言フヲ俟タス。若シモ偶然ノ出來事ナルトセハ學者政治家ニシテ誰カ之カ爲ニ苦心スル者アラシヤ、是レヲ以テ、從來租稅ヲ批判選擇スル標準トシテ、所謂租稅ノ大原則ヲ説ク者アリ。顧フニ租稅ノ大原則タルヤあだむ、すみすノ一度之ヲ唱道セシ以來大ニ學者政治家ノ注意ヲ惹キ起シタルノミナラス十九世紀ノ前半ニ於テハ其各國ノ立法上ニ及ホシタル影響尠カラサルナリ。

○あだむ、すみすノ所謂租稅ノ四大原則トハ左ノ如シ、

第一 「租稅平等」ノ原則 [The canon of equality.]

租稅ノ大原則 所謂租稅ノ四大原則ノ由來

第二「租稅確實ノ原則」" " " certainty.

第三「納稅上便利ノ原則」" " " convenience.

第四「最少徵稅費ノ原則」" " " the least expence.

ノ謂ナリ。

先ツ平等ノ原則ニ依ルニ、租稅ハ國民カ其保護ヲ受クル財產及所得ニ比例シテ平等ナラサルヘカラス、第二確實ノ原則ニ依ルニ、租稅ハ納稅者ニ取リテ確實ナルヲ要ス。故ニ屢變更スルカ如キ租稅ハ不可ナリ。第三便利ノ原則ニ依レハ、租稅ハ納稅者ニ取リテ其納付上便利ナルヲ要ス。縱令同一種同額ノ租稅ト雖モ、收納ノ時期方法等ニ由リテ大ニ其輕重ノ差ヲ生スルモノナリ。第四最少經費ノ原則ニ從ヘハ、租稅ハ其徵收費ノ最モ少ナキヲ要ス。若シ徵稅ノ方法煩瑣ナルカ、將タ其人心ニ逆フコト著シケレハ、其得ル所ハ却テ費ス所ヲ償フコト能ハサルヘシ、以上ハ是レ所謂四大原則ノ要領ナリ。

此あだむ、すみすノ四大原則タルヤ、一時ハ金科玉條トシテ學者及政治家ノ

遵奉スル所ト爲リ、更ニ之ヲ批難スルノ聲ヲ聞カサリキ。然ルニ十九世紀ノ中頃ヨリシテ、學者中之ニ向ツテ往々疑ヲ挿ム者ヲ生スルニ至レリ。何トナレハ、以上ノ四大原則ニシテ果シテ**充實**ニ解釋セラレ其儘ニ實行セラルルトキハ、實際上大ナル不便ヲ生スルヲ以テナリ、**うをーかー**言ヘルアリ、曰ク、あだむ、すみすノ四大原則タル若シ文字通りニ解釋センカ、其一ツタモ殆ト實行スルコト能ハサルナリト、去レハ其聲ノ大ナルニ似ス、實際ニ於ケル影響ハ却テ少カリシカ如シ之ヲ事實ニ徵シテ其眞價ヲ批評スルハ左迄無用ノ業ニアラサルヘシ。今左ニ其概要ヲ述ヘン哉。

第二節 第一ノ原則ノ批評

あだむ、すみす曰ク、租稅ハ平等ナラサルヘカラスト、此原則タルヤ、一見洵ニ非難スヘキ點ナキニ似タリ。然レトモ一步ヲ進メテ氏ノ説明スル所ニ依テ考フルトキハ直チニ其不都合ナルヲ發見スヘシ。氏ノ意蓋シ租稅ノ平等トハ各

人總テ同一金額ヲ納付スルノ謂ニアラス、斯ノ如キハ却テ不公平ニ陥ラン、故ニ左ハナクシテ、納稅者カ政府ニ對シテ納付スルモノハ、須ラク其財產及所得^{其地カニ在リテ}ト^ハ比例ネヘシト云フニ在リ、勿論租稅ハ無標準ニ賦課徵收スルコト能ハス、其標準トシテ納稅者ノ財產或ハ所得ノ金額ヲ以テ、之ニ充ツルハ別ニ不都合ナシ、然レトモあだむ、すみすノ真意ノ在ル所ヲ付度スルニ、氏ハ租稅ノ根柢ヲ以テ納稅者カ國家ヨリ保護セラルル財產又ハ所得ニ比例スヘシト云フニ似タリ、臣民タル者カ政府ノ保護ヲ受クルハ勿論事實ナリ、併シナカラ其保護ヲ受クルカ爲ニ納稅ノ義務ヲ生スルカ如ク説クハ如何ノモノニヤ、保護ヲ受クルカ故ニ納稅ノ義務ヲ生ストセハ、租稅ハ取りモ直サス身體財產ノ保護料タラスンハ止マサルヘシ、即チ租稅ハ國家ノ保護ニ對スル報酬ト爲リ畢竟手數料ト撰フナカラシ、茲ニ於テ乎其根柢トシテ國民ノ義務タル觀念ハ那處ニカ之ヲ求メ得ンヤ、更ニ之ヲ尋釋スレハ以上ノ思想ハるゝそゝ氏ノ社會契約説ニ基クモノト見ルヘク、るゝそゝノ學説カ誤レルト同シクあだむ、すみすノ平等

説モ先ツ此點ニ於テ誤ラサルヲ得サルヘシ、次ニ氏ハ財產又ハ所得ニ比例スルヲ以テ租稅ノ平等ナリト解釋スルモ、然ラハ租稅ハ常ニ財產及所得ニ比例スヘキモノナリト云フニ、之ヲ學理ニ徵シ實際ニ徵スルニ、必スシモ然リト云フヲ得サルナリ、其故何ソヤ、予輩試ミニ之ヲ説カン、彼ノ累進稅説ハ近來一般ニ認メラレ殆ト之ヲ疑フノ餘地ナキハ恰モ以上ノ説ニ齟齬スルモノニ非サルカ、又實際ニ就テ之ヲ觀ルモ、累進稅ハあだむ、すみすノ租稅ノ平等ノ原則以外ニ於テ別ニ原則トシテ或ル種ノ租稅ノ上ニ行ハルルヲ見ル、要スルニ氏ノ説ハ、理論上且實際上兩ナカラ通セサル所アルハ必スシモ予輩ノ強辯ノミニアラサルナリ。

第三節 第二ノ原則ノ批評

第二ノ原則ニ曰ク、租稅ハ成ルヘク確實ナルヲ要ス、是レヲ以テ終始變動スル所アルカ如キ租稅ハ不可ナリト、此説タルヤ、一應尤モナリト雖モ、其實原則

トシテ現今之ヲ遵奉スルノ價值アリヤ否ヤ、疑ナキ能ハサルナリ、成ル程あだむ、すみすノ頃マテハ、多少之ヲ以テ原則トシテ主張スルノ必要アリシナラン。殊ニ封建時代或ハ君主擅制ノ邦國ニ於テ、國王若クハ權臣宰相ノ意思カ即チ法律ト爲リシ時代ニ於テ然リトス、例ヘハ帝王、大臣宰相ノミナラス、其配下ノ當局者マテカ自家ノ意思ニ依リテ租稅ヲ増加シ或ハ變更シタル時ニ當リテヤ、原則トシテ租稅ノ確實ヲ説クノ必要ナルハ古今東西ノ歴史ノ證明スル所ナリ、然ルニ一旦法治國ト爲リ立憲政體ノ確立スルニ及ンテヤ、此原則ハ其用ヲ失フニ至レリ、例ヘハ帝國憲法第六十二條ニモ「新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ定ムヘシ」ト規定シ、收稅官吏或ハ財政當局者ノ意見ニ從テ之ヲ變更スルノ餘地ヲ存セス、納稅者ハ常ニ明カニ法律ノ規定ニ依リテ租稅ヲ納付シ且負擔スルモノナリ、故ニ租稅ニシテ確實ナラサル租稅ナシ、假ニ一步ヲ讓リテあだむ、すみすノ眞意ノ在ル所ヲ付度スルトキハ大略左ノ如クナランカ、曰ク、凡ソ納稅者タル者ハ皆多少ノ資本ヲ有シテ以テ、各種ノ事業ヲ

經營シツツアリ、而シテ其資本ヲ放下シテ以テ事業ヲ始ムルニ方テヤ、必スヤ損益ノ勘定上租稅ノ負擔ヲ計算スヘシ、此計算ヲ基トシ、一旦事業ヲ開始シタル後突然從來ノ租稅ヲ増加シ若クハ或ハ新ニ課稅セラレルコトアランニハ、之カ爲最初ノ計畫ハ全然齟齬スヘク、到底國民ノ産業ヲ妨害セスンハ止マサルヘシト、以上ノ理由ニ依リテ氏ハ豫メ租稅ヲ確定シ最メテ變更スヘカラスト云フナラン、若シ夫レ特ニ産業ニ保護或ハ經濟ノ發展上ヨリ觀ルトキハ、無論課稅ニ由リテ以テ之ヲ妨害スルノ不可ナルヤ言フ俟タス、然レトモ之ニ事物ノ實際ニ徵スルトキハ、シカク簡易ナル問題ニアラス、例ヘハ我國ノ如キハ、明治維新以來幾度カ租稅ヲ變更シ、又幾度カ新シキ租稅ヲ設ケタルコト殆ト枚舉ニ追ナシ、加之方今各國間ノ競争日ニ益々劇甚ニ赴クニ方リテヤ、決シテ舊來ノ稅法ヲ墨守シ、一度定メタルモノハ之ヲ變更スヘカラスト云フカ如キコトハ到底アリ得ヘカラサルコトナリ、又租稅ノ法律ヲ變更シ或ハ新ニ租稅ヲ設クルトスルモ、是レ必スシモ毎ネニ人民ノ産業ヲ妨害スルモノナリト斷

言スルコト能ハス。縦シ多少妨害ストスルモ、畢竟程度論タルニ過キサルナリ。以上ノ理由ニ依リ、あだむ、すみすノ租税ハ確實ナラサルヘカラスト云ヘリシ原則モ、實際ニ於テハ殆ト行ヒ得ヘカラサルモノトナレリ。凡ソ租税中地租ハ最モ變更スルヲ不可トシ、其他多ク財産ニ課スル租税、例ヘハ家屋或ハ公債等ニ課スルモノモ亦然リ。然ルニ我國ノ實際ニ徴スルニ執レモ皆度々ノ變改ヲ經サルハナシ。是レヲ見テモ亦以テあだむ、すみすノ原則ノ強行スヘカラスト所以ヲ知ルニ足ラン。

第四節 第三ノ原則ノ批評

第三ノ原則ハ縦合租税ハ同一ナルモ將タ又税額ハ同シキモ納税ノ方法時期ノ異ナルニ從ヒ、負擔ノ輕重難易ニ關スル感覺ヲ異ニスルヲ以テ、豫ネテ納税者ノ爲ニ都合好キヤウ、工夫シ且取捨セサルヘカラスト云フニ在リ。此理ハ英國々民及當局者ノ常ニ考慮スル所ニシテ、實際上尤モナルコトナリ。姑ラク

最近ノ事實ヲ擧ケテ之ヲ證センニ、千九百十四年——十五年歐洲戰爭ニ際シ英國ハ戰時財政々策ノ一端トシテ所得税ヲ増徴シ且附加税ヲ課シタリ。ろい、ぢ、ち、ちハ千九百十五年五月四日之ヲ議院ニ於テ説明シテ曰ク所得税及附加税實收額ハ昨年十一月ノ見積額ヲ超過スルコト總計殆ト八百萬磅ニ達セシカ此好結果ヲ達セシ原因ノ大部ハ徴收方法ノ簡便ナリシカ爲ニシテ、這ハ附加税ニ關シ特ニ顯著ナルモノアリテ其徴收甚タ速ナリキ……殊ニ注意スヘキハ其徴收方法カ簡便ナリシコトヲ賞揚セシ書面ヲ送金ノ際小切手ト同封セシモノ少カラサリシ一事ト云々以テ見ルヘシ普通納税者ノ租税ニ對スル反感ノ情ノ如キハ大抵納税ノ手續ニ起因スルヤ多シ。

是レ應ニ當然ノ事ニ屬スルモ、若シ一步ヲ進メテ細カニ之ヲ考フルトキハ亦殆ト實行シ能ハサルヲ知ルニ難カラサルヘシ、先ツ原則論トシテ之ヲ考フルニ、元來納税者ノ爲ニ便利ノ租税ナルモノナシ、總テノ租税ハ納税者ノ爲ニ不便ナリ、何トナレハ、金錢ノ犠牲ハ凡テ人ノ欲スル所ニ非サレハナリ、姑ラク

一步ヲ譲リテあだむすみすノ説ヲ好意的ニ解釋センニ、蓋シ氏ハ納稅者カ租稅ヲ納付シ又ハ負擔スルニ方リ、其囊中餘裕ノ存スルモノアルトキハ容易ニ且喜ンテ之ヲ納付スルコトヲ得ヘキモ、之ニ反シテ其空乏ヲ感スル場合ニ徵收セラレルトキハ、縦令擔稅力アル者ト雖モ、猶大ナル不便苦痛ヲ忍ンテ之ヲ納付負擔スルハ事實ナリ。故ニ當局者ハ努メテ一般納稅者ニ餘裕アル時期ヲ撰ンテ徵收スル方針ヲ採ルヘシト云フノ意ナラン。此説タルヤ、單リ租稅ノ原則トシテノミナラス、あだむすみす竝ニ其餘流ヲ汲メル英吉利派ノ經濟學者ノ學說ノ一信條ニシテ、其然ル所以ノモノハ他ナシ。彼等ハ惟ヘラク、一國ノ經濟政策上最モ注意ヲ拂フヘキハ資本ノ増殖ニシテ、若シ資本ニシテ増殖センカ、國威モ亦自ラ宣揚スヘク、之ニ反シテ資本ノ缺乏スルヤ、國民モ亦自ラ衰亡スヘシ。故ニ經濟政策上力メテ保護獎勵セサルヘカラサルハ一ニ資本又ハ國富ノ増殖ナリト、此説タル、要スルニ第三原則ノ基礎ト爲リシモノナリ。則チ資本ノ増殖説ノ爲ニ此原則ハ鑄造セラレ、而シテ此原則アルカ爲ニ資本家ハ負

擔ヲ免レタル例ナキニシモアラス。如上ノ理ニ基キ從來學者ノ所謂納稅者ニ便利ナル租稅トハ元ト生産ノ終リニ課スル租稅ヲ意味シ、之ニ反シテ、納稅者ニ不便ナル租稅トハ生産ノ始ニ於テ課スル租稅ヲ意味セリ。何トナレハ若シ生産ノ始ニ於テ課稅センカ資本家ハ止ムナク生産ノ爲ニ用意シタル資本ノ一部分ヲ以テ租稅ノ仕拂ニ充ツルカ故ニ、勢ヒ生産ノ規模ヲ縮小スヘク、然ルニ一旦生産ノ結了シタル後、其得タル利益又ハ所得ヲ以テ租稅ニ充テンニハ、資本家タル納稅者ハ容易ニ之ヲ納付負擔シ得ヘケレハナリ。此説ノ行ハルルニ方リテヤ、學者及實際家ハ頻リニ消費稅ヲ主張シ、遂ニ歐洲諸國ノ租稅制度、例ヘハ佛蘭士、獨逸、和蘭、伊太利等ノ如キハ比較的下層ノ人民ニ課スルニ重キ間稅ヲ以テシ、其極國民ノ不平ヲ招キ甚シキハ内亂ヲ惹起シタルコトスラアリキ。千八百四、五十年ノ頃獨逸ニ於テ憲法問題上ノ騷擾ヲ生シタルトキ、其一口實トナリシハ從來ノ間接稅ナリ。

姑ラクみるノ説ヲ借り來リテ之ヲ説明センニ、凡テ貯蓄又ハ生産資金及財

産ニ課税スルハ不可ナリ。何トナレハ、貯蓄或ハ財産ニ課スレハ、一國ノ資本ヲ減殺スルコトトナリ、黽勉努力以テ財産ヲ増殖スル者ヲ罰スル結果ヲ生スレハナリ、實ニヤ、貯蓄者ヲ税スルハ浪費者又ハ遊蕩者ヲ保護獎勵スルコトト爲ルヘシ、之ニ反シテ、消費ノ場合ニ於テ課税スルハ最モ適當ナリ、何トナレハ將ニ雲散霧消スルモノトセハ國庫カ其幾分ヲ收納スルモ不可ナキノミナラズ、消費ヲ税スルノ結果ハ課税ヲ免レン爲ニ消費ヲ控フル者ヲ生シ、終ニハ貯蓄ヲ獎勵スルコトト爲レハナリト。是レ永ク歐米ノ人心ヲ支配セシ一思想ナリトス。

然ルニ翻テ之ヲ一般ノ趨勢ニ徵スルニ、國民ニ對スル租税ノ負擔ハ、益重カラントシツツアリ、サレハ現今ニ於テハ最早納税者ノ便不便ヲ問フノ遑ナキノミナラス、各國ニ於ケル租税法ノ精神ハ寧ロ資本家財産家ノ負擔ヲ増加セントスル趨向ヲ呈シ、縱令生産ノ始ニ於テモ猶課税スルコトヲ躊躇セサルカ如シ、斯クテ生産ノ始若クハ終リトカ、或ハ納税者ノ便、不便孰レヲ採ルヘキ

カ、之ヲ選擇シ得ル餘地アルニ方リテヤ、勿論納税者ニ便利ナル租税ヲ採ルヘキハ政治道德ノ命スル所ナリト雖モ原則トシテ之ヲ強ヒ、常ニ之ニ遵據セシメント欲スルハ吾人其可ナル所以ヲ知ヲサルナリ。

尙序ニ我國ノ租税徵收時期ニ付テ一言スル所アラン、我會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリテ翌年三月三十一日ニ終ル、而シテ政府ノ支出ハ年度ノ始既ニ六、七、八、九月ノ交割合ニ多キニ反シ收入ハ却テ年度ノ下半期ニ入ル頃即チ十一月以後ニ多シ、サレハ支出徒ラニ多クシテ收入之ニ伴ハス、爲ニ常ニ大藏省證券ヲ發行シテ國庫ハ之ニ對スル利子ヲ負擔セサルヘカラサルノミナラス、資金ノ借上ケハ金融市場ニ影響スル所少カラス、果シテ然ラハ何カ故ニ斯ノ如ク歲出入ノ不均衡ヲ閑假スルヤ、云フ迄モナク納税者ノ便利ヲ計ルニ在ルノミ、先ツ地租ニ就テ之ヲ見ルニ、收穫アリシ後ニ非スンハ、地主或ハ農民ハ納税ニ困難ナリ、故ニ田租ハ十二月ニ至リテ、始テ第一期ヲ徵收ス。

酒税ニ至リテモ之ト同様ニシテ、酒ノ釀造ハ多ク冬期ノ寒中ニ行ハルルヲ

以テ、酒税ハ其醸造又ハ仕込以後ニ於テ始テ賦課徴收スルヲ見ル。其他ノ租税ニ付テモ大抵皆然リ。

二九〇

第五節 第四ノ原則ノ批評

終リニ第四ノ原則トシテ、あだむすみすハ徴收費ノ少ナキヲ以テ租税ノ要道ト看做セリ。此原則モ亦一理アルニ似タリ、但實際論トシテ予輩ハ殆ト其價値ナカラシコトヲ恐ル、凡ソ經濟上ノ事業トシテハ收入少ナク經費多キモノヲ是認スヘカラスアルハ明白ノ事ナリト雖モ、收入多キト同時ニ經費モ亦多ク、而モ猶却テ實際ニ適當ナル事業少カラストス、租税ニ付テモ亦然リ。我國ノ酒税ノ如キ、關稅ノ如キ縱令_レ收納費ハ割合ニ多キモ、其收入ノ額モ亦多キヲ以テ畢竟ハ國庫ノ利益ニ歸スヘシ。彼ノ專賣ノ益金ノ如キ、國有鐵道ノ收益ノ如キ亦然リ。其經營費ハ多大ニシテ或ハ殆ト收入ノ半ハヲ占ムルコトアラン。併シ縱令半ハヲ占メタリトテ其殘ル所ノ純收入多大ナルヲ以テ、國庫ニ取リテ

ハ一良財源タルヲ失ハサルナリ。是レヲ以テ、徴收費ハ成ルヘク節約スルコトヲ努メサルヘカラスト云フハ不可ナキモ、人若シ徵稅費ノ多キ租税ハ之ヲ排斥スヘシ、其少ナキモノヲ採用スヘシト云ハハ是レ事務ヲ知ラサル書生ノ言タランノミ。

尙具體的ノ例ヲ以テ之ヲ説明センカ、例ヘハ茲ニ一萬圓ノ收入アル租税アリ、而シテ其徴收費ヲ十圓ト假定セハ此租税ノ徴收費ハ僅カニ千分ノ一ニ過キス。然ルニ茲ニ一億圓ノ收入アル租税アリ、而シテ此收入ヲ得ル爲ニ年々五千萬圓ノ收納費ヲ要スルモノトセハ、其收納費ハ恰カモ二分ノ一ニ該ル、若シあだむすみすノ第四ノ原則ニシテ絕對ニ遵奉スヘキモノナリトセハ、千分ノ一ノ徴收費ヲ以テ足ル一萬圓ノ租税ハ一億圓ノ租税ニ比シヨリヨキ良税ナリト云ハサルヘカラス然ルニ國庫ノ都合上、縱令五割ノ收納費ヲ要スルモ猶五千萬圓ノ純收入アルニ若カサランヤ、故ニ收納費ハ出來ルタケ節減セサルヘカラスト雖モ、單ニ收納費ノ多少ヲ以テ租税ヲ撰擇スルノ規矩ト爲スハ不

可ナリト謂ハサルヲ得ス。畢竟あだむすみすノ原則ハ其聲ノ大ナルニ似ス。實際ニ影響スル所少カリシハ事物ノ實際關係ヲ忽視セシカ故ナリ。

併シ此原則中最モ影響ノアリシハ第三ノ原則ナリ。例ヘハ我國ノ租稅徵收期限ノ如キ多クハ此原則ノ適用ト見ルモ可ナリ。

以上ハ我輩ノ管見ナリ。或ハ多少酷評ノ誹リアランモ、而モ之ニ依リテ以テあだむすみすノ所謂四大原則ノ實際上ニ於ケル價值ヲ推知スルニ足ラン。

第六節 結論

斯ノ如ク租稅ノ原則、殊ニあだむすみすノ租稅ノ四大原則ハ不完全ナルコトヲ免レス。然レトモ一度ヒ學術界ヲ風靡シテ、其人心ニ浸潤セシコト久シキカ爲ニ學者、實際家共ニ容易ニ之ヲ放擲セス、謂ハハ因襲ノ久シキ相傳ヘテ今日ニ及ヘリ。但其不完全ナルカ爲ニ嘗テあだむすみすノ主張セシ所ヲ其儘ニ繼承セル者ハ至テ少ナシ。或ハ此原則ノ數ヲ減スル者アリ、或ハ之カ増加ヲ圖

ル者アリ。例ヘハ財政學者トシテ有名ナル伯林大學教授わぐなノ如キハ其數ヲ増シテ九原則ト爲セルニ反シ、埃地利ぶらノ大學教授タリシ故ざつくすノ如キハ、唯一道義ノ原則ヲ以テ足レリト爲セリ。以テ租稅ノ原則ニ關スル諸學者ノ說カ一定セサルコトヲ知ルニ足ルヘシ。去レハトテ租稅ノ原則ヲ以テ全ク不必要ナリト主張セル者ナシ。蓋シ此原則ハ其實租稅ニ關スル根本的ノ原理ニ外ナラサルカ故ナリ。加之純然タル學理ニ從ヒ租稅ノ得失ヲ判斷スルハ時弊ヲ矯ムル上ニ於テ裨益スル所少カラサルノミナラス、寧ロ大ニ望ムヘキノ事柄ナリ。唯タ惜ム、實際ニ於ケル政治經濟上ノ利害關係ハ、理論ニ比シテ常ニ重キヲ爲スハ世上ノ通弊タルコトヲ、凡ソ政治上、社會上、經濟上勢力ヲ有セル階級ノ利害關係カ主ト爲リテ以テ、實際問題ヲ解釋スル例甚タ多シ。サレハ租稅ノ是非得失及實施ノ可否ヲ決スルハ理論ヨリモ寧ロ實際ニ於ケル利害關係ニ依ルコト多シ。元來人ハ皆利己心ノ爲ニ左右セラレルヲ免レスシテ、當局者又ハ立法者ト雖モ亦此數ニ漏レス。彼等ハ努メテ其己レニ不便ナル

租税ヲ避ケ、却テ他ノ階級ヲシテ代リテ負擔スル所アラシメントテ圖ルモノナリ。例ヘハ佛蘭士共和國ノ如キ、彼ノ王政竝ニ帝政ノ覆滅以來自由平等ヲ以テ其主義綱領トナスニ拘ハラズ、其財政殊ニ租税制度上ニ於ケル施設ハ多クハ政權ヲ握レル平民ノ富有者ノ手ニ成リ、從テ平民ノ富有者ニ不便ナル租税ヲ避ケ、貴族又ハ下層ノ人民ノ負擔トナルモノヲ採用セル例少カラサルハ事實ノ證スル所ニシテ、現ニ今ニ至ルマテ未タ真正ナル所得税ヲ施行セサルヲ以テモ知ラル。然ルニ茲ニ一ノ例外トモ認ムヘキハ英吉利ノ議院政治ナリ。英國ノ政治家ハ古來能ク國家ノ爲又一般公衆ノ利益ノ爲ニ、政治上重ナル勢力ヲ占ムル階級ノ利益ヲ犠牲ニ供シ、以テ經營施設ヲ圖リタル例甚タ多シ、是レ洵ニ英國ノ政治史ヲ飾ル一大美事ニシテ、近時英國政界ノ大問題タリシ上院改革案ニ對スル貴族ノ態度ノ如キ眞ニ賞讃スルニ餘リアリ。

第十八章 擔稅力及真正ノ稅源

第一節 擔稅力ハ稅源ニ依リテ同シカラス

租税ノ負擔ヲシテ公平ナラシメントセハ、勢ヒ之ヲ人民ノ擔稅力ニ順應セシムルト共ニ更ニ又課税ノ真正ノ稅源ヲ捕捉セサルヘカラス。然ラハ納稅者ノ擔稅力ハ果シテ何處ニ存スルヤ、又真正ノ稅源ハ如何ニシテ之ヲ捉ヘ得ヘキカ、是レ寔ニ至難ノ問題ト云ハサルヲ得ス。古來租税ノ負擔ヲシテ直接ニ擔稅力ニ適應セシメ或ハ間接ノ方法ニ依リテ真正ノ稅源ヲ見出サント圖リタル實例頗ル多シ。例ヘハ租税ニ由リテ稅率ノ高低ヲ異ニスルカ如キハ、直接間接ニ納稅者ノ擔稅力ニ應セシメンカ爲ニシテ、種々ノ課税ノ目的物又ハ標準ヲ採用スルカ如キハ共ニ真正ノ稅源ヲ捉ヘントスル直接ノ方法ニ外ナラス。真正ノ稅源ヲ捉ヘ得レハ又直チニ真正ノ擔稅力ヲ發見スルコトヲ得ヘシ、二者相異レリト雖モ、其實ニ至テハ即チ一ナリ、更ニ之ヲ説明センカ、凡ソ租税中

客體ノ増減スルニ從ヒ稅率ノ不同ナルハ所得稅ニ若クハナシ、其現行稅率ハ所得額ノ千分ノ二十ヨリ二割二分ニ上ホル之ニ反シテ、地租ノ稅率ハ嘗テ地價ノ二分五厘ナリシカ一時三分三厘トナリ、復ヒ二分五厘ニ復シ、日露戰役ノ際五分五厘ニ増加シ、現今ハ四分七厘ニ止マル、我國ニ於テハ國稅トシテノ家屋稅ナシト雖モ國ニ依リテハ其貸賃價格ノ五分ヲ課スルアリ、以テ知ルヘシ、諸稅ノ負擔ハ各々異ナレリト雖モ其歸スル所ハ負擔ノ公平ヲ期スルニ在リ、之ヲ異ニスルハ總テ實際ノ負擔ヲ公正ナラシメントスルニ在ルコトヲ、往時ニ於ケル人頭稅ノ如キ貴族、士族、平民各一人ニツキ其負擔額ヲ異ニスルハ等シク之カ爲ニシテ夫ノ平民ノ負擔最モ低ク貴族ノ負擔最重キ所以ハ、前者ハ最モ貧シク後者ハ最モ富メリト假定セラレタルカ故ノミ、斯ノ如ク、古ヘハ直接ニ負擔力ヲ捉ヘントセスシテ、唯外觀ニ現ハレタル事實ヲ捉ヘテ以テ之ヲ考量シ間接ニ之ヲ發見セント企テシト雖モ、爾後經濟ト政治及收稅手段ノ進歩スルニ從ヒ、直接ニ負擔力或ハ稅源ヲ見出サント圖ルニ至レリ、茲ニ於テカ、

此直接方法ノ如何ナルモノナルカヲ說カサルヘカラス。

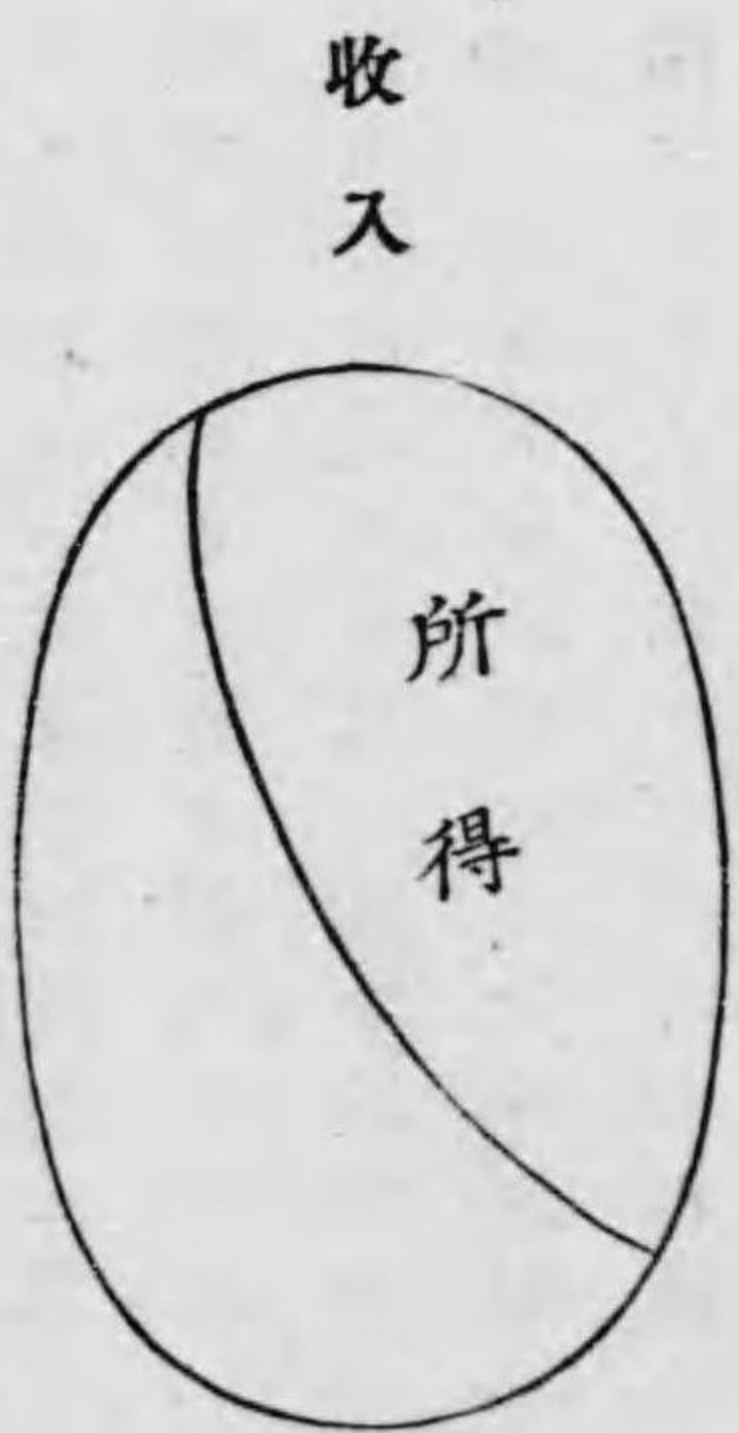
納稅者ノ負擔力ヲ測ル手段中、何レカ最モ適當ナリヤト云フニ、何人モ純所得ヲ以テ之ニ答フルニ躊躇セサルヘシ、然ラハ純所得トハ何ソ念フニ是レ財政及經濟上屢々用ヒラルル術語ニシテ相類似セルモノ少カラス〔收入〕〔所得〕〔收益〕ノ如キハ最モ切ナル例ナリトス、元來我國ノ法律上又財政學上未タ此三者ハ判然ト區別セラレサリシカ、寧ロ實際上漸次其意義ノ一定セントスル傾アルハ我意ヲ得タルモノト云フヘキナリ。

然リ而シテ所得ノ中ニ又〔純所得〕〔總所得〕トノ別アリ、凡ソ個人ノ懷ニ這入ツテ來ル所得ハ即チ總所得ニシテ、其中ヨリ之ヲ得ルニ必要ナル費用ヲ控除シタルモノハ即チ純所得ナリ、茲ニ聊カ收入、收益、所得ノ三觀念ノ關係ヲ畧說シテ、財源或ハ稅源ノ何タルカヲ理解スルニ資セン。

第二節 收入、所得及收益

苟クモ一旦經濟主體ノ占有ニ歸スルモノハ其理由ノ如何ヲ問ハス、何レモ皆例ヘハ他ヨリ借入レタル貨幣物品ト雖モ亦收入タルヲ妨ケサルナリ、然レトモ收入ハ悉ク所得ト云フヲ得ス、收入ニシテ所得タルモノアリ、又然ラサルモノアルモ、所得ハ皆收入ナリ、然ラハ所得トハ何ソ、予輩ハ暫ク左ノ如ク定義セントス、曰ク、所得トハ一定ノ期間ニ規則正シク所得セラルル收入ニシテ其所得者ノ利益ノ爲ニ隨意ニ處分シ得ラルルモノナリト、由是觀之、所得ノ觀念ヲ構成スルニハ二箇ノ條件アリ、即チ一ハ規則正シク取得セラルルコト、及二ハ之ヲ取得シタル者カ己レノ利益ノ爲自由ニ處分スルコトヲ得ル收入タルコト是レナリ、人若シ所得稅ヲ賦課セラルル收入ヲ見ハ皆如上ノ性質ヲ有スルモノタルヲ知ルニ足ラン、例ヘハ官吏ノ俸給ニ對シテハ悉ク所得稅ヲ課スルカ如シ、何トナレハ毎月或ハ毎年規則正シク取得セラルルカ故ナリ、然ルニ土地ノ收穫ニ對シテハ其總テニ所得稅ヲ課セス、先ツ第一ニ其土地ノ收穫ヨリ地租其他ノ公課ヲ控除ス、是レ縱令土地所有者カ其所有地ヨリ得タルモノ

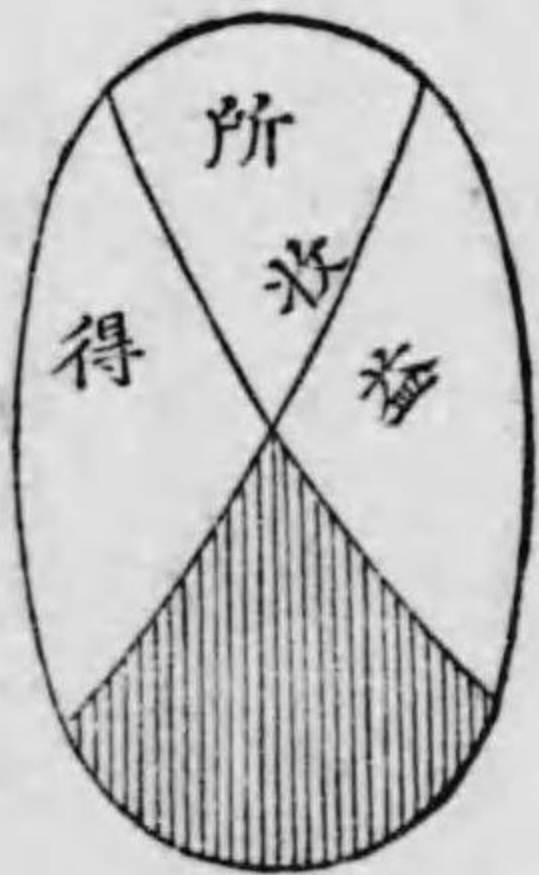
ナリト雖モ、公課ニ對スル部分ハ土地所有者ノ自由處分ヲ許ササルカ故ニ當然除外セサルヘカラサレハナリ、果シテ然ラハ所得ハ收入ノ一部分ニシテ圖ヲ以テ示ストキハ左ノ如クナラン。



然ラハ收益トハ何ソヤ、曰ク、收益トハ一定ノ期間ニ於テ或物件ヨリ生スル收入ナリト、サレハ官吏ノ勤務或ハ勞働者ノ勞役等ニ據リテ以テ得ル所ノ收入ハ收益ニ非ス、之ニ反シ、土地ノ收穫ノ如キ、家屋ノ賃貸料ノ如キ、地代ノ如キ、公債ノ利子ノ如キ皆收益ナリ、何トナレハ其財源タル確固ニシテ又容易ニ消滅セサル物件タルヲ以テナリ、左ニ收入、所得及收益ノ關係ヲ圖示セン。

擔稅力及真正ノ稅源、收入、所得及收益

收入



斯ノ如ク一部分ニ於テ所得ト収益トハ相重複スルコトアルモ、又然ラサル部分モアリ、其収益ニシテ而モ所得ニ非サルモノヲ例示セハ、茲ニ未丁年者ノ爲ニ土地或ハ其他ノ財産ヲ管理スル者アリトセンニ、其管理者カ彼等ノ土地財産ヨリ年々收穫スル所ノ物ハ収益ナリト雖モ、ソハ管理者ノ利益ノ爲ニ自由ニ使用スルコト能ハサルカ故ニ其所得ト稱スルコトヲ得ス、又所得ニシテ収益ニ非サルモノヲ舉クレハ、官吏ノ俸給ノ如キハ其一例ナリ、何トナレハ俸給ハ官吏ノ勤勞ニ由リテ得ルモノナレハナリ、抑勞働トカ勤勞トカ稱スルモノハ其之ヲ呈供スル際ニ於テノミ存スル財源ニシテ、土地家屋ノ如ク基本的固定ノ財源アリテ永ク存在スルニアラス。

此理由ニ由リ地租ノ如キハ比較的重課スルモ不可ナルコトナシ、何トナレハ基本的ノ財源永續的ニ存在シ、其所有者ハ設令將來ノ謀ヲ爲ササルモ直チニ放浪ノ菑ニ遇ハサルヘシト雖モ單ニ俸給又ハ勞銀ニ由リ衣食スル者ハ唯其之ヲ得ル間ノミ財源ヲ有スルカ故ニ、將來ノ謀ヲ爲スノ必要上比較的其負擔ヲ輕減セサルヘカラスト云フ結論ヲ生ス。



次ニ右圖中 印ヲ以テ現サレタル部分ハ収益所得ノ孰レニモ屬セスト

雖モ、等シク租稅或ハ稅源ト密接ナル關係ヲ有ス、試ミニ此中ニ含マルルモノ著シキ例ヲ舉ケンニ、相續財產若クハ財產等ノ價格ノ騰貴ニ因ル富ノ増殖ナリトス、先ニ與ヘタル定義ニ據レハ、相續財產ハ所得ニモアラス、收益ニモアラズ、又彼ノ臺灣ノ彩票、將タ權利株ノ騰貴等ヨリ得ル收入ハ等シク所得及收益ニ非ス、而モ斯ノ如キハ經濟ノ進歩著シキ時代ニ當リ類々トシテ生スル事實ニシテ又土地價格ノ自然増加ノ如キハ所得ニ非ス、等シク收益トモ云フヘカラス、予輩ハ假リニ之ヲ稱シテ「一時ノ利得」ト稱スルノ穩當ナルヲ信セントス。

第三節 純所得ト税源

前述セル所ヲ以テ見ルニ、租税ヲ納付スルニハ常ニ收穫アルコトヲ要ス。然レトモ收入アレハトテ直チニ之ヲ以テ税源ト爲シ、以テ納税者ノ擔稅力ヲ計ル標準ト爲スコト能ハス。其最モ完全ナルモノト看做スヘキ純所得ト雖モ、必スシモ常ニ納税者ノ擔稅力ヲ現ハスモノニアラス。換言スレハ、擔稅力ト純所得トハ相一致セス。故ニあだむ、すみすカ説キタル如ク、純所得ヲ認メテ以テ直チニ税源ノ存スル所トナスハ、早計ニ失スルヲ免レスシテ、純所得ハ寧ロ課税ノ一標準ニ過キス。是レヲ以テ真正ノ擔稅力又ハ税源ヲ見出サントセハ勢ヒ純所得ニ就テ多少ノ斟酌制限ヲ加フルコトヲ要ス。而シテ其斟酌スヘキ重ナル事情ハ左ノ如シ。

一、生活ノ必要費。全然同一義ニアラサルモ、英語ニテ之ヲ [Minimum of existence] ト云フ。獨佛語ニ於テモ亦同シ。生活ノ最少費トハ、社會ニ於ケル普通一般

ノ人カ普通ノ程度ヲ以テ生活スルニ必要ナル費用ナリト解シテ可ナリ。若シ吾人ノ所得ニシテ生活ノ必要費ノ爲ニ吸收シ盡サレンカ、縱令純所得ニシテ存スルモ、其擔稅力ハ甚タ薄弱ナリ。此理由ニ基キ、所得者ノ家族ノ數、年齢、健康ノ状態、負債ノ有無等ハ皆以テ擔稅力ヲ定ムル要件タリ。各國ノ所得税法ニ據ルニ、其額等シカラスト雖モ、皆一定ノ小所得ニ對シテ減免ノ特典ヲ設ケサルモノナキハ此理ニ依ル。例ヘハ、我國ニ於テハ四百圓以下ノ所得ニ對シテハ所得税ヲ課セス、又普魯西ニテハ四百五十圓、さくそニ一王國ニテハ二百圓、うやゝるてんべるひ王國ニテハ二百五十圓、埃地利ニテハ五百圓、和蘭ニテハ五百四十圓、諾威ニテハ百八十圓、瑞西ニテハ二百八十圓迄ノ所得ニハ各所得税ヲ課セス、丁抹ニテハ特別ノ制度ヲ採リ全國一樣ナラス。地方ニ依リテ異ナリ、例ヘハ資本家多キ市街地ト資本家少ナキ田舎トハ經濟事情ヲ異ニシ生活費ヲ同フセサルヲ以テ全國ヲ分チ三階級トシ以テ最低課稅額ヲ異ニス、三百三十圓、三百九十圓及四百四十圓ハ即チ其等級ナリ。西班牙ニ於テハ官吏ト非官吏ト

ヲ別ニシ、官吏ハ三百十圓、官吏ニアラサル者ハ四百五十圓ヲ以テ最低課稅額ト爲セリ。以上ハ所得ニ付テノミ適用セラレ得ヘキモノニシテ、收益或ハ一時的ノ利得等其他間接ノ方法ニ由リ擔稅力及稅源ヲ見出サントスル場合ニ於テハ之ヲ適用スルノ餘地ナシ。

二、所得ヲ得ル資格及條件。個人ノ所得ハ、縱令其金額ハ同額ナリトスルモ擔稅力ニ差異アルハ上述セル種々ノ事情ニ徴シテ明カナルノミナラス、正確ノ所得額ヲ調査スルハ容易ノ業ニアラス。擔稅力ノ差異ハ所得者ノ經濟上ノ地位若クハ關係等ニ由ルコト多ク、之ヲ細論スレハ左ノ如シ。

(い) 所得ヲ取得スル能力ニ制限アル者ト、制限ナキ者トノ間ニ於テ別アリ例ヘハ寡婦孤兒ノ所得ノ如キハ壯年有爲ノ者ニ比シテ、其之ヲ取得スル能力ニ劣レル所アルハ云フヲ俟タス。

(ろ) 少額ノ所得ハ實際ノ擔稅力ニ乏シ、富メル者ハ倍々富ミ易ク、貧シキ者彌々貧シキハ現時ノ經濟界ニ於ケル一部ノ現象ナリ。故ニ貧者ノ所得ハ富者

ノソレニ比シ稅源トシテ同一視スルコト能ハス。彼ノ獨逸聯邦ノ一タルバ、でん大公國ニ於テハ、婦人又ハ小兒ノ所得カ五百麻即チ二百五十圓以下ナルトキハ、所得稅ヲ免除スル特例ヲ設ク。

(は) 是レニ反シテ、實際所得ナキモ尙之ヲ生シ得ヘキ資格ヲ存スルモノハ良好ナル稅源ト爲スニ足ル例ヘハ富豪ノ別莊庭園等ノ如シ。

三、縱令所得ハ同額ナリトスルモ其擔稅力ニ差異アル所以ハ他ナシ、其之ヲ得ルニ當リ、危險ノ多キモノト少ナキモノト、之ヲ得ルニ確實ナルモノト不確實ナルモノトハ實際ノ負擔力ニ於テ決シテ一樣ナルコト能ハサレハナリ。是レヲ以テ英國ノ如キハ生命保險ノ懸金ヲ所謂生活ノ必要費ト同一視シテ所得稅ヲ課セサルナリ、加之所得中其性質永遠的ノモノト一時的ノモノトハ、擔稅力ヲ同ウセス。若シ所得ニシテ單ニ一時的ノ性質ヲ具ヘ、年々變動スルコトアラシカ、容易ニ課稅ノ目的物トスルコト能ハサルヘシ。斯ル場合ニ於テハ數年ノ間ニ亘ル平均額ヲ以テ課稅ノ目的物トナササルヘカラス、勞働者所得ノ

如キハ其例ナリ。此理由ヨリシテ地方税例ハ府縣市町村税ニ付キ、國税ノ附加税ヲ課スルニ當リテヤ、税源ノ確實ナルモノ即チ永久的ノ性質ヲ帶フル所得ハ可ナリト雖モ、一時的ノ性質ヲ帶フル所得ニ對シテハ、一度ノミ之ヲ課税スルヲ以テ満足セサルヘカラス。

第四節 税源又ハ擔稅力ノ差異ト稅制ト

是レヲ以テ彼ノ端西國ノ二三ノ「かんごん」ニ於テハ、税源ノ異ナルニ隨ヒ所得稅率ヲ増減シ、之ニ反シテ、索遜王國、へつせん大公國等ニ於テハ、收益ノ種類ニ依リテ稅率ノ輕重ヲ分ツ、又國ニ依リテハ、所得稅ト收益稅トヲ併セ行ヒ、以テ此等各種ノ所得又ハ税源ノ間ニ於ケル負擔ノ權衡ヲ保タンコトヲ圖レリ。我國ニ於テハ從來比較的の收益稅ニ重キヲ置キ明治十年以前ニ於テハ租稅ト云フ御年貢ヲ指シ而シテ御年貢ハ地租ヲ意味シタル有様ナリキ其他數種ノ租稅ナキニシモアラサリシカ殆ト云フニ足ラス爾後新稅相次テ起リ今ヤ

所得稅、交通稅、消費稅等ヲ鹽梅シテ以テ租稅制度ヲ組織スルヲ以テ舊時ノ如ク收益稅ニ重キヲ置クト云フコト能ハスト雖モ而モ吾人ノ看過スヘカラサルハ歐洲殊ニ英國ノ稅制ニ比シテ偏ヘニ生産的の財源ヲ打捕スルコト急ナルノ一事ニアリ是レヲ以テ反對ノ結果トシテ消費ヲ助長スルノミナラス奢侈物ヲ庇護シテ課稅セサルニ至ラスンハ止サルナリ由來舊文明國ニ於テハ舊文明ノ負擔アリ此負擔ヲ以テ専ラ文華ヲ粉飾スルカ故ニ強テ之ヲ排斥スヘキニアラスト雖モ要スルニ我國ノ如ク舊文明又ハ歴史ノ負擔重キ國ハ又ト之レアラサルヘシ例ヘハ遊戯ノ如キ平安朝廷以後縉紳ノ間ニ行ハレ來リシ種類方法ヲ數ヘ來ラハ數十百種ニシテ止マラサルナリ從テ之カ爲ニ要スル機具要品ノ極メテ多シ從テ之カ爲國民ノ資財ヲ投スルコト多キ世界各國民中其比ヲ見サルナリ而シテ是等ノ投資ハ殆ト皆租稅ヲ免ルルニアラスヤ其生産ヲ妨碍シ國民負擔ノ不公平ヲ招クコト果シテ幾許ソヤ予輩ハ此理ニ由リ所得稅法第四條ノ規定ヲ歡迎スルモノナリト雖モ而モ餘リニ過キタルニ

アラスヤトモ思ハル同條ニ依ルニ財産所得ニハ全額ヲ課税シ勤勞所得ニハ其所得ノ九割ヲ課税スルニ止ム是レ財産所得ハ勤勞所得ニ比シ擔稅力ニ富ムノ前提ニ基クナルヘシ

普魯西王國ニ於テハ千八百九十三年以來所得稅ノ傍ラ國稅トシテ所謂資產稅一名補完稅ヲ施行シ以テ普通ノ所得ト收益トノ間ニ於ケル負擔ノ公平ヲ圖レリ是レ同國ニ於テハ千八百九十一年ノ稅法改正ニ依リ嘗テ國稅タリシ地租家屋稅ヲ移シテ地方稅ト爲シタル結果由リテ生セシ缺陷ヲ補フ爲ニ一方ニ於テハ營業稅及所得稅ノ大改革ヲ行ヒ一方ニ於テハ其一度地方稅源ニ充テタル土地家屋等ノ如キ重ナル有體財產即チ不動產ニ課スルニ國稅ヲ以テシタリ故ニ之ヲ「資產稅」或ハ「補完稅」ト名ク其補完稅ト稱スルハ國稅ノ足ラサル所ヲ補フノ意ニ出ツ

第五節 我國ニ於テハ家族制度ニ重キヲ置

クカ爲尊族親ヲ扶養スル者ハ特ニ

減免スル處アルヲ要ス

由來我國ハ君子國ノ稱アリ人情敦厚ニシテ節義ヲ尊ヒ長幼序アリ子ハ親ヲ敬ヒ親ハ子ヲ愛シ夫唱ヘ婦和シ以テ一家和睦シ一家和睦シテ以テ一村一郡和睦シ一村一郡和睦スルハ以テ天下國家ノ和睦スル所以ナリ

顧ミルニ維新以來泰西ノ文物制度ヲ採用シ範疇ヲ世人ノ所謂個人本位主義ニトリシヲ以テ人情漸ク自ラ守ルニ急ニシテ苟クモ法律ノ禁セサル所ハ事トシテ爲ササルナク舉世滔々トシテ亦祖宗建國ノ基本タル忠孝ニ志ス者日ニ尠カラントス此時ニ當リ頽瀾ヲ既倒ニ回ヘシ忠孝節義ノ氣風ヲ獎勵スルハ大ニシテハ國家社會小ニシテハ一身一家ヲ安泰ニスルノミナラス世道人心ヲ匡正維持スル上ニ於テ最大必要ノ事タラスンハアラス近來世上此理ヲ覺ルモノアリ頻リニ外國ヨリ新輸入セル思想制度文物ノ弊ヲ認メ之カ矯

擔稅力及真正ノ稅源 我國ニ於テハ家族制度ニ重キヲ置クカ爲尊族親ヲ扶養 三〇九
スル者ハ特ニ減免スル所アルヲ要ス

正ニ勉メ時證ノ一藥トシテ家族制度ヲ提唱シテ曰ク我國ハ古來家族制度ヲ以テ國ヲ建ツ是レ我國ノ特長ニシテ顧ミルニ萬國ニ冠絶スル所以ナリト蓋シ或ハ然ラン然レ共家族制度ナルモノハ社會進化ノ一階段ニシテ多少ノ差異コソアレ現今開明ノ諸國民ハ皆此階段ヲ蹈ミ來ラサルモノ殆ト是レナシ例ヘハ一時覇ヲ當時ノ世界ニ唱ヘシ羅馬國民ノ如シ物變リ星移リ羅馬帝國ノ人心ハ世ト推遷シテ家族制度ハ亦其遺孽タモ止メサルニ至レリ文明ノ進歩ト世運ノ變化トハ之ヲ命令シテ餘儀ナカラシメタルモノナリ我國豈獨リ社會進化ノ法則ト順序トヲ脱却スヘシト考フルハ抑末ナリ若シ強ヒテ之ヲ制シ勗メテ之カ有リノ儘ヲ維持セント謀ル者アランカ是レ社會及國家ノ進歩ノ大勢ニ抗スル者ナリ扇ヲ以テ日ノ沒スルヲ招キ返ス愚ヲ學ハント欲スル者ニ比シテ更ニ愚ナルヲ免レサルヘシ般鑑遠カラス支那ニ在リ時ニ隆替興亡アリト雖モ唯同一途ノ治亂興敗ヲ繰リ返スニ過キスシテ國勢又ハ民勢ハ漸ク萎靡振ハス四圍ノ壓迫ヲ受ケテ今ヤ中華民國ヲ以テスルモ猶誇ル能

ハサラントス予故ニ曰ク家族制度亦不可ナルコトナシ我國民ニシテ之ヲ維持保存セント欲セハ之ヲ維持保存ニ任スヘシ唯之カ爲社會進歩ノ大勢ニ抗スヘカラサルナリト。

然レトモ今ヤ時世ノ變遷ハ滔々トシテ流連興亡還ヘルヲ忘ルノ勢ヒアラズンハアラス徒ラニ此流レニ棹シテ還ヘルヲ忘レンカ天壤無窮ノ國家モ祖宗數千年ノ遺風モ其レ危ヒカナ故ニ吾人ハ先ツ一身ヲ脩メ次テ一家ヲ和ラケ一郷一國ヲ和衷淳厚ナラシムル手段ヲ講スルヲ以テ最急ト認ム近時傳フル所ニ依レハ兄弟姉妹相鬪ク者多シ兄弟姉妹相鬪クハ尙可ナリ兄弟姉妹殺傷スル者少カラス兄弟姉妹相殺傷スルハマタシモナリ親其子ヲ殺傷シ子其親ヲ殺傷スル者往々ニシテ是レアリ古ノ人ヲシテ之ヲ見之ヲ聞カシムレハ果シテ何トカ言ハン顧ミルニ明治維新國家祖宗ノ風教ヲ維持スル所以ノ上ニ於テ缺如タリ徒ラニ米ヲ採リ歐ヲ模シ汲々トシテ後レンコトヲ恐ルルニ當リ如上ノ出來事アルハ怪ムニ足ルナシ是レヲ以テ吾人ハ須ラク時世變化

擔稅力及真正ノ稅源 我國ニ於テハ家族制度ニ重キヲ置クカ爲尊族親ヲ扶養 三一

ノ大勢ニ應スル手段ヲ採リテ以テ祖宗ノ精神祖宗ノ思想祖宗ノ風教ヲ維持セサルヘカラサルナリ

顧ミルニ現今時世ノ變化ハ如何ナル原因ニ由リテ惹起セラレ且促進セラレツツアルヤ此原因ヲ促ヘテ以テ策スル所ナクンハ經國濟民ノ業ハ成ルヘカラス而シテ現今時世ノ變化ノ原因ハ經濟ノ進歩ニシテ之ヲ促スモノハ人民ノ利己心ノミサレハ經國濟民ノ術ハ斯利己心ニ向ケ投棄スル所ナカルヘカラス然ラスンハ千萬ノ術策ハ徒ラニ勞シテ效ナキヤ必セリ若シ夫レ方今人ノ人タル所以ノ大道ヲ勸勉シ長敬ニ父母ニ孝ナラシメントセハ利ヲ以テ之ヲ導クニ如カス他ナシ政治ヲ以テ父母ニ孝ナル者ニ對シテハ利益ヲ與フル所アルヘキナリ斯ノ如クスルトキハ父母長上ニ孝ナル者ハ賞セラレ孝ナラサルモ罰セラレサルモ猶賞セラレサルノ結果ヲ生スルヲ以テ天下ノ人心ハ靡然トシテ孝行ニ歸趨スヘシ而シテ之ヲ一家生計ノ情狀ニ徴スルヤ我國古來ノ道德習慣ハ皆父母ト同棲スルヲ本則トシ亦現時社會ノ組織同棲セス

ンハ不可ナル理由ナシトセス而モ歐米化セラレタル青年男女ハ動モスレハ父母ト同棲スルヲ喜ハサルノ風益々盛ナラントス同棲ヲ強ヒルノ結果動モスレハ一家ノ不和合ヲ惹起シ遂ニハ親子ノ破滅ヲ招クモノ往々ニシ然リ此時ニ當リ子ハ親ヲ歡迎シ親ハ子ノ家ニ寓スルヲ樂マシメントセハ親ノ扶養ニ山リ却テ子ノ社會上生活上ノ負擔ヲ減輕セシム方法ヲ設クルニ若クハナシ其第一手段トシテ先ツ父母長上ヲ扶養スル子孫ニ對シテハ其所得稅課稅額ヨリ被扶養者一人ニ付一定ノ金額ヲ控除スルノ制ヲ設クヘシ而シテ此恩典ニ浴スル者ハ姑ラク父母祖父母及叔伯父母ヲ扶養スル者ニ限り血縁ノ遠カルニ從ヒ控除額ヲ加増スヘシ斯ノ如クナルトキハ人情自ラ敦厚ニ赴キ少壯者ハ喜ンテ長上ニ孝ナラン嗚呼人情誰レカ其長上ニ孝ナルヲ欲セザラン其孝ナラサルハ事實上不可能ナレハナリ今其欲スル所ヲ可能ナラシムハ治世ノ要道ニシテ天下亦之ニ勝ルノ德政ナカラシテ千篇一律ナルハ行政上殊ニ經濟上避クヘキコトトス是レヲ以テ控除額ハ血縁ノ遠近ニ依リテ増減スル

擔稅力及真正ノ稅源 我國ニ於テハ家族制度ニ重キヲ置クカ爲尊族親ヲ扶養 三一三
スル者ハ特ニ減免スル所アルヲ要ス

ノミナラス都鄙其居ヲ異ニスルニ由リテ亦之ヲ鹽梅増加スル所アルヘシ何トナレハ市街地ノ生活費ハ比較的亦絶對的ニ多キニ反シ田舎ノ生活費ハ少クシテ事足ルヲ以テナリ

英國ノ所得税法ハ所得者ノ子女扶育費トシテ其所得税課税額中ヨリ一人十磅ヲ控除スルノ制ヲ設ク獨逸ノ一財政學者ハ之ヲ評シテ新奇ノ制度ナリト云ヘリ子女ニ對シテスラ猶此制アリ況ンヤ人情道德ヲ異ニスル我國ニ於テ焉ソ父母長女ニ對シテ同制度ナカルヘケンヤ念フニ我國ノ所得税ハ名ハ所得税ト云フト雖モ其精神ハ收益税ナリ所得税トシテハ將來此缺點ヲ除カサルヘカラス但吾人ノ主張ハ當ニ租税トシテノ缺點ノミヲ除去セントスルニアラス主トシテ頼リテ以テヨリ大ナル社會ノ綱紀ヲ振作維持セント欲スルニ外ナラサルナリ

第六節 擔稅力ハ所得ノ大小ニ由リテ大ニ

異ル

以上ハ實際ニ於ケル納稅者ノ擔稅力ヲ概論セシニ過キサルカ單ニ理論上ヨリ之ヲ觀察スルモ所得ノ大小ハ必スシモ直接ニ負擔力ノ大小ト相應セス特ニ大所得ハ小所得ニ比シテ其金額ノ多少ニ對スルヨリハ更ニ大ナル負擔力ヲ有スルハ世人ノ學理上實際上認ムル所ニシテ其然ル所以ハ他ナシ大所得中ニハ比較的僅少ノ必要費用ヲ含蓄スルモ是レニ反シテ小所得ニ至リテハ殆ト全ク是レカ爲ニ吸收シ盡サルルノミナラス縱令餘剩アリトスルモ尙輕重用不用ノ度一樣ナラサレハナリ例ヘハ一萬圓ノ所得ヲ得ル者ハ生活費トシテ二分ノ一ヲ支出ストスレハ其残りノ二分ノ一ノ所得ハ或ハ快樂ノ爲ニ交際ノ爲ニ親族ノ爲ニ或ハ學問技術ノ研究ノ爲ニ自由ニ費消スルコトヲ得ヘシ是レニ反シテ千圓ノ所得者ハ生活費トシテ殆ト其全部ヲ支出セサルヘカラス若シ強テ之ヲ節約セントスレハ或ハ其人ノ地位ヲ毀ヒ或ハ健康ヲ

損フコト無シトセス。又縱令殘餘ヲ生ストスルモ、此ハ容易ニ費消スルコトヲ得ナルヘシ。何トナレハ、一旦病魔ノ襲フ所トナルカ、將タ不時ノ事故ノ發生シタル場合ニハ之ニ頼ルノ外途ナケレハナリ。故ニ十分ノ一ノ所得ヲ有スル者ハ十分ノ一ノ負擔力アリト云フコトヲ得ス。之ヲ反對ニ言ヘハ、十倍ノ所得ヲ有スル者ハ十倍以上ノ負擔力アリ。前述セル千圓ノ所得者ト一萬圓ノ所得者トノ例ニ據ルニ、後者ノ五千圓ト前者ノ五百圓トハ各其二分ノ一ナルモ、其所得者ニトリテハ孰レカ重要ナルヤ、蓋シ識者ヲ俟テ後知ラサルナリ。人若シ限界的效用說ニ依リテ此理ヲ説明センカ尤モ明瞭ナルヲ見ン。

是レ實ニ各國ノ經濟上又政治上ノ關係ヲ察スル上ニ於テ大關係アルコトニシテ、管ニ收稅上ノミニアラサルナリ。乞フ、少シク英佛兩者ニ付テ之ヲ見ンカ。何故ニ佛蘭士ハ英吉利ニ對シテ、常ニ政治上行政上經濟上一籌ヲ輸スルカ、其主タル原因ノ一ハ正ニ左ノ事情ニ存スヘシ。蓋シ英國資本家ハ海外マテ巨額ノ放資ヲ爲シ、所謂冒險的ノ事業ヲ企ツルニ拘ハラズ、佛人ハ企業心ニ乏シ在リ。

ク海外の事業ノ如キハ萎靡スルモ顧ミス、唯零細ノ貯蓄ヲ爲シ、確實ノ放資ニ甘ンスルノ風アリ、即チ英人ハ常ニ大所得者タルヲ期スルニ反シ、佛人ハ常ニ中小所得者タルヲ以テ満足スルモノナリ。其結果英人ハ或ハ其所得ノ一部ヲ失フコトアルモ、之カ爲ニ社會上ノ地位ヲ失フコトナキニ反シ、佛人ノ所得ハ則チ彼等ノ生命ト等シク重要視スル所ナリ、兩國々勢ノ異ナル所以實ニ茲ニ在リ。

第七節 累進稅ノ基礎

抑累進稅ノ說ハ上述ノ理由ニ依リテ生セシモノニ外ナラス。蓋シ大所得ハ小所得ニ較ヘテ割合ニ擔稅力ニ富ム、所得ニシテ十倍ナラハ其擔稅力ハ十倍ニ止マラサルナリ。是レ大所得ハ所得者ノ生活ノ費用ヲ辨シタル後割合ニ餘裕多ク、是レニ反シテ小所得ハ殆ト生活費ノ爲ニ其全部ヲ吸收シ盡サレ、爲ニ自由ニ使用スルコトヲ得ル部分殆ト是レナキニ由ル、換言スレハ、大所得ハ自

由所得多ク從テ多額ノ租稅ヲ納ムルモ比較的苦痛ヲ感セサルモ、小所得ハ自由所得割合ニ少シ、故ニ所得ニ比例スル負擔ニ堪ヘサルナリ。此理由ハ所謂累進稅ノ根據ヲ成スモノトス。若シ擔稅力ニシテ所得ノ増加スル割合ニ増加スルナラハ、到底租稅ノ累進ヲ行フノ餘地存セサルヘシ、畢竟所得ノ増スヨリハ大ナル割合ヲ以テ擔稅力ノ増加スルカ故ニ、累進稅ノ正當ナル所以ノ理ヲ生スルナリ。從テ所得稅カ累進ヲ行フニ最モ適當ナル租稅タルヲ知ルニ難カラス、人若シ累進法ヲ行フトキハ財政上二ツノ目的ヲ達スルコトヲ得ン、一ツハ個人カ國家ニ對シテ供スル犧牲ノ不平等ヲ避クルコト、二ハ國內ニ於ケル總テノ經濟力ヲシテ最モ適當ナル方法ニ依リ公事ニ勗メシムルコト是レナリ。尙租稅ノ累進ニ付テハ章ヲ改メテ之ヲ詳說スヘシ。

第十九章 租稅ノ累進

第一節 租稅ノ累進ノ意義

〔租稅ノ累進〕トハ、資産又ハ所得ノ増加スルニ從ヒ、其増加スルヨリハ、ヨリ速ニ稅率ヲ増加スルノ謂ナリ、累進ノ制度方法ヲ適用セラレタル租稅ハ之ヲ累進稅ト云ヒ、其之ニ適用シタル稅率ヲ累進率ト云フ、而シテ近來租稅ノ累進ヲ主張スルノ聲漸ク喧シク往々極端ニ馳スルノ結果、却テ再ヒ舊時ノ狀態ニ退歩スルノ國ナシトセス、其最モ熱心ニ之ヲ主張スルハ社會黨或ハ社會主義者ニシテ、經濟學者及政治家中ノ所謂社會政策家モ亦之ヲ唱フ、社會主義者ハ常ニ累進稅ヲ以テ社會改革ノ一手段ト認ムルト共ニ、之ヲ主張シテ以テ財產家或ハ資産家攻撃ノ武器トスル傾アリ、故ニ政治上資産家ノ勢力アル佛蘭士等ニ於テハ、今尙之カ實行ニ躊躇セリ、元來佛蘭士ノ如キ民主國ニ於テハ、斯ル租稅ハ最モ早ク行ハルヘキ道理ナルモ、實際社會ノ基礎ト爲リ或ハ名譽ノ源泉

ト爲ル者ハ、夫ノ王室及貴族ノ勢力ヲ失墜セシ以來、平民ノ財產家ヲ措テ亦他ニ之ヲ求ムヘカラス。從テ佛蘭士ノ大革命以來、彼等ノ利益ニ反對スル租稅ハ常ニ避ケラルルノ傾向ヲ存シ、而シテ政治ノ局ニ當ル者多クハ、財產家ナリシカ故ニ、勢ヒ其爲ニ不便ナル租稅ハ排斥セラレサルヲ得サリシ。

租稅ノ累進ニ關スル學說及事實ハ其由來スル所甚タ遠シ、嘗テ希臘國ノ昔殊ニすばるたトあせんすトノ間ニ於ケルペロポンネシヤン戰爭ニ際シ、あせんすニ於テ累進稅法ヲ行ヒシコトアリ。後歐洲ノ中世時代ニ於テ自由獨立ノ諸都市、次テ十八世紀ニ於ケル佛國ノ兵役稅ハ又其例ニ依レリ。近時學者ノ之ヲ攻究スル者次第二増加シ、雷ニ一派ノ政策家ノミナラス、經濟學者中租稅ヲシテ納稅者ノ擔稅力ニ適應セシメンカ爲ニ之ヲ主張スル者倍々多シ。左ニ累進ノ種類ヲ説カン。

第二節 累進ノ種類

累進ヲ大別シテ二種トス。

第一、總體ノ累進。〔總體ノ累進〕トハ、課稅上納稅者ノ所得又ハ資産全體ニ付テ其増大スルヨリハヨリ速ニ稅率ヲ累進スルヲ謂フ。故ニ一個人ノ所有ニ屬スルモノハ、其如何ナル方法ニ依リ又如何ナル財源ニ出ツルヲ問ハス悉ク之ヲ一括シテ以テ課稅ノ目的物ニ充テ、而シテ稅率ノ増進ヲ圖ルハ是レ即チ總體ノ累進ナリ。

第二、個體ノ累進。〔個體ノ累進〕トハ所得又ハ資産全體ニ付テ累進ヲ行ハスシテ、個々別々ノ所得又ハ資産ニ付テ之ヲ行フヲ謂フ。

歷史上ヨリ觀ルトキハ個體ノ累進ハ、所謂總體ノ累進ノ階梯タリキ。累進ヲシテ納稅者ノ擔稅力ニ適應セシメント欲セハ、無論總體ノ累進ニ優ルモノナシ。個體ノ累進ハ決シテ其目的ヲ達シ得ルモノト云ヒ難シ。何トナレハ、納稅者ノ所得又ハ資産ノ一部分ヲ捉ヘテ以テ其擔稅力ノ全體ヲ知ルコト能ハサレハナリ。然レトモ稅源ニモ種々アリ、所得ノ性質ニ確實不確實ノ別アリ。爲ニ擔

稅力ヲ異ニスルヲ以テ、此等ノ異同ヲ參酌スルトキハ、個體ノ累進ト雖モ尙負擔ノ公平ヲ圖ル一手段タルヲ失ハサルナリ。

通常世人ノ累進ト稱スルモノニシテ、實際上累減トナルモノハ外觀的個體ノ累進ナリ、抑外觀的個體ノ累進トハ納稅者ノ實際ニ於ケル擔稅力ノ増加ニ伴ハスシテ單ニ外觀上ノ標準ニ據テ累進スルモノヲ謂フ。例ヘハ借家料ヲ増減スルニ從テ家屋稅率ヲ増減シ、從業者ノ増減スルニ從ヒテ營業稅率ヲ加減スルカ如シ。營業稅ニ在リテハ從業者、例ヘハ丁稚、子僧、番頭又ハ勞働者ノ數ヲ以テ其課稅ノ目的物或ハ標準ニ充ツル場合多ク、大體上此等ノ從業者ノ數多ケレハ其營業ノ規模モ自ラ大ニ、從テ營業ノ收益モ多キカ故ニ、此等ノ事實ヲ以テ課稅ノ標準ニ充ツルハ一理ナキニアラスト雖モ、之唯タ外觀上ノ觀察ノミニ基キタル推定ニシテ實際ハ必スシモ然ルコト能ハス。例ヘハ從業者少ナキモノニシテ却テ利益ノ多キコトアリ。是レニ反シテ、從業者多キモノニシテ却テ利益ノ少ナキコトアリ。是レ單リ營業ノ異ナル場合ニ於テ然ルノミナラ

ス、同種類ノ營業ニ就テモ亦往々之アルヲ見ル若シ此等ノ事實ヲ標準トシテ稅率ヲ増減シ、或ハ累進スルトキハ、到底眞ノ負擔力ニ適ハシムルコトハ望ムヘカラサルナリ。何トナレハ、是レ眞正ノ累進ニアラスシテ單ニ外觀上ノ累進ニ過キサレハナリ。

第三節 累進及累減

凡ソ總體及個體ノ累進中、其孰レニ屬スルヲ問ハス、字義通り累進法ニ據ルモノト、是レニ反シテ形式上寧ロ累減ト稱スルモノトノ二種アリ。茲ニ累減ト稱スルハ、所得等カ一定ノ額ニ達シタル後其累進ヲ停止スルモノヲ謂フ。我國ノ所得稅ノ如キ其一例ナリ。之ニ反シ眞正ノ累進ニアリテハ殆ト際限ナク累進ヲ行フモノトス、而モ前者ノ如ク一定ノ程度ニ達シタル後其累進ヲ停ムルモ、將タ後者ノ如ク際限ナク累進セシムルモ、若シ其結果ニシテ納稅者ノ擔稅力ニ適應セシムルコトヲ得ハ、設令其形式ハ異ナルモ其實ハ二者共ニ累進タ

ルヲ失ハサルナリ。然ルニ此等ノ累進ト全ク反對ノ結果ヲ生スルモノハ、眞ノ累減稅若クハ比例稅ナリトス。抑眞ノ累減トハ、所得等ノ増大スルニ從ヒテ其負擔ノ割合ヲ減少スルノ謂ナリ。所謂比例稅中此種ニ屬スルモノ尠カラズ此意ヲ闡明スル爲暫ク鐵道料金ヲ以テ租稅ト看做シ之ヲ説明セン。凡ソ交通機關ノ收入ハ通常官業ノ利益或ハ利潤ノ如ク認メラルモ、其性質ニ至テハ殆ト租稅ト異ナラス殊ニ國有鐵道ノ制度ヲ布キテ政府力其獨占權ヲ握リタル場合ニ於テハ交通機關ノ收入ハ言フ迄モナク租稅ノ變體ト云フヘク、從ツテ漸次交通機關ノ收入ヲ租稅ト看做スハ必然ノ數ナルカ如シ。暫ク本邦ニ於ケル官設鐵道乘車料ニ就テ之ヲ説明セン。現今鐵道ノ料金制度ニ據ルニ、其乘車賃又ハ運搬料ハ比較的短距離ニ重クシテ長距離ニ輕シ、是レ短距離ノ旅行及運搬ハ容易ナルモ長距離ノ旅行及運搬ハ比較的困難ナルカ故ニ、一方ニ於テハ交通ノ發展ヲ促ス爲又一方ニ於テハ鐵道ノ收入ヲ増加スルノ目的ヲ以テ斯ル制度ヲ立テタルニ外ナラス、斯ノ如キ制度ハ單リ日本ニ限ラス、他國ニ於

テモ官設鐵道タルト將タ私設鐵道タルトヲ問ハス往々見ル所ニシテ殊ニ海運業ニ於テ然リトス。

然レトモ其負擔上ニ及ホス影響ニ就テ之ヲ觀レハ、間々富有者ヲ保護スル結果ヲ生スルニ反シ却テ貧困者ニ酷ナル傾向アルヲ免レス、何トナレハ長距離ノ旅行ヲ企ツル者ハ富有者ニ多クシテ貧者ニ少ナク、長距離ニ多量ノ貨物ノ運搬ヲ企ツル者ハ富有者又ハ大商工業者ニ多クシテ貧者又ハ小商工業者等ニ少ナキカ故ナリ。果シテ然リトセハ此等ノ制度ハ眞ノ累減ト謂ハサルヲ得サルヘシ。

第四節 累進稅ニ對スル批難

以上述ヘタル所ニ由リテ觀レハ、租稅ノ累進ハ負擔ノ公平ヲ期スルカ爲ニ缺クヘカラサル手段ナリト雖モ、之ヲ批難スル者亦之ナキニアラス、今其重ナル理由ヲ擧クレハ左ノ如シ。

一、累進ノ極終ニハ納税者ノ所得又ハ資産ノ全部ヲ沒收シ盡スモ尙足ラサルニ至ラン、是レ佛蘭士ノ有名ナル財政學者るろあ、ぼーり、カ累進税非難ノ主要ノ理由トナス所ナリ。然レトモ我輩ノ所謂累進トハ唯タ大所得大資産ヲ税スルニ比較的の重率ヲ以テスヘシト云フニ過キスシテ、際限ナク税率ヲ累進セシメ、以テ納税者ノ資産又ハ所得ノ全部ヲ沒收シ盡スヘシトノ謂ニアラス會テ英吉利ニ於テ始テ所得税ヲ行ヒタルトキ、殆ト之ト同一ノ批難アリキ所得税ニシテ尙然リ、況ンヤ其他ノ租税ニ於テヲヤ之ニ累進法ヲ適用スルニ當リ、大聲以テ同一ノ批難ヲ繰返ヘス者多キハ怪ムニ足ラスるろあ、ぼーり、ハ曰ク、倍加級數ノ法ニ依リ、税率ヲ累進スルニ當リ、試ミニ其最低率ヲ千分ノ一トスルトキハ次ニハ千分ノ二トナルヘク、次ニハ千分ノ四、其次ニハ千分ノ十六トナリ、次ニハ千分ノ二百五十六、即チ二割五分六厘ノ重税トナルヘシ、千分ノ一ヨリ五度累進シテ千分ノ二百五十六トナルトセハ、六度目ニ同一ノ方法ニ依リテ以テ加重スルトキハ千分ノ六萬五千五百三十六トナリ非常ナル

高率ニ達シ、總テノ所得又ハ財産ヲ沒收シ盡スモ尙不足ヲ訴フルニ至ルヘシト。然レトモ予輩ノ累進ト云フハ之ニ異リ、固トヨリ際限ナク累進セシムル必要何處ニカアル、累進ノ理想ハ唯擔税力ノ増スニ從テ之ニ相應スル步調ヲ以テ税率ヲ増サント云フノミ、豈數理的ニ無限ニ税率ヲ増加スヘシト云フノ意味ナランヤ、數理的ニ税率ヲ増スハ眞ニ擔税力ニ順應セシムル所以ニアラスシテ、却テ外觀的形式ニ終ラシムルモノナリ。

二、以上ノ理由ニ依リ若シ全資産ヲ沒收シ盡ササル憂ナカラシメントセハ極メテ其最低率ヲ低クシ、且累進ノ度合ヲ緩ナラシメサルヘカラス、其結果一國內ニ於テ通常最モ多數ヲ占ムル所得者若クハ所得財産ヲ税スルコト輕キニ過キ、却テ歳入ヲ減少スルノ憂アリ、茲ニ於テ乎勢ヒ累進税ヲ行ハサルニ若カストハ、是レ第二ノ批難ナリ、念フニ我國ニ於ケル納税者ノ數及、課税口數ヨリ言ヘハ、三百圓ヨリ五百圓マテヲ最多トシ、課税額ヨリ言ヘハ五百圓ヨリ千圓マテヲ最多トスルコト左表ノ如シ、大正二年法律第百十三號ヲ以テ最低

減課税額ヲ昂メ所得額千圓以下四百圓以上ヲ以テ最低級トナシタルカ故ニ如上ノ關係ヲ明カニスルコト能ハサルカ故ニ同表ハ改正前否改惡前明治四十二年度ノ始ニ於ケル決定額ニ依ルサレハ累進ノ目的タル收入ヲ増加スルニアルニ拘ラス、却テ之ヲ減スルカ如クンハ寧ロ之ヲ行ハサルニ若カストノ意ナラン、然レトモ此批難タルヤ既ニ第一ノ批難ニシテ不當ナリトセハ、毫モ憂フルニ足ラサルナリ。

第三種所得	人	員	所得金額	税額
三百圓以上	六六五	二七九	一九六 五七七 七九五 九八〇	三九一〇〇 五五八四〇
五百圓以上	三六八	四〇四	一七九〇〇 八七五 六四三〇	四五〇 六八七 五四七〇
千圓以上	一一八	一三九	一一九五〇〇 三三四 四四〇	四一一 四六九 四八〇
二千圓以上	三三三	三六四	五三 七八六 三七四 二三〇	二一〇 二五七 〇四七〇
三千圓以上	二二一	三一	五一 八六五 五八二 七二〇	二三八 五 六八四 八一〇
五千圓以上	一〇	六四三	四三 六〇五 六二一 九三〇	二六一 六 二二三 〇九〇
一萬圓以上	二五	一二	一七〇 七六四 九一一〇	一二八 〇 七二三 〇〇〇
一萬五千圓以上	八五	七	八五八 七四九 六五二〇	八一 一五〇 八四八〇

二萬圓以上	五一	二	七四五 五七九 二二七〇	八六四 八六八 五五〇
三萬圓以上	三一	七	六七二 四二七 〇四七〇	九三八 〇三一 七七〇
五萬圓以上	九	六	三九八 三七五 八〇〇〇	六七七 二三八 五二〇
十萬圓以上	三	三	二五五 〇一一 二八一〇	五一八 九四七 四三〇

抑累進トハ、強チ倍加級數或ハ等差級數ノ理ニ從ヒテ其稅率ヲ増進スルノ謂ニアラス、唯タ大資本若クハ大所得ヲ稅スルニ當リ、納稅者ノ擔稅力ニ應セシメンカ爲比較的高率ヲ以テスヘシト云フニ外ナラス。故ニ之ヲ施行スルニ方ツテヤ、其稅率ヲシテ或ル一定ノ稅度ニ停ラシムルモ可ナリ。況ンヤ累減ト雖モ已ニ述ヘタル如ク形式上ノ累減ハ一種ノ累進ニ外ナラサルヲ以テ、其餘ハ推シテ知ルヘシ。

三、第三ノ非難ハ、累進稅上稅率竝ニ之ヲ課スヘキ所得又ハ資産ノ階級ヲ定ムルニ當リテ、公平ナル標準ヲ見出シ難シ、換言スレハ何ヲ標準トシテ階級ヲ設ケ、又何ヲ標準トシテ稅率ヲ増加スヘキカト云フニ在リ。此非難タルヤ、累

進税ニ對スル批難中、最モ有力ナルモノトス。何トナレハ税率及所得ノ階級ハ立法者ノ判斷竝ニ道義心ニ據ルノ外、別段ノ標準ナケレハナリ。然レトモ我輩ノ信スル所ニヨレハ、此等ノ問題ハ實際上且ハ政略上ノ問題ニシテ、必スシモ機械的標準ニ據ルノ必要ナシ。所謂立法若クハ行政ナルモノハ大抵皆此如シ。例ヘハ我國ノ改正前ノ所得税法ハ何故ニ三百圓ヨリ五百圓マテノ所得ヲ以テ第一階級トナスカ、何故ニ五百圓ヨリ千圓マテヲ第二階級トナセシカト云フニ其ハ、別ニ具體的ノ標準アルニアラス、唯之ヲ以テ適當ナリトセル立法者ノ判斷ニ基クニ過キササルナリ。又現行所得税法ハ千圓以下ノ所得ヲ第一階級トシ千圓以上二千圓以下ノ所得ヲ以テ第二階級ト定メシヤト云フ是レ亦確タル標準アルニアラスシテ立法者ノ適當ト認メシ判斷ニ基クノミ此事タルヤ、假リニ累犯税ノ反對タル比例税ニ就テ見ルモ亦同シ。何トナレハ比例税ト雖モ其税率ハ所得或ハ財産ノ幾分タルコトヲ定メサルヘカラスシテ、是レ亦一定ノ標準アルニアラスシテ立法者ノ判斷ニ據ルノ外ナケレハナリ。

四、累進税ハ政權ヲ掌握セル階級ノ人民ヲシテ他ノ階級ヲ虐クル手段タラシムル虞アリ。嘗テ和蘭ノ進歩黨カ政權ヲ握リシニ方リ、極端ノ累進税ヲ行ヒタル結果人民ハ其弊ニ耐ヘスシテ、再ヒ舊時ノ制度ニ復歸センコトヲ欲スルニ至レリ。此弊タル社會ノ階級的衝突ノ甚シキ時代ニ於テ殊ニ危險トス。然レトモ是レ亦實行上ノ問題ニシテ、社會ノ制度文物ハ一トシテ殆ト其弊ノ伴ハサルモノナシ。美果ヲ收ムルト收メサルトハ、制度其物ニ由ルコトアラシモ、又實行ノ方法如何ニ因ルコト多シトス。累進税ニ於テモ亦然リ。累進税ハ一ノ利器ナリ。故ニ其能ク效果ヲ收メ得ルト否トハ主トシテ當局者及立法者其人ニ關スルヤ甚タ大ナリ。從テ左ノ如キ場合ニ於テハ寧ロ實行上ノ危險少ナキ比例税ノ優レルニ如カスト言フ者アリ、即チ

(イ) 租税ノ負擔未タ甚シカラスシテ、國民ニ尙負擔ノ餘力ヲ存スルトキ。

(ロ) 貧富ノ懸隔、未タ甚シカラサルトキ。

(ハ) 所謂間税ノ負擔、左マテ重カラスシテ、貧者ニ偏重ナラサルトキ。

是レナリ。

既ニ述ヘタリシ如ク、歐羅巴ノ西部諸國ニ於テハ十九世紀ノ中葉ニ至ル迄租税ハ寧ロ貧者ニ偏重シ、然モ其多クハ間接税ナリキ、當時政府カ主トシテ間接税ヲ採用シタル所以ハ、其政權ヲ握リ又ハ政府ノ局ニ當リタル者ハ、多クハ財產家ナリシカ故ナリ、直税ハ彼等ノ財產ヲ税スルコト直接ナルヲ以テ成ルヘク之ヲ避ケ、自己ニ多クノ痛痒ナキ間接税ヲ加重スルニ務メタルハ怪ムニ足ラス、是レ實ニ數百年來ノ立法ノ趨向ニシテ、彼ノ佛蘭士ノ數次ノ革命或ハ獨逸ノ千八百五十年頃ニ於ケル革命的騷擾ハ、貧困者ノ負擔ノ偏重ニ原因シタル場合多カリキ、此等ノ變動ヲ經タル後、累進税說起リ次テ之ヲ實行スルノ機運ニ向ヘリ、是レヲ以テ所得税及其他ノ財產税ハ千八百七十年以後ニ於テ漸次増加シ、最近ニ傳フル所ニヨレハ佛蘭士ニ於テモ漸ク所得税ヲ實施セントスル機運ニ向ヘルモノノ如シ。

第五節 累進税ノ實行方法

累進税カ學理上批難スヘキモノニアラスシテ、寧ロ實行ノ必要アルハ現ニ歐洲諸國ノ政府ノ認ムル所ナリ、然レトモ之カ實行ノ方法ニ付テハ、國ニ依リテ自ラ輕重難易ノ別アリ、例ヘハ中等社會ニ屬スル財產家カ政權ヲ掌握スル佛國等ニ於テハ、今尙完全ナル所得税法ヲ採用スルコト能ハサルカ如ク、又富ノ集積未タ起ラサル我國等ニ於テハ縱令之ヲ行フモ左マテノ結果ヲ收ムルコト能ハサルカ如シ、加之其國ニ於ケル租税制度ノ如何ハ亦累進税ノ實行ニ關シテ自ラ輕重難易ノ別ヲ生スルモノアリ、例ヘハ一般所得税又ハ一般資産税ノ如ク一個人ノ所有財產ノ總テヲ一纏ニシテ課税スル場合ニ在リテハ累進法ヲ行フコト容易ナレトモ、之ニ反シテ未タ其設ケナク、縱令是レアリトスルモ、單ニ外觀的累進税ノ存スル國ニ於テハ、累進ノ目的ヲ達スルコト洵ニ困難ナリ、殊ニ間税竝ニ地租家屋税等ニ就テハ眞ノ累進税ヲ行フコト容易ニ非

ス。何トナレハ、間税ノ如キハ納税者ノ擔稅力ヲ察知スルコト全然不可能ニシテ、彼ノ間税中ノ主タル消費稅例ヘハ煙草、醬油、砂糖ノ如キ皆納税者ノ擔稅力ニ應シテ、其消費高ノ定マルモノニアス。寧ロ擔稅力ノ少ナキ者ニシテ却テ多ク消費スル場合アリ、單ニ消費額ノ多少ニ準據シテ累進ヲ行フコト能ハサルナリ、況ンヤ設令擔稅力ニ應シテ消費スルトスルモ消費ノ總額ヲ統計スルコト殆ト不可能ナルニ於テヲヤ

累進ノ方法ニ、大要二種アリ。

第一、所得ノ階級ヲ設ケ、其階級ニ從テ稅率ノ等差ヲ設ケ、以テ所得ノ増大スルニ從ヒ負擔ヲ加重スルノ方法。例ヘハ我國ノ所得稅ノ如キ不完全ナカラモ此方法ヲ採レリ。

第二、直接ニ稅率累進ノ方法ヲ採ラス、間接ニ負擔ノ累進ヲ行フ方法、例ヘハ從來英國ノ所得稅ノ如ク、其稅率ハ所得ノ多少ニ拘ハラズ皆之ヲ一様ニスルモ、最低ノ所得金額タル百五十磅ヨリ四百磅ニ至ルマテハ百二十磅ヲ引去

リテ、以テ其殘額ヲ稅セシカ如シ。近來此控除額ハ年々移動シテ一定シ居ラサルノミナラス、最低課稅額モ又百六十磅トナレリ。又千九百七年度ニハ財政法(Finance Act)第十九條ニ依リ千磅以下ノ所得者ニシテ其所得カ勤勞所得("earned income")ナルトキハ特ニ稅率ヲ低クセリ。

其他間接ニ累進ヲ圖ル方法種々アレトモ、最モ容易ニシテ且危險ノ少ナキハ直接ノ累進法ナリ。英國ノ所得稅法ハ其全部ニアラサルモ、其一部分ニ就テハ累進ノ精神ヲ參酌ス。前述セシ如ク嘗テ同國ノ所得稅ハ百五十磅ヨリ四百磅マテハ百二十磅ヲ控除セシヲ以テ、百五十磅ノ所得稅ニ對スル課稅金額ハ三十磅ノミニシテ殘餘ノ百二十磅ハ課稅ヲ免レシナリ。加之所得一磅ニ付キ稅率ヲ假リニ八片トスレハ三十磅ニ對シ二百四十片即チ一磅ノ稅ヲ負フノミ、然ルニ若シ百二十磅ヲ控除セス、百五十磅全體ニ對シテ課稅スルコトトセ、ハ五磅ノ所得稅ヲ負ハサルヲ得サルヘシ。畢竟小所得ハ擔稅力少ナシトノ前提ニ基テ、百五十磅ノ所得者ニ對シテハ三十磅タケヲ稅シ、從テ四百磅ノ所得

者ニ對シテハ二百八十磅丈ヲ稅スルナリ。故ニ不完全ナカラモ擔稅力ノ少ナキ者ニ對シ比較的負擔ヲ減少スルノ精神ヲ參酌セシヲ見ルヘシ。此等ノ點ニ就テ考フルトキハ、我國ノ制度ハ尙多少研究スヘキ餘地アルカ如シ。即チ四百圓ノ所得ヲ有スルモノハ直チニ課稅セラレルモ、三百九十九圓九十九錢マテハ課稅セラレサルヲ以テ、其結果四百圓ノ所得ニ對シ、千分ノ十ヲ課セラレ、四圓ノ稅ヲ納ムルトキハ差引三百九十六圓ノ所得ト爲ルヘク、彼レハ後者ニ比シテ却テ其所得少キコトトナルヘシ。若シ此非難ナカラシメントセハ、英國ノ如ク小額ノ所得ニ對シテハ其幾分ヲ控除シテ以テ之ヲ稅スルノ方法ヲ採ルニ若クハナシ。

第六節 超過累進率

近來累進方法ノ一種トシテ超過累進率ヲ唱フルモノアリ、我所得稅法ハ之ヲ採用ス。舊所得稅率ハ所得額別ノ前階級ト後階級トノ間ニ於テ唯其一階級

ヲ異ニスルノ理由ニ由リ、大ニ負擔ノ割合ヲ異ニシ惹イテ不公平ヲ生スルコトナシトセス、例ヘハ九百九十九圓ノ所得者ノ稅金ハ十一圓九十九錢ナルニ一千圓ノ所得者ノ稅金ハ十五圓ニシテ、所得金一圓ヲ少キカ故ニ三圓餘多カノ稅金ヲ負擔セサルヘカラス、故ニ納稅者ハ成ルヘク低額ノ階級ニ留マランコトヲ力メ、所得ノ申告額ヲ詐リ脫稅ヲ謀ルノ弊アリ。而シテ此不公平ハ累進ノ差率高キニ從テ益々大トナル、是レニ於テカ超過累進率採用ノ議起ル、抑超過累進率トハ、後階級ノ前階級ニ超過シタル所得ノ部分ニ對シテノミ累進率ヲ適用スルモノナルヲ以テ、前例ノ如キ不公平ヲ生スルコトナク從テ之ニ伴フ弊害ノ減少スルノ利アリ、殊ニ超過累進率ハ限界效用說ニ適合スルモノニシテ學說及實際ニ適セル制度ナリトス。

現行相續稅ハ又超過累進率ヲ採用セリ其第八條ニ曰ク相續稅ハ課稅價格ヲ左ノ各級ニ區分シ其各部分ニ對シ相續人ノ種類ニ從ヒ遞次ニ各稅率ヲ適用シテ之ヲ課スト、例ヘハ家督相續ノ場合ニ於テ相續人カ被相續人ノ家族タ

ル直系卑屬ナルトキ五千圓以下ノ金額ニ對シテハ千分ノ十ヲ課シ五千圓ヲ超ユル金額ハ千分ノ十二、一萬圓ヲ超ユル金額ハ千分ノ十四ヲ課シ遞次増課シテ百萬圓ニ至テ止マルカ如シ、故ニ此場合ニ於テハ一萬圓以下ノ財産ヲ相續スル者ハ最初ノ五千圓ニ對シテ其千分ノ十即チ五十圓ヲ負ヒ次ノ五千圓ニ對シテ千分ノ十二即チ六十圓ヲ擔ヒ前後合計シテ百十圓ノ相續稅ヲ課セラルルノ理ナリ。

第二十章 租稅負擔ノ歸着點ニ就テ

第一節 稅源ト負擔

租稅ノ負擔ハ要スルニ客觀的ニハ稅源、主觀的ニハ稅源ノ所有者ニ歸スヘキモノニシテ、若シモ然ラサランニハ設令納稅者ニセヨ將タ擔稅者ニセヨ到底長ク之ニ堪フル能ハス、惹イテ經濟上ノ弊害ヲ來スノミナラス、終ニハ國民ノ精神道德ヲ害フコト稀ナラサルナリ、勢ヒ茲ニ至レハ法律又ハ立法者ノ期待スル所ト課稅ノ結果トハ相齟齬シテ政府人民兩ナカラ其弊ヲ受ケサル能ハス試ミニ之ヲ例說センニハ、營業稅ノ客體ハ賣上金額、建物賃賃價格、資本金額、從業者、收入金額、請負金額、報償金額等ナリト雖モ、是レ固ヨリ稅源ニアラス換言スレハ、納稅者ニシテ且ハ擔稅者タルヘキ營業者ハ是等ノ物ノ一部ヲ割イテ、以テ納稅ノ料ニ宛テ、而シテ永ク之ヲ缺クヘキニアラス、彼等ハ寧ロ其營業ノ利益ノ一部ヲ割イテ以テ納稅スルヲ常トス、何トナレハ、營業稅ノ稅源ハ

租稅負擔ノ歸着點ニ就テ 稅源ト負擔

營業ノ利益ニシテ、通常其客體ト同一物ニアラサルヲ以テナリ云フ迄モナク、客體ハ單ニ課税ノ目的物又ハ標準ニ止ルヲ以テ、設令税源ト直接間接ノ關係アリトスルモ同一物ニアラサルコト勿論ナリ。客體ハ租税ノ多少ヲ計ル標準タルヲ得、ヘシト雖モ而モ直チニ税源ノ伏在スル所ニアラス、故ニ租税ニシテ税源ニ由リテ仕拂ヒ若クハ負擔セラレサランカ、到底永續スルコト能ハス之ヲ小ニシテハ、納税者及擔税者ハ幾許モナク其產ヲ破リ、之ヲ大ニシテハ、國民ノ經濟ヲ傷ヒ國力衰頽シテ產業亦衰敗スルヤ鏡ニ掛ケテ看ルカ如シ。而シテ茲ニ至ラサル迄モ其茲ニ至ル徵候トシテハ先ツ税法違反者ヲ生スヘク、次ニ租税滯納者ヲ生スヘク、之ニ次テ公賣處分倒産者放浪者等見ルニ就ケテモ面白カラサル現象ヲ生シ來ルナリ。

是レヲ以テ租税ニシテ立法者又ハ租税法ノ期待スルカ如ク税源ヲ捕打スルコト能ハス其レ以外ノ結果ヲ生スルコトアラシク、當局者ハ法律ノ精神ニ反シ曲ケテ法律ヲ施行スト云フモ肯テ不可ナルコトナカラシク、斯ノ如キ

言ハ元ヨリ過キタリト雖モ、若シモ此點ニ留意スルコトナクンハ、予輩ハ其茲ニ至ラシムルナキヤヲ保スル能ハサルナリ。

第二節 負擔ノ逋脱

縱令納税ハ國民ノ一大義務ナリトハ云ヒナカラ、常人ハ自己ノ利益ヲ貴フノ結果知ラス識ラス之ヲ免レンコトヲ謀ルモノナリ、之ヲ免レントシテ努力スル處ノ行爲ハ大抵二個ノ目的ニ向ツテ傾注セラルルヲ常トス、一ハ即チ納税セサラントスルノ計謀ニシテ、一ハ之ニ反シテ租税ノ負擔ヲ免レ若クハ成ル丈輕減セントスルノ努力是レナリ、二者ハ似テ非ニシテ必スシモ一ナラス其目的モ亦同シカラサルヲ以テ結果及制裁ニ至リテモ自ラ異ナルナリ。

納税者カ法律ノ定ムル處ニ從ヒ納税スヘキハ云フヲ俟タスト雖モ或ハ無意識ニ之ヲ怠ルアリ、或ハ故ラニ之ヲ慢ルコト稀ナラス、無意識ニ納税ヲ避ケ若クハ之ヲ怠ルヲ逋税ト云ヒ故意ニ之ヲ免ルルヲ脱税ト云フ前者ハ猶恕ス

ヘシト雖モ意アリテ之ヲ回避シ或ハ欺慢スルニ至テハ秋霜ノ制裁ヲ加フルモ不可ナルコトナシ。畢竟スルニ後者ハ違法ノ行爲ニ由リ國庫ニ蒙ラシムルニ損害ヲ以テスルノミナテス。到底其自ラ負擔スヘキ租稅ヲ脱レテ以テ同胞國民ニ嫁セスンハ止マサルヘシ。其人ノ惡ヲ加減ニ至リテハ論外ナリ。尤モ所謂直接稅ト間接稅トニ依リテ其關係ヲ異ニス。

直接稅ノ納稅者ニシテ其須ラク納付スヘキ租稅ヲ納メスシテ其負擔ヲ免ルル者アランカ其罪過ハ脫稅ニ止ルヘキモ之ニ反シテ間接稅ノ納稅者ニシテ如上ノ所業ヲ敢テシタリトセンカ管ニ脫稅ノ罪ヲ犯スノミナラス云ハハ富ノ分配上國民ノ所得中ヨリシテ其當サニ得テハナラヌ所ノ分ケ前ヲ詐取スル結果ヲ生セン何トナレハ豫メ納稅スヘキ物ヲ納稅セスシテ他日擔稅者ヨリ取り返ヘスノ理ナレハナリ。

以上ハ實際上ニ於ケル負擔ノ逋脫問題タルト同時ニ又國民道德上ノ問題ナリ若シ夫レ法律上ノ脫稅問題トシテハ其間ニ輕重アルコトナシ戒ムヘキ

ハ私利私曲ノ慾念ナリト雖モ稅制ニシテ其宜シキヲ失ヒ負擔ニシテ其歸着ヲ誤ルコトアランカ誠ニ免ルヘカラサルハ歎スヘキノ至リナリ國民道德ノ改善ト稅制ノ改良トハ何レノ國何レノ世ニ於テモ切要ナルヲ見ル。

第三節 租稅ノ轉嫁ノ大要

納稅者ニセヨ將タ納稅者兼擔稅者ニセヨ其一度納付セシ租稅ヲ轉シテ他ニ嫁セントスルハスヘテノ人ノ常情ニシテ學理上實際上等シク世人ノ認ムル所ナリ是レ所謂租稅ノ轉嫁ナルモノニシテ彼ノ租稅ノ逋脫ノ如ク法律ノ禁スル所ニアラサルノミナラス却テ之ヲ前提スルコトアリ又縱令法律ヲ以テ之ヲ禁セントスルモ到底能クシ得ヘキニアラス凡ソ租稅法律ヲ以テ規定シ得ヘキハ納稅者客體及課稅ノ目的物又ハ標準ニ過キスシテ稅源及擔稅者ニ至テハ政府國家ハ唯之ヲ期待シ得ルニ止マリ而モ其期待スル所ヲシテ實際ニ實現セシムル能力ナシ何トナレハ夫ノ納稅者カ果シテ擔稅者トナルヤ

將タ否ラスシテ納税者ヲ以テ終ルヤノ事實ハ課税後ニ生スル經濟界ノ出來事ニ由リテ決定スルヲ以テナリ國家ハ此間ニ干涉シテ當サニ斯ノ如クナルヘシ、又斯ノ如クナスヘシト強制スルコト能ハサルナリ、畢竟ハ經濟界ニ於ケル(自然ノ)成リ行キニ放任スルノ外ナシ、所謂經濟界ノ出來事トハ其種類性質極メテ複雑ナリト雖モ、要スルニ納税者カ其一度納付セシ租税ヲ轉シテ擔税者ニ嫁スルニハ交換取引ノ機會ヲ利用スルノ外ナシ、其重ナルハ賣買、貸貸、賃借、關係雇傭契約等ノ形式ヲ遵由シテ以テ、轉嫁ノ事實ハ物價ノ高低、貸貸價格、利子歩合、勞銀等ノ上ニ現ハレ來ル、略言スレハ、租税ノ轉嫁シタルトキハ則チ其轉嫁シタル丈ケソレ丈ケ課税物品ノ價格、貸貸料、利子、勞銀等ヲシテ騰貴セシムルノ結果ヲ生スヘシ。

以上ノ出來事タルヤ皆其國ニ於ケル經濟組織ノ爲ニ影響セラルルコト極テ大ナリ、其組織ノ異同ニ由リ、假令同一租税ト雖モ、猶轉嫁ノ有無程度等ヲ異ニスル場合アリ、極言スレハ、轉嫁ハ經濟組織ノ結果ナリト云フモ大過ナカラ

ントス、サレハ直接税及間接税說ノ如キモ畢竟ハ同一ノ理由ニ根柢スルヲ見ル。

予輩ヲ以テ之ヲ見ルニ、夫ノ所謂自給ノ經濟組織ニアリテハ如何ナル租税タルヲ問ハス、皆悉ク直接税タルヘク亦タラサルヘカラサルナリ、是レ自給自足ノ經濟組織ニアリテハ如何ニシテモ租税ヲ轉嫁セシムヘキ機會及經路ヲ缺クニ由ル、試ミニ思ヘ、自ラ織リテ衣シ、自ラ耕ヤシテ食シ、自ラ造リテ住スルノ時ニ當リ吾人ハ其嘗テ納税セシ租税ヲハ如何ニシテ之ヲ他人ニ轉嫁スヘキカラ、彼ノ個人經濟ノミ成立シ、而シテ國民經濟未タ成ラスシテ個人經濟ノ間ヲ連絡スル手段設備ヲ缺クトセハ是レ賣買取引ナキナリ、物價、貸貸料、利子、勞銀成立セサルナリ、從テ全然租税ノ轉嫁スル機會ナキナリ、故ニ轉嫁ハ自給自足ノ經濟組織漸ク轉變シテ交換組織トナリ、次テ分業組織及資本本位組織トナルニ及次第ニ發生スル經濟現象ト云フヘキナリ。

是レヲ以テ分業愈々發達シ、個人ノ職業ニシテ愈益分化スルトキハ各個人

經濟ハ兎テモ獨力ヲ以テ成存スルコト能ハサルニ至ル、詳言スレハ各個人經濟ハ相提携維持シテ以テ其間ニ於ケル交換取引ノ關係ハ宛然織物機械ニ於ケル梭ノ往來スルニ彷彿タラントス。彼等ハ一時一刻ノ短キモ尙獨存スルコト能ハス或ハ相交換シ、或ハ賣買シ、或ハ契約シ、或ハ相續贈與シテ暫クモ止ム時ナシ是レニ於テ乎、納稅者カ一旦納付シタル納稅ハ晚カレ早カレ何時カハ他ニ轉嫁スル機會又ハ方法ヲ見出スニ至ラン、又納稅者ハ己レノ利益ヲ増進センカ爲一意其負擔ヲ他人ノ肩ニ移サンコトヲ勗ムルハ怪ムニ足ラス、果シテ然リトセハ、大抵ノ納稅ハ皆轉嫁ノ機會ニ逢着スヘク若シ此機會ニ逢着スルトセハ何レモ皆轉嫁シ得ヘキ筈ナリ、サレハ現時ノ經濟界ハ各人カ納稅ノ負擔ヲ轉嫁セントスル修羅場タル傾向ナキニアラス、唯其之ヲ轉嫁シ得ルト得サルトハ要スルニ經濟力ノ強弱ノ問題トナル。

第四節 轉嫁ノ效用

人或ハ納稅ノ轉嫁ヲ以テ喜フヘキ現象ト考ヘ、轉嫁ハ負擔ヲ公平ニスル自然ノ方法ナリト云フ者アリト雖モ必スシモ然ラス、時トシテ轉嫁ノ爲公平ニ負擔者ノ間ニ分配セララルコトアルニ反シ、時トシテハ却テ不公平ニ陥イムコトモ又是レアリ、負擔ノ轉否ハ要スルニ時ト場合ト處トニ由リテ變易スルヲ免レス、尤モ納稅ニ依リテ一様ナラサルハ云フヲ待タスシテ、彼ノ轉嫁ノ機會ニ逢着セサル納稅ニ至リテハ、假令如何ナル經濟組織ノ國ニ在リト雖モ到底轉嫁スル能ハサルナリ。故ニ談必スシモ斯ノ如ク容易ナランヤ、但納稅ハ其之ヲ行フコト久シケレハ、漸ク人心ニ浸潤スルノ結果比較的良稅タルノ感ヲ起スコトアリ、佛人カナールカ舊稅ハ皆良稅ナリト言ヘリシハ此意ニ外ナラス。

納稅ノ轉嫁スル經過ハ極メテ複雑ナリト雖モ、大要左ノ四種トス。

第五節 轉嫁ノ種類

一、配轉 配轉トハ、納稅者カ生産方法等ノ改良ニ由リ、課稅前ニ比シ生産費ヲ減少シ若クハ同一ノ生産費又ハ原料ヲ以テヨリ多量ノ生産ヲ成シ得ルカ爲其賦課セラレタル租稅ヲハ從來ノ豫期セラレタルヨリハヨリ多クカ然ラサレハ生産費減退セル生産物即チ租稅ノ目的物ニ割リ當ツル場合ヲ指ス從テ納稅者ハ設令自ラ之ヲ負擔スルモ左迄ノ痛痒ヲ感セサルニ至ルヘシ、是レヲ以テ租稅ノ配轉ハ生産及其他ノ改良ニ由リテ新ニ租稅ニ充ツヘキ所得若クハ富ヲ造リ出シタリト云フニ同シ、是レ故_ろ一_{れん}つ_ふん_した_いん_カ嘗_テ租稅ノ轉嫁ヲ稱シテ租稅ノ生産ト云ヒシ所以ナリ、然レトモアラユル轉嫁ハ常ニ配轉ナリト云フヲ得ス、したいんノ如ク轉嫁ヲ以テ租稅ノ生産ト同一視スルハ誤レリ。

念フニ此等ノ現象ハ租稅ノ負擔重キニ際シ、納稅者カ己レノ利益ヲ減少セサランカ爲銳意事業ノ改良進歩ヲ企ツル場合ニ於テ屢々見ル所ナリ例ヘハ大陸戰爭後ニ於ケル英國ノ火酒稅及現今獨逸ノ砂糖稅等ノ如シ、其製造者ハ

租稅ノ負擔重キカ爲製造方法ヲ改良シ、同額ノ租稅ヲ課セラルル原料品若クハ機械等ヲ以テ從前ニ比シヨリ多クノ精製品ヲ產出シ、以テ其負擔ヲ輕クセシコトヲ謀レリ。

二、前轉 租稅ノ前轉トハ、法律又ハ當局者ノ豫期スル如ク一旦納稅者ノ納付セシ租稅ヲハ他日轉嫁ノ機會ヲ捕ヘテ以テ之ヲ他ニ移ス經過ヲ云フ、是レ世人ノ通常謂フ所ノ轉嫁ナルモノニシテ從來學者ノ説ク所ハ大抵茲ニ止マリ、若シモ此種ノ轉嫁ニシテ起ラサルトキハ、設令他ノ種類ノ轉嫁アルモンハ單ニ轉嫁ナシト想定スル者多シ、若シ夫レ法律又ハ當局者ノ期待スル如ク租稅ニシテ常ニ轉嫁ストセハ、決シテ不都合ナル結果ヲ生セサルヘシ何トナレハ是レ豫定ノ行徑ナレハナリ。

租稅負擔ノ前轉ハ當ニ租稅ニ由リテ多少及難易ノ別アルノミナラス、時ト處ト場合トニ由リテ異ナラサルヲ得ス、而シテ其最モ容易ニ行ハルルハ課稅ニ際シ企業者資本家等カ直チニ生産ヲ制限シ得ル場合ニシテ、次ニハ彼等ノ

間ニ於ケル協議ニ依リテ生産及供給ノ方法ヲシテ一樣ナラシメ得ヘキ場合ニ多シ終リニハ課稅物品カ雷ニ生活ノ必要品タルノミナラス亦代用品ノ存セサル場合等ナリトス。

之ヲ要スルニ生産者即チ供給者ニシテ需用者又ハ消費者ニ比シテ經濟的關係上便利ナル地位ニアランカ前者ハ容易ニ其一度納付セシ租稅ヲ轉シテ後者ニ移スコトヲ得ンカナ。

三、後轉 後轉トハ、一ニ之ヲ逆轉ト云ヒ、法律又ハ當局者ノ豫期ニ反シ、納稅者ハ其會テ納付セシ租稅ヲ轉嫁スルコト能ハスシテ自ラ終局ノ擔稅者トナル經濟上ノ經過ヲ云フ、念フニ租稅ニシテ前轉セス納稅者カ直チニ擔稅者トナルヤ、元ト是レ轉嫁ナキナリ、然レトモ之ニ名クルニ後轉ノ名稱ヲ以テスル所以ハ他ナシ、立法者ハ豫メ前轉ヲ前提スルヲ以テ其之ナキハ一旦轉嫁セシモノカ復ヒ戻リ來リタルト同一視スルカ故ナリ、況ンヤ、實際ニ於テハ縱令一旦前轉シタル租稅ト雖モ他日再ヒ納稅者ノ負擔ニ歸スルコト之アルニ於テ

ヲヤ、所謂租稅ノ還元ノ如キ其二例ナラサランヤ。

四、複轉 租稅ノ轉嫁ハ大要以上ノ三種ニ外ナラスト雖モ、而モ實際ニ於テハ三者共單獨ニ現ハレスシテ相混行スル例少カラス、之ニ加フルニ、其一度轉嫁シタル後更ニ復ヒ轉嫁ノ作用ヲ惹起スルコトアリ、此複雑ナル轉嫁ヲ稱シテ租稅ノ複轉ト云フ。

第六節 轉嫁ノ結果

既ニ述ヘタル如ク、租稅ノ前轉ハ表ハレテ物價ノ騰貴トナリ、利子賃貸料勞銀ノ高騰トナルト雖モ、サラハ如何ナル程度ニ於テ其結果ヲ表顯スルヤハ誠ニ複雑ナル問題ニシテ、統計的計數ヲ以テ容易ニ之ヲ確ムルコト能ハサルヘシ、租稅ノ爲物價ノ騰貴スト云フハ取モ直サス租稅カ課稅物品ノ生産費トナルト云フニ同シ、生産費ノ増加ハ勢ヒ物價ヲ高ムル趨勢アルカ如ク租稅ノ加重ハ亦物價ヲシテ貴カラシムル趨向アルハ明カナリ、現ニ日露戰役後我國ノ

物價ノ著シク騰貴シタルハ増税モ亦其一原因タリシコト争フヘカラサルノ事實ナリ。然リト雖モ現今ノ經濟界ニ於テ生産費ハ必スシモ物價ノ高低ヲ決定スル能ハサルカ如ク租税モ又物價騰貴ノ必然的原因ニアラス。換言スレハ前轉セル租税ハ直チニ其レ丈ケ物價ヲ高ムルトモ限ラサルナリ。蓋シ或ハ之ヲ高ムルコトモアラン、サリナカラ時トシテハ亦之ナキコトアルヲ免レス、何トナレハ縱令租税ニシテ前轉セルモ、若シ其場合ニ於ケル物價ニシテ恰モ下落ノ刹那ニ際センカ、租税ハ物價ヲ高メサルモ猶能ク其下落ヲ止ムル作用ヲ爲スヘケレハナリ。

○今ヤ我國ハ戰後ノ餘響ヲ受ケ、苛稅收斂ノ聲漸ク市井ノ間ニ聞ユ。斯ノ如キハ必スシモ野人ノ泣キ言トシテ一笑ニ附スヘカラスト雖モ、亦必スシモ之カ爲其レ丈ケ物價ノ騰貴ヲ惹起シタリト速斷スヘカラサルナリ。我國ノ現行租稅制度ハ直接ニ生産行爲ヲ捕打シテ却テ消費行爲ニ寛ナラサルヤノ疑ナキ能ハス、各地ニ於ケル料理店業及類似ノ營業ノ繁昌増加スル觀アルハ、豈之ヲ

證スルニアラストセンヤ。

第七節 轉嫁ト外國人

租稅ノ轉嫁ハ強チ内國人ノ間ノミニ止マラスシテ、或ハ其負擔ヲ以テ外國人ニ歸セシムルコトアリ、之ニ反シテ須ラク外國人ノ負擔スヘキ租稅ヲ移シテ内國人ニ負ハシムルコトアリ、須ラク外國人ノ負擔スヘキモノヲ以テ内國人ノ負擔ニ歸セシムルハ戻稅輸出獎勵金等ナリ。此等ハ外國市場ニ於テ内國品ノ賣値ヲ低クシ頼リテ以テ外國人ノ需用ヲ誘起スルカ故ニ、取リモ直サス内國人民ノ負擔ニ由リテ其價格ヲ安クスルモノナリ、近時獨米諸國ノ商工業者カ輸出貿易上慣用ノ手段タル「だむびんぐ」換言スレハ内國市場ニ於ケル賣値ヲ高クスル代リニ外國市場ニ於テ安賣リスル方法ハ尤モ其甚タシキモノナリ。

之ニ反シ内國人ノ負擔ヲシテ其實外國商人又ハ消費者ニ歸セシムル場合